

GLAFS

博士課程教育リーディングプログラム

「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム」

Graduate Program in Gerontology: Global Leadership initiative for an Age-Friendly Society

2019 活動報告書

目次

CONTENTS

はじめに	002
第1章 プログラムについて	003
1 プログラムの概要	004
2 カリキュラムと修了要件	005
3 プログラム担当教員	008
4 履修生に対する経済的支援	011
5 応募状況と合格者	012
第2章 2019年度教育活動	013
1 講義群	014
2 演習	022
3 国際・産学活動	054
4 シンポジウム	057
第3章 若手研究者による研究成果	061
1 論文等	062
2 受賞歴	081
3 コース生による研究成果	082
4 コース生受賞歴	094
第4章 広報活動	095
[添付資料] 国内シンポジウム・レポート	103

はじめに

この報告書は GLAFS の 2019 年度の活動報告です。

「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム」(GLAFS)には、2019 年度末現在、63 人のコース生が在籍しています。

活力ある超高齢社会を実現するためには、分野横断的専門家のチームと地域住民、行政、企業等による協働的活動を主導し、様々な現場の様々な課題を解決する力を備えた多様な人材が必要になります。

GLAFS では、いわゆる座学としての高齢社会問題に関する俯瞰的講義や先端的テーマについてのセミナーの他、様々な専門の学生や教員がチームを組んで、地域住民や行政等と現実的な課題解決に取り組むフィールド演習(グループ共同演習)や、様々な現場の第一線で活躍されている実践家をお招きして深い議論をしていただくコアセミナーなどを通して、自らの専門分野に関する研究能力だけでなく、俯瞰力・実践力を身に着けたリーダーの養成に注力してきました。2019 度末には修了生 10 名(初年度からの計 35 名)を送り出すなど、その成果が表れ始めてきたところです。最後に、GLAFS は、IOG(東京大学高齢社会総合研究機構)がコアとなり提案し実施してきましたが、意欲の高い学生の積極的な活動と、文科省、東大本部、工学系をはじめとする関連部局のご支援、指導教員のご協力、ならびに GLAFS 教職員の努力により、継続できたものです。ここに、関係各位に深く感謝するとともに、分野横断型教育プログラムの新たな実践として、今後の大学院教育の改善につながることを心より祈念します。なお、次年度以降は、東京大学国際卓越大学院教育プログラムの一つとして継続することが決まっており、GLAFS 在籍生に対する教育もその修了まで継続する所存です。

2020 年 3 月

プログラムコーディネーター

東京大学高齢社会総合研究機構・機構長

工学系研究科教授

原田 昇

1. プログラムについて

1・プログラムの概要

本プログラムの目的

日本は、2030年には人口の1/3が高齢者、1/5が後期高齢者という超高齢社会になることが予想されている。また、韓国やシンガポールも2040年には高齢者人口が1/3を超え、中国も2060年には高齢者人口が1/3に達することが予測される。こうした超高齢社会は世界の歴史に先例のない未知の領域である。高齢化最先進国としての日本には、世界に先駆け、活力ある超高齢社会の姿を構想し実現する責務がある。本プログラムは、高齢者が活力を持って地域社会の中で生活できる期間をより長く、要介護期間や施設収容期間を最小化することを通じて、高齢者自身の生活の質を高め、家族と社会の負担を軽減し、社会全体の活力を維持向上するため、東京大学の高齢社会総合研究機構（IOG）を中核に9研究科30専攻の総力を結集し、修士博士一貫の大学院教育により、活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダーを養成しようとするものである。

活力ある超高齢化社会を実現するためには、都市や地域での市民生活を支える生活環境基盤の3領域、すなわち、

1【い（医）】ケア・サポート・システム：医療・看護・介護・

みまもり・保育・子育て・福祉等の統合的システム

2【しょく（食・職）】社会的サポート・システム：社会的包

摂・社会参加・ムコミュニティ活動等の促進体制

3【じゅう（住）】物的空間的生活環境システム：居住環境・歩行

環境・交通環境・街並環境・商業環境・コミュニティ交流施設

・オープンスペースや生活支援システム

をリデザインし組み替えていく必要がある。こうした新しい超高齢社会のための社会システムを構想し実現する取り組みを世界各地の現場で主導する、高度な人材を養成することが本プログラムの目的である。



本プログラムの組織
※IOG：高齢社会総合研究機構

本プログラムの特色

本プログラムでは、本学の1機構9研究科30専攻の教員や連携企業・自治体および海外の大学等のサポートの下で、選り抜かれた大学院生が、

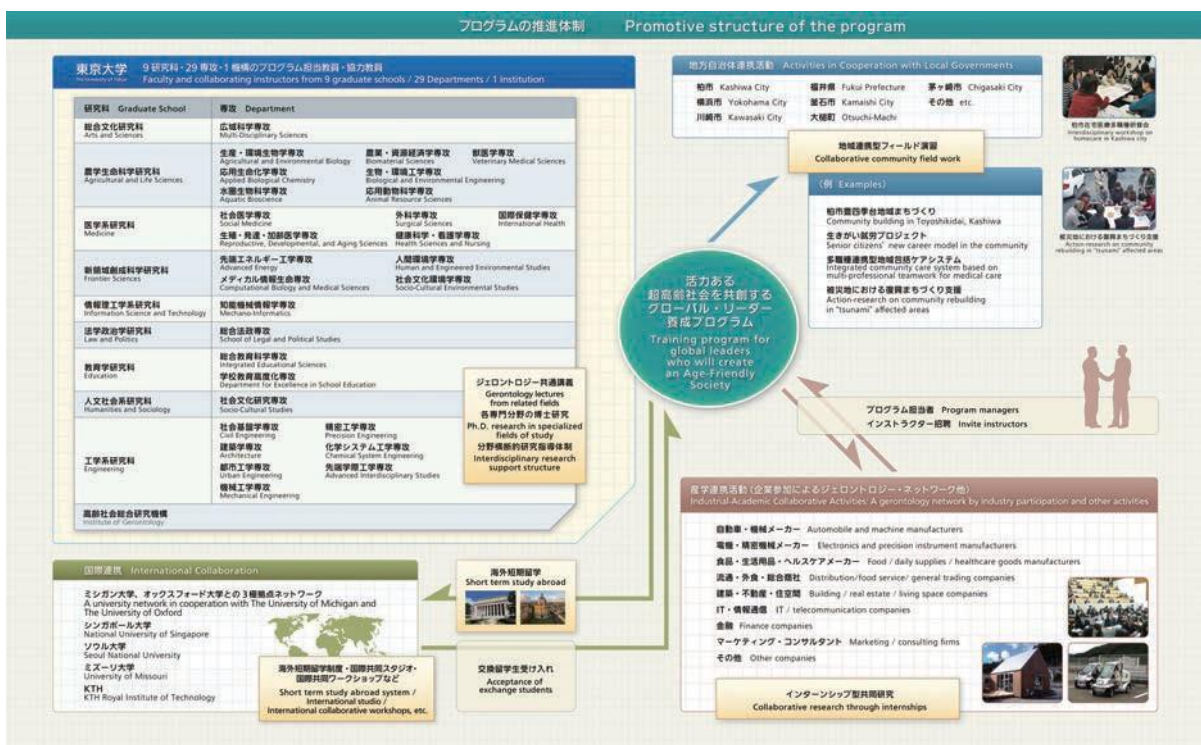
1. 高齢社会問題に関する講義を通じ、高齢社会問題に関する俯瞰的総合的な知識を獲得し
2. 多様な分野の専門家とチームを組んで課題解決に取り組むフィールド・アクション・スタディ演習や、国際的チームワーク力を育成するグローバル演習によって、現実社会における課題解決能力を養い

3. 高齢社会の実態や真のニーズを反映した独創的で質の高い博士研究を成し遂げることを通じ、活力ある超高齢社会を共創するための能力

すなわち、

1. 自身の専門分野に関する専門的学術研究能力
2. 高齢社会問題に関する幅広い俯瞰力
3. 多分野の専門家チームを主導して問題解決に取り組む実践的課題解決能力

の3つの能力を兼ね備えた、グローバルなリーダーシップを発揮できる人材を養成する。



プログラムの特色

2・カリキュラムと修了要件

カリキュラム

本プログラムでは次のような「講義」と「演習」による独自のカリキュラムを組んで、超高齢社会を共創していくリーダーを育成する。

【俯瞰力を養う高齢社会総合研究学・講義群】

9 研究科・30 専攻・1 機構の教員が連携し、様々な角度から超高齢社会の課題を講義。

■ 高齢社会総合研究学概論ⅠおよびⅡ

■ 高齢社会総合研究学特論

福祉社会を支える制度体系

超高齢社会の住まい・まちづくり

人生 100 年時代のライフコース論

高齢社会のケア・サポート・システム

高齢者法

高齢社会の人文学・社会科学

高齢者の食と健康（維持）

ジェロンテクノロジー

超高齢社会を支える情報学

【分野横断的にアプローチする演習】

■ 実践的課題解決能力を養うフィールド演習

演習指導には企業・行政等の現場の実務家をインストラクターとして招請。

F 演習 1：分野横断的チームを組んで地域社会の現実の課題に取り組むコミュニティ・アクション型（地域連携）

F 演習 2：多様な高齢者や市民に寄り添い心を通わせるケア・システム実習型（対人ケア実習）

F 演習 3：企業・行政等の現場で先端的課題に取り組むインターンシップ型（産学連携）

■ グローバルなリーダーシップを養うグローバル演習

高齢社会総合研究に関する世界トップの教育拠点であるミシガン大学とオックスフォード大学、そして東京大学が連携。

G 演習 1：英語によるコミュニケーションとプレゼンテーション

G 演習 2：海外短期留学制度（留学生は海外または国内インターンシップ）

G 演習 3：国際共同ワークショップ・スタジオ、外国人特別講義／セミナー（希望者のみ）

■ 分野横断的研究指導を行うコアセミナー

他分野の教員やインストラクター、学生等による分野横断的なディスカッションの場を通じて学際的な研究指導の体制を確保。

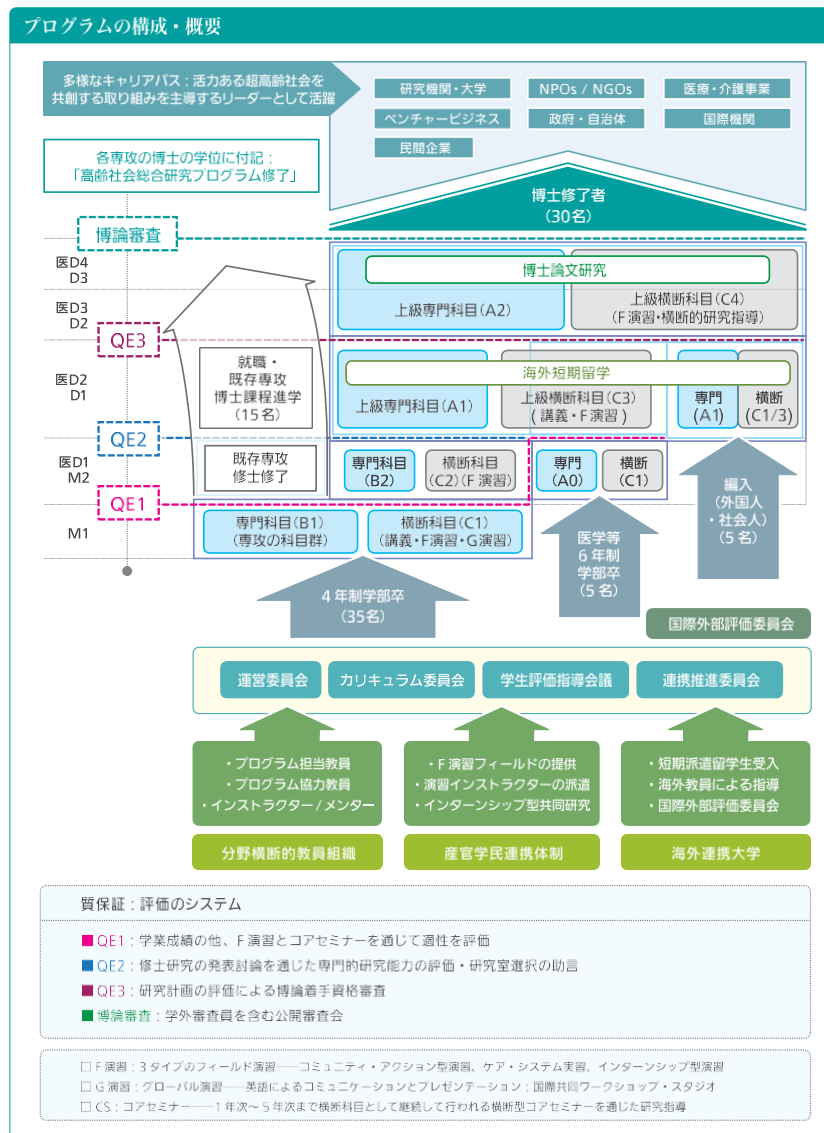
CS1：専攻での専門的研究が、現実の高齢社会問題の解決に資するものとなるよう、視野を広げ、発想を深める研究指導

CS2：様々な現場で活動されている第一人者の方をお招きし、お話を伺い、ディスカッションするケーススタディ

履修要件

本プログラムのコース生は、所属専攻の履修要件を満たすと同時に、本プログラムの提供する科目について 20 単位（講義 10 単位・演習 10 単位）以上、ただし、4 年制博士課程に所属するコース生は 18 単位（講義 10 単位・演習 8 単位）以上を、博士後期課程入学時から本プログラムに編入したコース生は 16 単位（講義 10 単位・演習 6 単位）以上を取得し、所属専攻における博士論文の審査に合格し、本プログラム固有の博士論文の審査に合格した場合、「高齢社会総合研究プログラム修了証」が授与されるとともに、所属専攻が授ける博士の学位記に「高齢社会総合研究プログラム修了」という認定が付記される。

なお、博士前期課程（修士課程）において（4 年制博士課程においては 2 年次年度末までに）12 単位（講義 8 単位・演習 4 単位）以上を取得すること。ただし、博士後期課程入学時から本プログラムに参加したコース生は博士後期課程修了時までには 16 単位（講義 10 単位・演習 6 単位）以上を取得するものとする。（2019 年度シラバスより）



プログラムの仕組み

3・プログラム担当教員

プログラム担当教員

職名は2020年度3月現在

氏名	所属部局・職名	専門	役割分担
(プログラム責任者)			
大久保 達也	大学院工学系研究科・研究科長／総括プロジェクト機構プラチナ社会総括寄附講座・教授(兼務)	プラチナ社会、化学工学、ナノ材料	事業統括、生活サポートシステム分野担当
(プログラム・コーディネーター)			
原田 昇	大学院工学系研究科都市工学専攻・教授／高齢社会総合研究機構・機構長	都市交通計画、交通まちづくり	プログラムの企画推進調整、運営委員会委員長、居住環境分野担当
(プログラム担当教員)			
秋山 弘子	高齢社会総合研究機構・特任研究員／東京大学・名誉教授	老年学	社会システム分野担当、カリキュラム編成担当、国際連携推進担当
辻 哲夫	高齢社会総合研究機構・特任教授	在宅医療、ケア政策 社会保障政策	ケアシステム分野担当、カリキュラム編成担当、産官学民連携推進担当
大方 潤一郎	高齢社会総合研究機構・特任教授	都市工学、まちづくり	プログラムの企画推進調整、居住環境分野担当
田中 敏明	高齢社会総合研究機構・特任教授	福祉工学、理学療法 学、人間工学、病態 運動学	生活サポートシステム分野担当
飯島 勝矢	高齢社会総合研究機構・教授・副機構長	老年医学、在宅医療 虚弱予防、医学教育	ケアシステム分野担当、カリキュラム編成担当
白波瀬 佐和子	大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻・教授	社会学	社会システム分野担当
牧野 篤	大学院教育学研究科総合教育科学専攻・教授／高齢社会総合研究機構・副機構長	社会教育学、生涯学 習論	社会システム分野担当、カリキュラム編成担当
東郷 史治	大学院教育学研究科総合教育科学専攻・准教授	教育生理学	ケアシステム分野担当、プログラム評価担当
北村 友人	大学院教育学研究科学校教育高度化専攻・准教授	教育政策、国際教育 開発論	社会システム分野担当、国際連携推進担当
加藤 淳子	大学院法学政治学研究科総合法政専攻・教授	政治学	社会システム分野担当、国際連携推進担当
横山 ゆりか	大学院総合文化研究科広域科学専攻・教授	環境心理学、環境行 動学、建築計画学、 都市計画学	社会システム分野担当、フィールド演習企画担当
光石 衛	大学院工学系研究科機械工学専攻・教授、 大学執行役・副学長	機械工学、ロボティ ック医療システム	生活サポートシステム分野担当
羽藤 英二	大学院工学系研究科社会基盤学専攻・教授	都市計画、交通計画	居住環境分野担当
大月 敏雄	大学院工学系研究科建築学専攻・教授	建築計画、住宅計画	居住環境分野担当、カリキュラム編成担当
中尾 政之	大学院工学系研究科機械工学専攻・教授	生産技術、ナノ転写 失敗学、創造設計	生活サポートシステム分野担当、産官学民連携推進担当
浅間 一	大学院工学系研究科精密工学専攻・教授	サービスロボテック ス、身体性システム 科学、自律分散シ ステム	生活サポートシステム分野担当
檜山 敦	先端科学技術研究センター・講師	複合現実感、ヒュー マンインターフェ イス、ジェロントク ノロジー	生活サポートシステム担当

安永 円理子	大学院農学生命科学研究科附属生態調和農学機構・准教授（同研究科生物・環境工学専攻兼任／生産・環境生物学専攻兼任）	ポストハーベスト工学	食分野担当
阿部 啓子	大学院農学生命科学研究科応用生命化学専攻・特任教授	食品科学、味覚科学 遺伝子科学	食分野担当、産官学民連携推進担当
佐藤 隆一郎	大学院農学生命科学研究科応用生命化学専攻・教授	食品生化学	食分野担当、プログラム自己評価・外部評価担当
潮 秀樹	大学院農学生命科学研究科水圏生物科学専攻・教授	水産化学・食品科学	食分野担当
中嶋 康博	大学院農学生命科学研究科農業・資源経済学専攻・教授	農業経済学、フードシステム論	食分野担当
八木 洋憲	大学院農学生命科学研究科農業・資源経済学専攻・准教授	農業経営学、農村計画学	食分野担当
関崎 勉	大学院農学生命科学研究科食の安全研究センター長・教授（同研究科応用動物科学専攻兼任／獣医学専攻兼任）	獣医細菌学、食品病原微生物学	食分野担当
橋本 英樹	大学院医学系研究科公共健康医学専攻・教授	医療経済学、社会学	ケアシステム分野担当、社会システム分野担当、フィールド演習企画担当
秋下 雅弘	大学院医学系研究科生殖・発達・加齢医学専攻・教授／高齢社会総合研究機構・副機構長	老年医学	ケアシステム分野担当、カリキュラム編成担当
小川 純人	大学院医学系研究科生殖・発達・加齢医学専攻・准教授	老年医学	ケアシステム分野担当
久米 春喜	大学院医学系研究科外科学専攻・教授	泌尿器外科学	ケアシステム分野担当
芳賀 信彦	大学院医学系研究科外科学専攻・教授	リハビリテーション医学	ケアシステム分野担当
神馬 征峰	大学院医学系研究科国際保健学専攻・教授	国際保健学、ヘルスプロモーション	ケアシステム分野担当
山本 則子	大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻・教授	高齢者在宅長期ケア看護学（nursing）	ケアシステム分野担当
森 武俊	大学院医学系研究科ライフサポート技術開発学（モルテン）寄附講座・特任教授	センサ医療情報工学 人間機械系、看護工学、ロボティクス	ケアシステム分野担当、生活サポートシステム分野担当
堀 洋一	大学院新領域創成科学研究科先端エネルギー工学専攻・教授	電気工学、制御工学	生活サポートシステム分野担当
内丸 薫	大学院新領域創成科学研究科メディカル情報生命専攻・教授	血液内科学	ケアシステム分野担当
四柳 宏	大学院新領域創成科学研究科メディカル情報生命専攻・教授	感染症学	ケアシステム分野担当、フィールド演習企画運営担当
鎌田 実	大学院新領域創成科学研究科人間環境学専攻・教授	生活支援工学	プログラムコーディネーター補佐、生活サポートシステム分野担当、産官学民連携推進担当
飛原 英治	大学院新領域創成科学研究科人間環境学専攻・教授	熱工学、冷凍空調工学	生活サポートシステム分野担当
岡部 明子	大学院新領域創成科学研究科人間環境学専攻・教授	建築デザイン、都市政策	居住環境分野担当
本田 利器	大学院新領域創成科学研究科国際協力学専攻・教授	防災、地震工学、インフラ維持管理	社会システム分野担当
鳴海 拓志	大学院情報理工学系研究科知能機械情報学専攻・准教授	バーチャルリアリティ、人間拡張工学	生活サポートシステム担当
菅原 育子	高齢社会総合研究機構・特任講師	社会心理学、社会老年学	社会システム分野担当
村山 洋史	高齢社会総合研究機構・特任講師	社会疫学、公衆衛生学、老年学	ケアシステム分野担当
後藤 純	高齢社会総合研究機構・特任講師	都市計画、まちづくり、地域包括ケアシステム、総合老年学	居住環境分野担当

学外プログラム担当者

職名は 2019 年 4 月現在

氏名	所属部局・職名	専門	役割分担
Toni Claudette Antonucci	ミシガン大学・副学長 (Associate Vice President for Research, Social Sciences and the Humanities)	ジェロントロジー	国際連携アドバイザー
David English	ミズーリ大学法科大学院・教授	高齢者法	国際連携アドバイザー
Sarah Harper	Director, Oxford Institute of Population Ageing / Professor of Gerontology and Senior Research Fellow, Nuffield College, Oxford University	ソーシャルジェロントロジー	国際連携推進担当
Gyounghae Han	Professor, Division of Consumer Studies and Child and Family Studies, College of Human Ecology, Seoul National University	Family Study	国際連携推進担当
Angelique Chan	Associate Professor, Department of Sociology, National University of Singapore and Duke-NUS Graduate Medical School	社会学	国際連携推進担当
John Creighton Campbell	ミシガン大学・名誉教授/高齢社会総合研究機構・客員研究員	Gerontology	国際連携推進アドバイザー
大内 尉 義	国家公務員共済組合連合会虎の門病院長・院長/東京大学・名誉教授	老年医学、老年学	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
永田 久 美子	社会福祉法人浴風会認知症介護研究・研修センター・研究部部长	認知症ケア、当事者ネットワーク、地域生活支援、地域支援ネットワーク	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
太田 秀 樹	医療法人アスミス・理事長	高齢者・障がい者医療	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
秋山 正 子	(株) ケアーズ・代表取締役/白十字訪問看護ステーション・統括所長/NPO マギーズ東京・共同代表理事	地域看護、在宅医療連携、エンド・オブ・ライフケア	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
野呂 順 一	(株) ニッセイ基礎研究所・代表取締役会長	保険数理、年金数理 経済統計	産官学民連携アドバイザー
有吉 善 則	大和ハウス工業株式会社・取締役常務執行役員、総合技術研究所長、住宅系商品開発担当、環境副担当	住宅計画、スマートハウス、スマートシティ	産官学民連携アドバイザー
滝山 真 也	株式会社ベネッセホールディングス・取締役兼上席執行役員/株式会社ベネッセスタイルケア・代表取締役社長	介護事業等のグループ経営	産官学民連携アドバイザー
関根 千 佳	株式会社ユーディット・会長兼シニアフェロー/放送大学・客員教授/同志社大学・客員教授	ユニバーサルデザイン、老年学、IT と UD による地域活性化	産官学民連携アドバイザー
大熊 由 紀子	国際医療福祉大学大学院・教授	医療福祉ジャーナリズム	産官学民連携アドバイザー
南 砂	読売新聞東京本社・常務取締役調査研究本部長	医療・医学、科学技術政策、社会保障政策および社会一般、メディア論	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
河出 卓 郎	日本新聞博物館・新聞製作マネージャー	社会保障論	産官学民連携アドバイザー
宮島 俊 彦	三井住友海上火災保険株式会社・顧問/岡山大学・客員教授/日本介護経営学会・理事/東京女子医科大学・監事/高齢社会総合研究機構・客員研究員	高齢者ケアシステム	産官学民連携アドバイザー
樋口 範 雄	武蔵野大学法学部・特任教授/東京大学・名誉教授	英米法、医事法、信託法、高齢者法	社会システム分野担当、国際連携推進担当
武川 正 吾	明治学院大学社会学部・教授	社会政策	社会システム分野担当

特任助教・特任研究員

職名は2019年4月現在

氏名	所属部局・職名	専門
木全 真理	大学院工学系研究科附属国際工学教育推進機構・特任助教	在宅看護
荻野 亮吾	先端科学技術研究センター・特任助教	社会教育、生涯学習
西野 亜希子	大学院工学系研究科建築学専攻・特任助教	建築計画、住宅改修
藤崎 万裕	高齢社会総合研究機構・特任助教	地域看護学
税所 真也	高齢社会総合研究機構・特任助教	福祉社会学、家族社会学

4・履修生に対する経済的支援

奨学金制度

優秀な学生が経済的な理由から博士課程への進学を断念することのないよう、学生の希望と能力に応じ奨励金を支給する制度が用意されている。2019年度は、博士前期課程（修士課程）2年次のコース生には、概ね授業料に相当する額、博士後期課程のコース生には、学業成績等に応じ月額20万円を上限とした額と定めた。

留学制度

原則として全学生を第3年次（医学系等4年生博士課程にあつては第2年次）の夏休み（8月）から冬学期の間、6ヶ月以内の海外短期留学で派遣し、その旅費を支給することとした。以下がその概略である。

- ミシガン大学：修士課程レベル以上のISR（Institute for Social Research）、SPH（School of Public Health）などのサマースクールや短期コースの受講。
- ミズーリ大学：主に高齢社会問題について法学分野の研究を遂行する学生を想定。
- オックスフォード大学：修士課程レベル以上のサマースクールや短期コースの受講。
- アジア地域における高齢社会問題を研究したい学生のためにはシンガポール大学、ソウル大学等と連携。
- その他：上記に限らず学生は、博士研究のテーマに適した留学先への留学が可能。
*海外短期留学には、大学への留学だけでなく、海外の企業等におけるインターンシップ型留学を含む。

5・応募状況と合格者

2019 年 応募状況と合格者

プログラム募集定員数（実数）		30 人
① 応募学生数		22 人
	うち留学生数	8 人
	うち自大学出身者数	2 人（ 0 人）
	うち他大学出身者数	20 人（ 8 人）
	うち社会人学生数	9 人（ 3 人）
	うち女性数	11 人（ 3 人）
② 合格者数		16 人
	うち留学生数	4 人
	うち自大学出身者数	2 人（ 0 人）
	うち他大学出身者数	14 人（ 4 人）
	うち社会人学生数	8 人（ 2 人）
	うち女性数	10 人（ 2 人）
③ ②のうち受講学生数		16 人
	うち留学生数	4 人
	うち自大学出身者数	2 人（ 0 人）
	うち他大学出身者数	14 人（ 4 人）
	うち社会人学生数	8 人（ 2 人）
	うち女性数	10 人（ 2 人）
プログラム合格倍率（①応募学生数／②合格者数） （小数点第三位を四捨五入）		1.38 倍
充足率（合格者数／募集定員）		53.00%
【備考】 ※ 編入学生： 2019 年度：修士課程 2 年次に編入学 2 名、博士後期課程 1 年次に編入学 8 名 ※（ ）は留学生の人数 ※2020 年 3 月 31 日現在		

2. 2019 年度教育活動

1・講義群

2019年度には以下のように必修・選択必修を開講し、このほかにも21の選択講義を設けた。

■ 高齢社会総合研究学概論Ⅰ（高齢者の体と心：老いとつきあう）

本授業では高齢社会におけるさまざまな課題に対して、主として高齢者の体と心について、国内のトップ講師からの講義を受け、老いとつきあうとはどういうことであるのか、その基礎を分野横断的に学ぶことが狙いである。本講義を通じて、高齢者の健康寿命を延ばし、経済活動・地域活動への参加を促すことによって高齢者が快活に暮らし、社会の支え手となって活躍する活力ある超高齢社会について考えていく。

【授業日程】

- | | | |
|------|------|--|
| 4/10 | 第1回 | 高齢期の社会関係と well-being（菅原育子：高齢社会総合研究機構特任講師） |
| 4/17 | 第2回 | なぜ老いる？ならば上手に老いるには？（飯島勝矢：高齢社会総合研究機構教授・副機構長） |
| 4/24 | 第3回 | 老化と生物学（孫輔卿：医学部在宅医療学講座特任助教） |
| 5/8 | 第4回 | 疾病・障害とヘルスプロモーション（秋下雅弘：医学系研究科教授） |
| 5/15 | 第5回 | シニアの学ぶ、働く、遊ぶ（牧野篤：教育学研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長） |
| 5/22 | 第6回 | 高齢者と看護学（木全真理：工学系研究科特任助教） |
| 5/29 | 第7回 | 身体機能を補う福祉工学機器（伊福部達：北海道大学名誉教授・東京大学名誉教授・北海道科学大学特命教授・高齢社会総合研究機構特任研究員） |
| 6/5 | 第8回 | ケアの当事者学（上野千鶴子：NPO 法人ウィメンズアクションネットワーク〈WAN〉理事長） |
| 6/12 | 第9回 | 認知症家族介護の臨床社会学（井口高志：人文社会系研究科准教授） |
| 6/19 | 第10回 | 身体・認知機能を活かしたコミュニティビジネス（戸枝陽基：社会法人むそう代表） |
| 6/26 | 第11回 | ジェロントロジー：長寿社会を支える学際科学（秋山弘子：東京大学名誉教授・高齢社会総合研究機構特任研究員） |
| 7/3 | 第12回 | 人生の最終段階のケア（山本則子：医学系研究科教授） |
| 7/10 | 第13回 | 栄養とエイジング（阿部啓子：東京大学名誉教授・農学生命科学研究科特任教授） |

■ 高齢社会総合研究学概論Ⅱ（高齢社会のリ・デザイン）

本授業では主として社会システムおよび、それを支える居住環境システムについて、国内のトップ講師からの講義を受け、高齢社会のリ・デザインについて分野横断的に学ぶことが狙いである。

本講義を通じて活動レベルが低下して介助が必要になった後も、施設収容により対応するのではなく、住み慣れた地域社会の中で、できるだけ自立的に活力を維持しながら暮らせる社会システム及び居住環境システムについて考える。

【授業日程】

- 9/25 第1回 活力ある超高齢社会の構想と共創（後藤純：高齢社会総合研究機構特任講師）
- 10/2 第2回 21世紀の医療・介護・福祉のかたちを考える（辻哲夫：高齢社会総合研究機構特任教授）
- 10/9 第3回 高齢期の住まい方（大月敏雄：工学系研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長）
- 10/16 第4回 年齢に基づく雇用システムと高齢者雇用（濱口桂一郎：独立行政法人労働政策研究・研修機構労働政策研究所長）
- 10/23 第5回 人口減少社会における年金と社会保障財政（岩本康志：国立国会図書館調査及び立法考査局専門調査員）
- 10/30 第6回 高齢者の移動を支える（鎌田実：新領域創成科学研究科教授）
- 11/6 第7回 シニア×ICT（廣瀬通孝：情報理工学系研究科教授）
- 11/20 第8回 高齢者の交通まちづくり（原田昇：工学系研究科教授・高齢社会総合研究機構機構長）
- 11/27 第9回 自己決定と本人保護（関ふ佐子：横浜国立大学教授）
- 12/4 第10回 小規模多機能型居宅介護（柴田範子：NPO法人楽理事長）
- 12/11 第11回 高齢期の健康づくり：公衆衛生学の視点から（村山洋史：高齢社会総合研究機構特任講師）
- 12/18 第12回 超高齢社会を支えるコミュニティの拠点と組織（荻野亮吾：先端科学技術研究センター特任助教）
- 1/8 第13回 地域包括ケアシステムの地域実装（関野幸吉：SOMPOケア㈱役員理事）

■高齢社会総合研究学特論Ⅰ（福祉社会を支える制度体系）

国内の福祉社会を支える諸制度について、〈医療〉、〈介護〉、〈労働と生活〉、〈子育て〉、〈老後の生活と死後の準備〉、〈住まい〉、〈コミュニティとまちづくり〉の7つの枠組みから体系的に捉え、各制度の実態およびその課題について学ぶ。とくに、理論と実務の両面から検討することを通して、実践的・実務的な「制度活用論」「制度設計論」を身につけることを目的とする。

【授業日程】

- 11/21 第1回 医療① 医療制度の実態と課題（猪飼周平：一橋大学教授）
- 11/21 第2回 医療② 医療制度の実態と課題（猪飼周平：一橋大学教授）
- 11/27 第3回 子育て 子育てに関する諸制度の実態と課題（島田桂吾：静岡大学講師）
- 11/28 第4回 介護① 介護保険制度の実態と課題（森川美絵：津田塾大学教授）
- 12/5 第5回 介護② 高齢者福祉の到達点と課題（藤崎宏子：お茶の水女子大学名誉教授）

- 12/6 第6回 少子高齢化と労働政策の急転回——非正規雇用問題を中心に（高橋康二：独立行政法人労働政策研究・研修機構副主任研究員）
- 12/12 第7回 コミュニティとまちづくり① コミュニティ活動に関する諸制度の実態と課題（玉野和志：首都大学東京教授）
- 12/12 第8回 住まい① 高齢者の居住に関わる制度の歴史的展開（祐成保志：人文社会系研究科准教授）
- 12/19 第9回 老後の生活と死後の準備——成年後見制度・相続（奥山恭子：横浜国立大学名誉教授）
- 12/19 第10回 コミュニティとまちづくり② 地方自治体における独自の「まちづくり」政策（大方潤一郎：高齢社会総合研究機構特任教授・明治大学特任教授）
- 1/9 第11回 住まい② 公営住宅制度の歴史（大月敏雄：工学系研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長）
- 1/9 第12回 高齢者福祉と権利擁護（税所真也：高齢社会総合研究機構特任助教）
- 1/16 第13回 総括（後藤純：高齢社会総合研究機構特任講師）

■ 高齢社会総合研究学特論Ⅱ（超高齢社会の住まい・まちづくり）

超高齢社会の諸課題に対応した地域社会の物的・社会的な生活環境について、多面的に講義を行う。

【授業日程】

- 4/9 総論 都市と計画
第1・2回 高齢社会対応の住まいとまちづくり（大方潤一郎：東京大学高齢社会総合研究機構特任教授・明治大学特任教授）
- 4/16 交通とまちづくり
第3回 高齢社会と交通（原田昇：工学系研究科教授・高齢社会総合研究機構機構長）
第4回 高齢者の移動とまちづくり（大森宣暁：宇都宮大学教授）
- 4/23 ユニバーサルデザイン・バリアフリーのまちづくり
第5回 ユニバーサルデザインと交通（秋山哲男：中央大学研究開発機構教授）
第6回 視覚障害者の歩行環境（松田雄二：工学系研究科准教授）
- 5/7 高齢期の生活と住まい
第7回 住まいの日常災害と高齢者（直井英雄：東京理科大学名誉教授）
第8回 高齢者・障害者の住まい（松田雄二：工学系研究科准教授）
- 5/14 バリアフリーのまちづくりと地域居住
第9回 バリアフリーのまちづくり（高橋儀平：東洋大学客員研究員）

第 10 回 高齢期の住まいと地域居住（大月敏雄：工学系研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長）

5/21 高齢期の住まいと地域

第 11・12 回 高齢期の住まい 1（田中紀之：高齢社会総合研究機構特任研究員）

5/28 高齢期の住まいと地域

第 13・14 回 高齢期の住まい 2（西野亜希子：工学系研究科特任助教）

6/4 地域とまちづくり

第 15・16 回 地域配置論（後藤純：高齢社会総合研究機構特任講師）

■高齢社会総合研究学特論Ⅲ（人生 100 年時代のライフコース論）

人生 100 年時代の到来にあたって「生きる」「老いる」「死ぬ」をめぐる現実が変化しつつある。長期化する人生の実態とその課題について、心理学、哲学、教育学、社会学の幅広い観点から議論する。

【授業日程】

4/11 第 1 回 人生 100 年時代、あなたはどうか生きる？（袖井孝子：お茶の水女子大学名誉教授）

4/18 第 2 回 楽しさベースの〈ちいさな社会〉と人々の〈学び〉：人生 100 年時代のライフコース論（牧野篤：教育学研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長）

4/25 第 3 回 高齢期の家族、友人、地域とのつながりとその変化（小林江里香：東京都健康長寿医療センター研究所 研究副部長）

5/9 第 4 回 高齢期の well-being：社会的・物理的環境の観点から（高山緑：慶應義塾大学教授）

5/16 第 5 回 高齢者のこころの発達とケア（高橋美保：教育学研究科教授）

5/23 第 6 回 長寿時代のエンドオブライフ・ケア：臨床倫理の視点から（会田薫子：人文社会系研究科特任教授）

5/30 第 7 回 ポスト診断時代における認知症の社会学の課題：認知症をめぐる諸実践の社会学（井口高志：人文社会系研究科准教授）

6/6 第 8 回 老いと病いの現象学（榊原哲也：人文社会系研究科教授）

6/13 第 9 回 超高齢社会におけるサクセスフルエイジング（榎藤恭之：大阪大学大学院教授）

6/20 第 10 回 成人期から高齢期にかけての発達と学習（岩崎久美子：放送大学教授）

6/27 第 11 回 高齢化する職場を考える（今城志保：(株)リクルートマネジメントソリューションズ組織行動研究所主幹研究員）

7/4 第 12 回 超高齢社会における社会課題解決ビジネス（斉藤徹：(株)電通・シニアプロジェクト代表）

7/11 第 13 回 長寿社会に生きる（秋山弘子：東京大学名誉教授・高齢社会総合研究機構特任研究員）

■ 高齢社会総合研究学特論Ⅳ（高齢社会のケア・サポート・システム）

本科目では、超高齢社会で要介護状態になっても住み慣れた地域で住み続けられるシステムを構築していくため、高齢者の特性や生活を理解し、体系的に高齢社会における高齢者へのケア・サポート・システムを学ぶ。

本講義は高齢者の医学的な特徴、その特徴を踏まえたケア・サポート、そして高齢者を支える医療・介護を中心とした社会システムについて、最新の知識や技術を理解し、実社会に役立つ手法を考える。

【授業日程】

- 6/11 第1回 超高齢社会に求められるケア・サポート・システム（飯島勝矢：高齢社会総合研究機構教授・副機構長）
- 第2回 市区町村が整備する在宅医療・介護連携の体制（ザーリッチ陽子：西東京市健康福祉部高齢支援課在宅療養推進係係長、高岡里佳：西東京市在宅療養連携支援センターにしのわセンター長）
- 6/18 第3回 認知症の理解（亀山祐美：医学系研究科助教）
- 第4回 地域アセスメントに基づく地域づくり（成瀬昂：医学系研究科講師）
- 6/25 第5回 在宅医療を推進する新たな地域包括ケアシステム（太田秀樹：医療法人アスムス理事長）
- 第6回 高齢者医療の課題と目指すべき方向性（小島太郎：医学系研究科講師）
- 7/2 第7回 地域包括支援センターがかかわる地域見守りネットワーク（澤登久雄：社会医療法人財団仁医会 牧田総合病院 地域ささえあいセンター センター長）
- 第8回 地域包括ケアシステムに関連する法制度（宮島俊彦：岡山大学客員教授）
- 7/9 第9回 認知症ケアの最前線（永田久美子：認知症介護研究・研修東京センター研究部部長）
- 第10回 在宅医療・介護連携のための多職種連携（木全真理：工学系研究科特任助教）
- 7/16 第11回 看護がつむ 地域包括ケアシステム（秋山正子：白十字訪問看護ステーション統括所長・(株)ケアーズ代表取締役・NPO マギーズ東京共同代表理事）
- 第12回 地域包括ケアシステムの展望（中澤伸：社会福祉法人川崎聖風福祉会理事、久保真人：川崎市健康福祉局地域包括ケア推進室ケアシステム担当課長補佐・企画調整担当係長）

■ 高齢社会総合研究学特論Ⅵ（高齢者法）

高齢者に関わる法制度や政策課題について基礎を学ぶとともに、高齢者法の観点について、講義およびディスカッションを行う。

【授業日程】

- 9/26 第1回 高齢者法の概要と倫理的配慮

- 10/3 第2回 医療上の決定
- 10/10 第3回 在宅での医療
- 10/17 第4回 高齢者への医療給付制度・介護保険制度など
- 10/24 第5回 高齢者の住まい、特養・療養施設など
- 10/31 第6回 高齢者の住宅問題
- 11/7 第7回 年齢による差別
- 11/14 第8回 成年後見・財産管理と信託・相続
- 11/21 第9回 年金など経済的基盤
- 11/28 第10回 高齢者と職業・社会参加
- 12/5 第11回 情報化の進展と高齢者
- 12/12 第12回 高齢者と移動 交通
- 12/19 第13回 高齢者虐待・高齢者と犯罪

*講義はすべて樋口範雄（東京大学名誉教授・武蔵野大学特任教授）、高橋脩一（専修大学准教授）

■ 高齢社会総合研究学特論Ⅷ（高齢社会の人文・社会科学）

高齢社会・超高齢社会における人口構造、社会構造、社会政策などについて、おもに社会的なアプローチから学習し、国際的な見地から活力ある超高齢社会を研究するうえでの基本的な知識を得ることを目標とする。

【授業日程】

- 4/5 第1回 国際比較のなかでみた日本の高齢社会（武川正吾：明治学院大学教授）
- 4/19 第2回 欧米諸国の高齢社会①——スウェーデン（斉藤弥生：大阪大学教授）
- 4/26 第3回 介護者の国際比較（小川全夫：九州大学名誉教授）
- 5/10 第4回 欧米諸国の高齢社会②——オランダ（廣瀬真理子：東海大学教授）
- 5/24 第5回 欧米諸国の高齢社会③——アメリカ（安立清史：九州大学教授）
- 5/31 第6回 欧米諸国の高齢社会④——イギリス（平岡公一：お茶の水女子大学教授）
- 6/7 第7回 高齢者ケアの国際比較——ソーシャル・サポートを中心に（中田知生：北星学園大学准教授）
- 6/14 第8回 東アジアの高齢社会①——台湾（小島克久：国立社会保障・人口問題研究所情報調査分析研究部長）
- 6/21 第9回 東アジアの高齢社会②——韓国（金成垣：人文社会系研究科准教授）
- 6/28 第10回 東南アジアの高齢社会①——タイ（大泉啓一郎：亜細亜大学教授）
- 7/5 第11回 高齢者就労の OECD 国際比較（福井康貴：名古屋大学准教授）
- 7/12 第12回 東南アジアの高齢社会②——総論（安里和晃：京都大学准教授）
- 7/19 第13回 東アジアの高齢社会③——中国（張継元：華東師範大学専任講師）

■ 高齢社会総合研究学特論Ⅸ（高齢者の食と健康〈維持〉）

超高齢化を目前にして、いつまでも自立して自分らしく生きる為に、より早期からの健康維持～虚弱予防が重要な鍵となる。そこには本人自身の意識変容・行動変容と良好な社会環境の実現の両面が必要であり、高齢者の様々なプロダクティビティの増進が期待される。そこで、本講義では虚弱（フレイル：Frailty）の最たる要因である加齢性筋肉減少症（サルコペニア）を予防する為に、『食』を中心に据えた高齢期における早期からの健康維持を包括的な視点から、その予防対策に関する最新知識を学ぶ。

【授業日程】

- 11/12 第1回 フレイル予防はまさに「総合知によるまちづくり」—住民の食べる力を向上するため—（飯島勝矢：高齢社会総合研究機構教授・副機構長）
- 第2回 お口から考える健康寿命（小原由紀：東京都健康寿命医療センター研究所専門副部長）
- 11/19 第3回 「食の楽しみ」という原点から介入する高齢者の食育（川口美喜子：大妻女子大学教授）
- 第4回 高齢期における歯科口腔機能の重要性（平野浩彦：東京都健康長寿医療センター研究所 研究部長）
- 11/26 第5回 「口から食べる幸せ」をサポートするための包括的スキル（小山珠美：NPO 法人人口から食べる幸せを守る会理事長）
- 第6回 終末期を飾る「人生のエンディング食」（下平庄吾：飯塚病院緩和ケア病棟シェフ、柏木秀行：飯塚病院緩和ケア科医師）
- 12/3 第7回 地域における食支援—今までとこれから—（高瀬麻以：高齢社会総合研究機構特任研究員）
- 第8回 産学連携研究から「食」を考える（孫輔卿：医学部在宅医療学講座特任助教、泉綾子：高齢社会総合研究機構特任研究員）
- 12/10 第9回 食べることの意義と今後の食育のあり方（田中弥生：関東学院大学教授）
- 第10回 民間企業が高齢者の「食」をどう守るのか（日清オイリオグループ(株)、(株)クリニコ、(株)ヤヨイサンフーズ、伊那食品工業(株)）
- 12/17 第11回 超高齢になるまでの食習慣（潮秀樹：農学生命科学研究科教授）
- 第12回 「食」の現状、「食」の将来（潮秀樹：農学生命科学研究科教授）

■ 高齢社会総合研究学特論Ⅹ（ジェロンテクノロジー）

ジェロンテクノロジー（Gerontechnology）とは、高齢者を支援するためのシステムを扱う研究分野である。本科目では、高齢者の生活や社会活動などを支援するための情報・機械システムについて、オムニバス形式で講義を行う。本講義の内容は次の通りである。

- ・衰えた運動器・感覚器の機能補助を行うための運動支援・認知機能支援システム

- ・日進月歩での発展が著しい情報機器を用いた支援手法と、それら機器の使用の支援手法
- ・高齢者就労など社会的課題に対応するための仕組みとシステム

【授業日程】

- 9/27 第1回 『医療・介護・健康分野で期待されるサービスロボティクス』（浅間一：工学系研究科教授）
『高齢者支援技術における国内外の動向・当事者との技術開発』（井上剛伸：国立障害者リハビリテーションセンター研究所福祉機器開発部部長）
- 10/04 第2回 『感覚・コミュニケーションを支援する福祉工学』（伊福部達：北海道大学、東京大学名誉教授・北海道科学大学特命教授・高齢社会総合研究機構特任研究員）
『コミュニケーションロボットの現場での活用』（中村美緒：高齢社会総合研究機構特任研究員）
- 10/18 第3回 『高齢者就労における ICT の役割』（廣瀬通孝：情報理工学系研究科教授）
『元気高齢者のための新しい社会参画技術』（関根千佳：同志社大学客員教授・(株)ユーディット会長兼シニアフェロー）
- 11/01 第4回 『アクティブシニアのICT活用とユニバーサルデザイン』（小林正朋：日本IBM(株)東京基礎研究所アクセシビリティ・リサーチ担当）
『高齢者の遠隔就労・社会参加とテレプレゼンス技術』（檜山敦：先端科学技術研究センター講師）
- 11/08 第5回 『高齢者のための福祉・リハビリテーション工学』（田中敏明：高齢社会総合研究機構特任教授）
『臨床現場におけるリハビリ工学の実際』（吉田直樹：リハビリテーション科学総合研究所主任研究員・関西リハビリテーション病院リハビリテーション・エンジニア）
- 11/15 第6回 『高齢者の行動計測・見守りモニタリング』（森武俊：医学系研究科特任教授）
『高齢者の農作業のための軽労化支援スーツ』（田中孝之：北海道大学准教授）
- 11/29 第7回 『認知症高齢者の情報支援』（二瓶美里：新領域創成科学研究科講師）
『高齢社会のモビリティ構築に向けて』（鎌田実：新領域創成科学研究科教授）
- 12/06 第8回 『福祉機器実用化における課題～福祉ロボットなどの実例からわかること』（手嶋教之：立命館大学教授）
『高齢者支援機器と事業モデル—技術とニーズ、政策、社会をつなぐ—』（後藤芳一：日本福祉大学客員教授）

■ 高齢社会総合研究学特論 XI（超高齢社会を支える情報学）

ソーシャルメディアやAIの発達により、未来社会を描いていくうえで情報システムの発達を前提として考える時代になってきている。社会に展開していく情報システムとして、どのようなものが必要とされ、どのようなものを考えていくべきか、人間や社会に対する理解を深めつつ議論を展開

開する。社会における個人支援からコミュニティ、そして社会（超高齢社会）そのものの支援の軸と人間に対する物理的支援と心理的支援の二軸にわたった観点から整理し、バーチャルリアリティ、ヒューマンインタフェース、人間拡張工学、ロボティクス等の情報システム研究に関する最新の研究事例を調査し議論を行う。

[授業日程]

- 4/9 第1回 Topic: 福祉工学（伊福部達：北海道大学名誉教授・東京大学名誉教授・北海道科学大学特命教授・高齢社会総合研究機構特任研究員）
- 04/16 第2回 Topic: Gereon-Informatics（檜山敦：先端科学技術研究センター講師）
- 04/23 第3回 Topic: e-skin が変える新しい見守りのカタチ～生体情報プラットフォームによる予防医療の実現～（網盛一郎：(株)Xenoma 代表取締役）
- 05/07 第4回 Topic: Interaction dynamics（Gentiane Venture：東京農工大学卓越教授）
- 05/21 第5回 Topic: Work Style（久保田雅俊：(株)サーキュレーション代表取締役、大谷祐司：(株)サーキュレーション CTO）
- 05/28 第6回 Topic: IoT（玉川憲：(株)ソラコム代表取締役社長）
- 06/11 第7回 Topic: HRTech（山田裕一朗：ファインディ(株)CEO）
- 06/18 第8回 Topic: Robotics（青木俊介：ユカイ工学(株)代表）
- 07/02 第9回 Topic: Art×Society×Technology（串野真也：アーティスト・シューズデザイナー、藤島皓介：東京工業大学研究員・アストロバイオロジスト）
- 07/09 第10回 Topic: Wearable（水谷治央：PGV (株)CSO）
- 07/16 第11回 最終回（檜山敦：先端科学技術研究センター講師）

2・演習

フィールド演習

■ フィールド演習 1（コミュニティ・アクション型）

グループ共同研究

2019年度は、以下の5グループが活動した。

【共同研究 1】「高齢者に対する就労支援の在り方について」グループ

近年、人口減少社会を迎え、働く意欲と能力のある高齢者が、その能力を発揮して、希望すればいくつになっても働くことができるような環境整備（制度・政策・企業環境等）が求められている。日本では、高齢者雇用安定法の改正等、法律の制・改正を通じて高齢になっても働ける機会の提供に取り組んできた。そ

の結果、わが国における高齢者の就業率は最も高い水準にある。さらに 2020 年 2 月には政府が 70 歳までの就業機会の確保を企業の努力義務とする高年齢者雇用安定法などの改正案を閣議決定するなど、何歳になっても働き続けられる社会の実現に向けた取り組みが進められている。しかし、実際に働くことになった高齢者が、どうすれば働きやすいと感じられるか、職場環境（ハード面とソフト面）をどう整備すれば長く、快適に働くことができるかといった点はあまり議論されていない。そこで本研究では、年齢にかかわらず何歳でも働きやすい職場環境（これを我々は「Age-Friendly Workplace」(AFW)と呼んでいる)をテーマに研究を行っている。2018 年度は、70 歳以上の就業者、高齢者雇用に積極的な企業の人事担当者、高齢者雇用を支援する公的サービスの担当者へのインタビューを実施し、高齢者の希望する「仕事」と、高齢者が現状働いている場所とに、職種、雇用条件等様々な面で乖離があることを理解した。

そこで本年度は、高齢期に新しい仕事を探す高齢者の求職経験に着目し、高齢者の就業促進要因と阻害要因を検討することを研究目的とし、活動を進めてきた。主な活動内容として、4-6 月は高齢者の働き方に関する論文、報告書、現行制度などを調査、労働政策研究・研修機構の「高年齢者の雇用に関する調査（2015 年）」「高年齢者の継続雇用等、就業実態に関する調査（2011 年）」の個票データを入手し分析を行った。これらから、高齢者および企業の持つ課題の類型化を試みた。また、7 月以降は柏市生涯現役促進協議会の開催する、高年齢就業希望者向けセミナーに参加（8 月、11 月、1 月）し、仕事を探している高齢者の参与観察を行った。さらに参加者の中から同意いただいた方への半構造化インタビューを実施（11 月、1 月、2 月）し、過去の経歴から現在の求職または就職の状況までを時系列で分析することで、何が求職および就業の促進阻害要因になっているかを検討した。それらの結果を GLAFS の国内シンポジウム（2020 年 3 月）で発表した。インタビュー結果をまとめ、個票データの 2 次分析とともに論文化を目指している。

（特任講師・菅原育子）

【共同研究 2】「在宅介護で暮らし続けられる条件の検討」グループ

要介護期における高齢者の在宅療養生活の継続要因 —要介護度 100 スタイル—

わが国では、高齢化の進展とともに単身高齢者世帯の増加が予測され、最期まで自宅で生活する高齢者の増加が考えられる。高齢者が要介護になっても最期まで自宅で生活を続けるために、「医療・介護・住まい・予防・生活支援」を一体とした環境を整えることが必須である。そこで、要介護期にある高齢者の在宅生活の継続にかかわる要因を探索した。そのため、1) 一人暮らし高齢者の介護記録から生活に変化をもたらす要因を検討し、2) 介護サービスと医療の提供を受けて在宅で生活をしている一人暮らしの高齢者にインタビューを実施した。具体的には、介護サービスを利用する一人暮らしの高齢者の体験と生活に変化をもたらす要因、それに対する介護サービスの内容について、24 時間定期巡回訪問介護看護サービスを提供する事業所の 10 名の介護記録から 6 つの変化を抽出した。次に、訪問看護サービスの利用者に 6 つの変化の実体験について聞き取り、その内容を健康状態・心身機能・活動や参加・環境や個人にかかわる因子に沿って検討した。その結果、要介護になっても高齢者が在宅生活を継続させるために、個人の健康状態や心身機能だけでなく、地域生活における活動や参加、地域社会とのネットワークにも目を向けて支援することの重要性が示された。

（特任助教・木全真理）

【共同研究 3-2】「要介護になっても暮らし続けられるバリアフリー改修マニュアル作り」グループ

G3-2 は、介護保険改修 20 万円で、本人や家族全体の生活の様態に応じ、効果的な改修ができるようにマニュアルを作成することを目的とした。マニュアルを用いることで、ユーザーや専門職が住まいの課題を容易に把握し、適切な改修をスムーズに行うことで、心身機能が変化しても住み慣れた自宅で生活を維持・継続することを目指した。

2017 年度に新規に設けられた本グループは 3 年目を迎えた。今年度も昨年度同様、フィールドワークを中心に、まず、建築士やケアマネジャーへのインタビューを行い、企業者や専門職が実際に住宅改修をする際

に感じている課題を把握した。

調査は、要介護認定が最も多い脳血管疾患の方を対象とすることにした。そこで、日本脳卒中協会に依頼状を送り、調査対象者の照会をお願いした。そして、住宅改修をした片麻痺の方の自宅を訪問し、住宅改修の状況や生活の状況の聞き取りをし、高齢期の生活における住まいの課題を把握すると共に、その解決策として住宅改修がどのように実施されているのかを把握した。これらの調査で明らかにした住宅改修のポイントを整理したシートを作成。このシートを基に、住宅改修経験がある建築士やケアマネジャーにシミュレーションをしてもらい、シートの評価を行った。

3年間の研究を振り返ると、1年目は、住宅改修に関する東京都の取り組みの実態を把握するため、都内62自治体を対象にアンケート調査を行い、改修に関する研修を行っているのは1自治体であることを明らかにした。2年目は、この自治体を実施しているケアマネと施工業者を対象とした研修会に参加し、各専門職が住宅改修を実施する際に抱えている課題を把握した。さらに、国際福祉機器展に行き、出展している企業(25社)を対象にインタビューを行い、住宅改修への企業の取り組みを把握した。そして、2年目～3年目は、自宅訪問調査を中心に当事者や家族のインタビューを行い、生活実態を把握した。これらの研究成果を積極的に国際学会に発表することを試みている。

G3-2は共同研究を通して、テーマに沿って、ケアマネ、施工業者や建築士、企業や当事者と家族へのインタビューを行うことで、住宅改修に関わる様々な専門職や当事者の視点を学び、多角的な視点で住宅改修の実態と課題を捉えることを試みた。また月に2回～4回の定期的なミーティングでは、マニュアルづくりに向けた手法等に関し、多分野のメンバーが積極的に意見交換することで、分野の違いを理解する機会ともなった。さらに、社会的背景を踏まえて研究テーマを絞り込み、そのテーマに沿ったフィールドを開拓することで、G3-2のテーマに限らず、今後の社会的課題を解決するための研究を切り開く力を身につけることを心がけた研究活動を行った。

(特任助教・西野亜希子)



建築士に作成したシートの評価を受けているところ

【共同研究 4/5/6】「高齢者の QOL 向上のためのコミュニティ活動のファシリテーション」グループ

この共同研究グループでは、超高齢社会を支えるコミュニティ活動について、参加者の QoL の向上に資するような効果的なプログラムや、住民が主体となって取り組むための適切なファシリテーション方法に関する研究を続けてきた。2019 年度は、前年度から継続して、千葉県柏市豊四季台地区にある、「地域活動館(仮称)」をフィールドに活動を行った。

2018年2月に、東京大学と柏市社会福祉協議会により設置された「地域活動館」では、2019年現在、25程度の団体やサークルによって、健康づくり、趣味・娯楽、音楽鑑賞などの自主的な企画が開催されている。この運営団体に対する支援が十分なのか、団体同士の連携・協力関係はどのように築かれているのか、団体の代表者へのアンケート調査やインタビュー調査を行った。この結果、毎月1回開催している情報交換会の位置付けの見直しや、共同での企画の呼びかけを工夫することによって、団体間の連携を生み出すマネジメント

ントが課題であることが示された。

また、延べで月間 500 名を超える利用者が、どのようなニーズによってこの施設を利用しているのか、利用による QoL 向上の効果はあるのかについても、利用者に対するアンケート調査を実施した。解析は途上であるが、高齢になるほど、館外での活動範囲は狭くなる一方で、活動館での活動数は増加し、総体として人間関係が維持されていること、活動の種類によって充足するニーズが異なることなどが明らかになっている。

さらに、この活動館という場で、参加者の間にどのような相互作用が生じ、このことが人間関係の構築や、QoL の向上にどのようにつながっているのかを明らかにすることを目的に、映像分析も前年度に続いて実施した。1 秒ごとのタイムラインを作成した分析により、ファシリテーターの働きかけや座席配置によって、会話の広がり生まれるといった新たな知見も得られている。

これらの分析だけでなく、大学院生自らが、分析の結果を活かして、企画を立て実施するアクション・リサーチを重視しているのがこのグループの特徴である。2019 年度は、高齢者の「食事」に焦点を当て、7 月の団地における夏祭りや、10 月の一人暮らし高齢者の昼食会に参加し、フィールド調査を行った。この上で、食事のバランスにも影響を与える「朝食」に焦点を当てた新たなプログラム「あさのばカフェ」のプレ調査も行った。

2019 年度は、以上のような多くのフィールド調査や、アクション・リサーチに取り組む一方で、GSA や IAGG、日本社会学会、老年社会学会といった関係する諸学会で研究成果も積極的に公表した。フィールドに根ざした細かな知見を丹念に蓄積しつつ、それをジェロントロジー（老年学）の学問体系の中に位置付けていくという作業に、今後も積極的に取り組んでいくことにしたい。

（特任助教・荻野亮吾／特任研究員・高瀬麻以）



夏祭りにおける活動の様子



一人暮らし高齢者の集いにおける活動の様子

【共同研究 7】「在宅高齢者のための IoT 活用による自立支援」グループ

超高齢社会においては、さまざまな情報技術を活用した安心・安全な社会形成が期待されている。一方で、AI スピーカや IoT (Internet of Things) の普及により、一般家庭におけるインターネットを通じた情報通

信のあり方は急速に変化している。本グループは、昨年度の活動で高齢者支援技術として IoT が利活用できないか検討を行った。本年度は昨年度に引き続き高齢者支援技術として IoT を利活用する方策を検討した。

昨年度は、支援技術を IoT に絞り、「困りごと」や受容性に関する調査を実施した。調査方法は、高齢者が自由に意見やアイデアを出せるようにワークショップを用いた。内容を変えつつ合計 3 回のワークショップを実施した結果、IoT を利活用して解決できるニーズがあり、また高齢者自身が IoT を用いた簡単な解決方法を実現させることができ、IoT システムを受容することがわかった。一方で、欲しい機能の言語化方法やユーザインタフェースの操作に課題が残ったので、本年度は「欲しい機能の言語化方法の検討」と「欲しい機能を具体化するための高齢者向けユーザインタフェースの検討」を行った。

「欲しい機能の言語化方法の検討」は、昨年度実施したワークショップの内容を精査し、高齢者が欲しい機能を主体的に発想することが可能かどうかの検討を行った。昨年度実施したワークショップでは高齢者から IoT を用いた 100 以上のアイデアを得ることができた。得られたアイデアはファシリテーターやテーブルアシスタントの助けの要因や、自身の体験に基づいているかなどを考慮するために、多重ロジスティック回帰を用いて分析を行った。その結果、高齢者自身が主体的に IoT を用いた「困りごと」を解決するアイデアを発想できることがわかった。

「欲しい機能を具体化するための高齢者向けユーザインタフェースの検討」は、検討したアイデアを IoT システムに実装するためのユーザインタフェースとして、どのようなインタフェースが適しているかの検討を行った。アイデアは、条件と動作の 2 つの要素から成り、2 枚のカードに落とし込まれている。IoT システムに伝えるためには、「カードを画像として認識させシステムが読み取る方法」、「タッチパネルなどで機械へ入力する方法」、そして「カード内容を読み上げて音声をシステムが読み取る方法」などが考えられる。これらの入力方法を検討し、評価するワークショップを実施した。ワークショップでは、高齢者が順番にそれぞれのインタフェースを試し、アンケートでの受容度調査とインタビューによる自由意見を評価した。相関係数などで評価の結果、「カード内容を読み上げて音声をシステムが読み取る方法」による入力の評価が高かった一方で、体験順を考慮した場合はカメラを使い「カードを画像として認識させシステムが読み取る方法」は体験順が後になるほど受容されるという結果がわかった。その結果、本研究では様々なインタフェースを組み合わせつつ、「音声をシステムが読み取る方法」は発音に問題がない高齢者は日常的に利用する受容度は高いが、アイデアを IoT システムとして実装するためのユーザインタフェースとしては、「音声をシステムが読み取る方法」を補助的に利用しつつ、カメラを使って「カードを画像として認識させシステムが読み取る方法」が良いことがわかった。本ワークショップを通じて、高齢者自身が技術を使いこなす、生活に寄り添った自立支援システムの実現可能性の一部について示唆することができた。（特任研究員・伊藤研一郎）

岩手県大槌町フィールド演習

8 月 3 日～5 日にかけて岩手県大槌町のフィールド演習を実施した。

東日本大震災の発生から 8 年が経過し、津波の被害を受けた被災地では復興まちづくり事業が終焉を迎えようとしている。本演習では、この 8 年間の復興まちづくりの成果を深く知り、地域課題の情報を收拾することを目的に、住環境点検活動を実施し、地域住民の協力のもと、生活空間や地域社会の生活基盤の復興状況を確認した。また、地域支え合いマップ等の取り組みからケア環境の

実態を把握し、地域の物的環境・社会環境・ケア環境について、地域課題の構造化を行った。初日は大槌町の被災とハード面の復興を知るため、地域の町会長のガイドのもと現地見学を行った。

見学後は大ケ口多世代交流会館（コミュニティ・サポートセンター）で地域の活動団体からゲスト講師をお迎えし、地域コミュニティの現状の紹介や課題の提示をしていただいた。

翌日には安渡公民館と大ケロー一丁目災害公営住宅団地集会所で住環境点検活動を実施し、住環境について地域住民の意見や考えを聞き取ったり、地域資源・課題を白地図へ書き込み、情報を整理したりした。これらを通じて、地域コミュニティの課題とそれを支える体制の論点について考え、望ましい地域づくりのビジョンを探り、その実現のシナリオ案を作成した。

最終日は、地域の活動団体から迎えたゲスト講師に作成したシナリオ案を発表し、意見交換を行った。



初日に行われた現地見学

〈演習内容〉

8月3日	13:00	大槌着後見学：大槌町中心部 教職員による解説	
	13:45	見学：安渡まち歩き 安渡町内会長による解説	安渡
	15:00	講義：大槌町のコミュニティ支援の取組について 講師1 高橋伸也（大槌町コミュニティ総合支援室室長） 講師2 五十嵐幸太、ほか1名（大槌町社会福祉協議会） 質疑応答	大ケロ多世代交流会館
	16:00	準備	
	17:00	見学：大ケロ地域納涼祭	
	18:00	移動・夕食（18:30～@さんずろ家）	
	21:00	ホテル着	
8月4日	8:30	ホテル出発	
	9:00	現地到着・準備	
	9:30	調査：住環境点検活動 ・まち歩きで確認した情報の書き出し ・住環境について住民意見の聞き取り ・地域資源・課題の地図への書き込み	安渡公民館 大ケロー一丁目災害公営住宅 団地集会所
	12:00	休憩・昼食（弁当）	
	13:30	講義：被災地の地域交通の取り組みと課題について（釜石市） ・よくわからなかった点や深掘りしたい点をグループで整理 ・質疑応答	大ケロ多世代交流会館


8月4日	15:20	グループ作業 ・これまでに得た地域に関する情報の整理 ・地域課題の構造化	
	18:00	移動	
	18:30	ホテル移動	
8月5日	9:00	ホテルチェックアウト	
	10:00	グループ作業 ・今後の地域づくりのビジョン ・ビジョン実現のシナリオ案の検討	大ケロ多世代交流会館
	12:00	休憩・昼食（弁当）	
	13:00	発表準備	
	14:00	発表会	
	15:00	片付け・帰京	

柏市豊四季台団地フィールド演習：一人暮らし高齢者対象「懇談と昼食会」

10月14日、柏市豊四季台団地一人暮らし高齢者の交流促進と友人づくりの機会提供を目的とした「懇談と昼食会」（豊四季台地区社会福祉協議会主催）が行われた。今年で10年目となるこの会を毎年楽しみにしていらっしゃる高齢者の方も多く、小雨にもかかわらず184名もの方にお集まりいただいた。GLAFSの学生及び教員、産学ネットワーク「ジェロントロジー」のメンバー等、約50名が参加。高齢者の方々に会話や新たなプログラムを楽しんでいただくことで、外出や社会参加への意欲が湧くようサポートをしていった。演習の目的は以下の通り。

- ・高齢者との対話の中から、暮らしの状況や課題・ニーズを把握する手法や、コミュニケーション方法について学ぶこと。
- ・地元住民や団体等と連携し、地域のイベントを運営する手法を学ぶこと。
- ・異なる領域の院生・教職員とともにイベントを運営することで、各専門分野からのアプローチを互いに学び、後の研究のヒントを得ること。

〈イベントスケジュール〉

11:30-11:50	開会の辞 主催者の挨拶
第1部	
11:50-12:20	学生・教職員と参加者との交流  昼食前は、「暮らしのメリハリ Chart」で日々の暮らしをふりかえったり、懐かしの映画や言葉に関するゲームを一緒に行った。
12:20-12:50	昼食会

12：50-13：20

お楽しみ企画 地域活動館「沼南ハーモニカ」の演奏



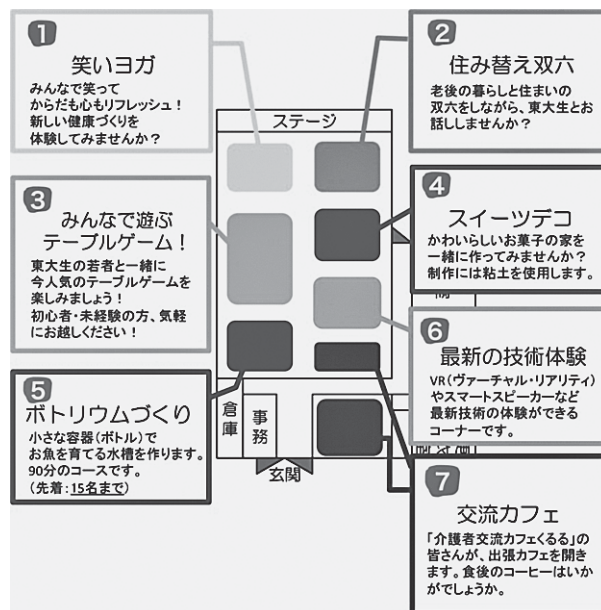
昼食後は地域活動館で活動する「沼南ハーモニカ」による演奏に合わせ、秋の歌のメドレーや「ふるさと」などを全員で合唱した。

第2部

13：30-15：00

ブース企画

第2部では地域活動館で活動している3団体が企画した「交流カフェ」、「スイーツデコ」、「笑いヨガ」のコーナーの他、ジェックス様のご協力によって、小さなボトルで水槽づくりの体験ができる「ポトリウムづくり」のブースが開かれた。






「交流カフェ」(介護者交流カフェくるる)「スイーツデコ」(マロンガラスセ)



「笑いヨガ」(柏笑いヨガクラブ)「ポトリウムづくり」(ジェックス様)

GLAFS からは共同研究ごとに3ブースを開いた。企画したブースとその目的は次のようなものであった。

	<p>共同研究 G1/2/3 「住み替え双六」 IOGが作成した「住み替え双六」を使いながら、現在の暮らしやすさや、今後の居住環境に求めるものを聞き取った。</p>  <p>共同研究 G4/5/6 「みんなで遊ぶテーブルゲーム」 最新のテーブルゲームを体験してもらい、シニアの方がどの部分に面白さを感じるかを調査した。</p>  <p>共同研究 G7 「最新の技術体験」 バーチャルリアリティやスマートスピーカーなど、最新の技術をわかりやすい形で体験してもらい、生活にどのような形で応用できるかを一緒に考えた。</p> 
15 : 00	閉会

■ フィールド演習 2 (ケア・システム実習型)

対人ケア実習

実践的課題解決能力を養うために、医療や介護を必要とする高齢者の生活実態や、医療や介護サービスの実態を把握することを目的に、介護予防や介護サービスの見学、訪問診療・訪問看護に同行する実習型のフィールド演習を行った。

実習前、他分野の学生でチームとなり、各自で参加目標を立案し、その目標をチームメンバー間で共有した。実習では、介護ニーズのある高齢者、その高齢者を支える専門職など当事者の思いを捉えた。また、高齢者の地域生活を支える介護・訪問看護・訪問診療の機能を理解し、具体的な課題やその解決策を探索し、自らの専門分野で期待される役割を考えた。

スケジュールは、下記のとおりであった。

〈目標〉

- ・ 介護サービスを利用する高齢者と話をし、当事者の思いを捉える。
- ・ 在宅医療や介護サービスを利用する高齢者を支える専門職などの支援者の機能を考える。
- ・ 参加目標を立案し、その目標をチームメンバー間で共有する。

- ・多専攻で構成したチームメンバー間で協力して、自らの専攻の役割を發揮し、実習（事前学習とレポート作成も含む）に取り組む。

〈実習先と日程〉

実習先	日程
地域包括支援センター	12月 9日（月） 9：00～17：00
	12月16日（月） 9：00～17：00
小規模多機能型居宅介護	11月25日（月） 9：00～17：00
	11月28日（木） 9：00～17：00
訪問看護ステーション	1月20日（月） 9：00～17：00
	2月10日（月） 9：00～17：00
	2月19日（水） 9：00～17：00
看護小規模多機能型居宅介護	1月20日（月）14：00～17：00
	2月10日（月）14：00～17：00
	2月19日（水）14：00～17：00
訪問診療	12月 5日（木）13：00～16：00
	12月23日（月）13：00～16：00
	1月 6日（月）13：00～16：00

〈コース生の感想〉

湖上碩樹（工学系研究科精密工学専攻 博士1年）

今回の実習で私は小規模多機能型居宅介護、訪問看護ステーション、看護小規模多機能型居宅介護の三ヶ所を見学しました。私の専門領域はリハビリ工学や福祉工学で、そのような領域に携わる研究者が良く言われるのは「現場を知るのが重要」ということです。現在、介護者を支援するパワースーツや認知機能を支援する見守りロボットなど福祉機器は数多く開発されています。そのため、介護の現場で福祉機器がどのように使われているのかを探りたいと思いましたが、実習先では福祉機器が多く使われていないという印象を受けました。職員の方々とのお話の中で、介護の全てを機械に任せるのではなく自らの手を使って介護を行うことが求められていることが分かりました。福祉機器を使う人々が何を求めているかを把握して機器を開発するのが重要であり、これがつまり「現場を知るのが重要」ということを表していることに気づきました。今回の実習により介護の現場を見ることができたのはとても貴重な経験となりました。

日隈脩一郎（教育学研究科総合教育科学専攻 修士2年）

ギリガンの「ケアの倫理」、ハイデガーが人間存在の根本に見いだした「気遣い Sorge（英語では Care）」など、教育学においてもケアはしばしば議論の俎上に載ります。眼前の他者の固有の状況に応答することが、その根幹と言えますが、では、看護の場合のケアとは一体いかなるものなのか。訪問看護に同行して気付いたのは、ケアの営みがすぐれて暗黙知に支えられているということでした。聴診、検温、爪切り、耳かき、マッサージといった、それ自体は代行が可能な行為の淡々とした連続の中で、患者の呼吸音や息遣い、目の色、皮膚の弾力や温かさといった兆候をいわば「聴き取る」こと。それは、日常的な患者さんとの関係構築 はもちろん、確かな専門知がなくしては為し得ないでしょう。とすれば、属人的とも言えるようなケアの営みは、制度としていかに担保され得るのか。これはほかならぬ教育現場においても頭をもたげる問いであり、ここに看護学と教育学の共通の課題を見たような気がしました。

移動支援実習

6月29日、7月27日にコアセミナー「移動支援実習」を実施した。昨年同様、手動歩行器や電動歩行器などの移動を支援する機器を用いた実習である。まず、6月29日のコアセミナーで、グループ分けと、実習場所の確認や着目すべき点の整理を行った。7月27日のコアセミナーは、実際に移動支援機器を使用し、本郷キャンパス周辺を歩いた。体験後は、高齢者にとっての現状の歩行環境の課題を理解すると共に、その解決策を各グループで考え整理し、発表した。また、12月7日のコアセミナー（講義：「高齢者の移動を支援する」）で講師にお招きした先生方と、移動支援実習で得た各班の成果を踏まえたディスカッションを行った。



電動歩行器で横断歩道を渡った時に越えられない3 cmの段差

■ フィールド演習 3（インターンシップ型）

2011年に設立された東京大学産学連携ネットワーク「ジェロントロジー」（自動車、電機、住宅、食品、生活用品関連などの企業が35社参加）と連携。全体会（6月28日、12月5日）に学生も参加し、企業のスタッフとのディスカッション、交流を図った。各回の議題は以下の通りである。

〈第1回全体会〉

- ・各 SIG（勉強会）の活動報告
 - SIG1 生活支援テクノロジー
 - SIG2 住環境 安全安心住環境
 - SIG3 移動 次世代モビリティ
 - SIG4 地域活動 健康・生きがい・支え合いの地域活動の展開手法
 - SIG6 食生活 高齢者の健康と活力を支える食事・食行動・食環境
 - SIG8 ライフ・デザイン
 - SIG9 地域包括ケアシステム・街づくり
- ・ネットワーク「ジェロントロジー」から発展・進化した先進的産学連携活動の紹介
 - ①『リビングラボへの参画 高齢社会共創センター鎌倉リビングラボ』 (株)イトーキ

②『オーラルフレイルに関する取り組みについて』 サンスター(株)

③『イオングループでのフレイル予防の取り組み』 (株)イオン

・パネルディスカッション『超高齢社会における産学連携』

パネラー ネットワーク「ジェロントロジー」参加企業(株)イトーキ、サンスター(株)、イオン(株)、(株)マルタマフーズ)ほか

座長 飯島勝矢(高齢社会総合研究機構教授・副機構長)

〈第2回全体会〉

・パネルディスカッション『さらなる産学連携による地域共創について』

パネラー ネットワーク「ジェロントロジー」参加企業(スズキ(株)、東急不動産(株)、キューピー(株)、三井住友海上火災保険(株)、富士フイルム(株))

大月敏雄(工学系研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長)

檜山敦(先端科学技術研究センター講師、GLAFSプログラム担当)

総合司会 飯島勝矢(高齢社会総合研究機構教授・副機構長)

グローバル演習

■ グローバル演習 1：英語によるコミュニケーションとプレゼンテーション

国際的なコミュニケーション能力と多文化・多分野の専門家とチームを組んで課題解決に取り組む「グローバル演習」を開講した。

開講時に英語運用能力測定試験を実施し、能力別クラス分けを行い、1クラス5～8名×2クラスの少人数クラスにて指導を行った。

プログラムの内容は、リスニング、スピーキング、プレゼンテーション、論理的会話力、ファシリテーションの能力を向上させる英語学習の研修プログラムと、語学を活用し、リーディングプログラムの趣旨に沿った高いコミュニケーションスキル、グローバルマインドを向上させる研修プログラムによって構成され、年間12回×2時間 合計24時間のコースで、英語によるコミュニケーションとプレゼンテーション能力の育成を図った。また、終了時にも英語運用能力測定試験を実施し、学生へのリードバックを行った。

■ グローバル演習 2：海外留学制度(留学生は海外または国内インターンシップ)

〈海外調査〉

調査先：中国・山東省、青海省、チベット自治区、ネパール

参加学生：王聰 農学生命科学研究科農業・資源経済学専攻 博士1年

渡航目的：中国、チベット自治区、およびネパールにおける農村の学術調査

実施期間：2019年7月20日～2019年9月23日

調査レポート

GLAFS6 期生
農学生命科学研究科 博士1年
王 聰

貧困問題は、今日の開発途上国において最も重要な社会経済的問題の一つである。持続可能な開発目標の中で、貧困撲滅は途上国における最優先課題として位置付けられているが、社会扶助だけで貧困世帯を貧困から脱却させることは不可能であるということはいままでの間もない。貧困削減政策を本格的に実施する前に、貧しい世帯の生活実態を明確にする必要がある。そこで筆者は、2019年7月から9月までネパールと中国の農村部で現地調査を行い、そこで得られたデータを用いて農村貧困地域における生計戦略の決定要因を考察した。本調査レポートでは、調査地の概況と調査内容などを簡潔に説明する。

■ (1) 中国・山東省

7月下旬、山東省の農村貧困地域において現地住民の生計状況を調査した。山東省の経済発展レベルは中国で主導的な位置にあるものの、依然として多くの貧しい人々が存在している。山東省の貧困人口は、主に南西部に集中している。これらの地域では、水資源の不足や未整備な交通網によって、農業生産が比較的貧弱であり、一人当たりの年収が相対的に低くなっていると考えられる。この地域の貧困状況を改善するために、地方政府は貧困緩和のための様々な政策を実施してきた。例えば、貧困地域における住宅改修プロジェクトである。貧困地域に住む農民をより整備された建物に移動させるが、彼らの経済基盤が比較的弱いため、移転後は多くの問題が生じる。これに対して、本調査の主な内容は、山東省南西部の貧困地域における農家世帯の生計変容を中心に展開している。たとえば、農家は生計を立てるために何をしているのか？その影響要因は何か？貧困に陥る原因は何か？どのように貧困の罠から逃れるか？など、といったものである。また、住宅改修事業の実施後、ほとんどの農家の生活の質は確かに改善されたが、多くの農民は土地資源を失った。こうした背景をもとに生計活動の円滑な移行を達成する方法は何か？移転後の主な問題は何か？これらの問題に対処するためにどのような政策を実施すべきかなど、といった諸問題も提起される。また今回の調査では、高齢者世帯に対しても調査を行った。農村貧困地域に住んでいる高齢者世帯は、年齢などの理由で農業生産に従事することはめったになく、病気のため貧困に陥りやすくなる。彼らの年収が少ないため、基本的な生活必需品を確保できない場合がある。従って、高齢者世帯の家計脆弱性の決定要因を計量経済学的手法によって解析することにより、その削減政策を示唆することが期待される。

■ (2) 中国・青海省

8月上旬、中国西部に位置する青海省に赴いて家計調査を行った。青海省は主に2つの地級市と6つの自治州で構成されている（すなわち、西寧市、海東市、海北チベット自治州、黄南チベット族自治州、海南チベット族自治州、ゴロクチベット族自治州、及び玉樹チベット族自治州および海西モンゴル族自治州である）。青海省は多民族地域の一つである。漢族に加えて、回族、チベット人、モンゴル人、サラール人、トゥチャ族などの少数民族も生活している。農業は依然として重要な収入源である。主な農作物は、春小麦、大麦、エンドウ豆、ジャガイモなどであり、経済作物は主に菜種である。また羊、牛、豚、鶏などの家畜も重要な収入源である。今回の調査では、海南チベット族自治州を調査地として選定した。主な選定理由としては、海南チベット族自治州で貧しい人々が比較的多く、様々な種類の生計活動があるため、生計戦略の決定要因がまだ明らかになっていないからである。この地域の地質学および地形学的条件は複雑で多様であり、「高原の小さな江南」として知られている。ここでは灌漑用水が

相対的に不足しているため、農業生産は限られており、貧困の問題は依然として顕著である。

■ (3) 中国・チベット自治区

8月中下旬、チベット自治区のラサ市を中心として農村社会調査を行った。ラサ市は、チベット自治区の南東部に位置し、東西に277キロメートル、北南に202キロメートルに及び、29,500平方キロメートルの面積をカバーしている。ラサはチベットの政治的・経済的・文化的中心地であり、チベット仏教の聖地でもある。現地調査により、飼育している家畜の数は非常に多く、また放牧は家計の主な収入源の一つとなっていることが明らかとなった。またこの調査を通じて、チベット高原で形成される独特な生計活動の構造と特徴を解明し、生計変容過程を明らかにしたい。

■ (4) ネパール

ネパールは中国とインドの間に位置する山岳国である。ネパール政府は貧困削減に多大な努力を行ってきたが、それでも世界で最も貧しい国の1つである。この国は約147,000平方キロメートルの国土面積をカバーし、人口は約2,900万人である。また、ネパールは多宗教・多民族・多言語の国であり、カス民族グループは総人口の約3分の1を占め、国民の86.2%がヒンドゥー教である。筆者は、9月上旬にネパール大地震被災地に赴いて被災者の生計調査を行った。ネパール政府報告書(2015)により、2015年4月に発生したゴルカ地震では、死者は8,960人、負傷者は22,322人に上り、605,279棟の建物が完全に破壊され、288,258棟が部分的に損傷した。今回の調査地は、ネパール・ゴルカ大地震の被災地の中心部である。被災者の生活の回復状況を明らかにするために、震災前後の生計活動変化を巡って聞き取り調査を実施した。被災地における持続可能なアプローチを解明することで、被災者の消費構造、生計戦略および家計脆弱性を考慮した枠組みを明らかにしたい。

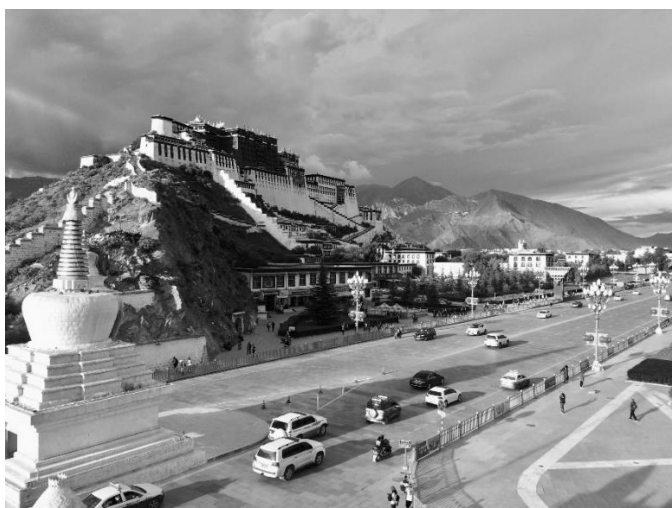
まとめ

今回の調査では、農村世帯の生計脆弱性に着目し、中国の山東省・青海省・チベット自治区及びネパールの大地震被災地を研究対象として聞き取り調査を実施した。そこで得られたマイクロデータを用いて「家計脆弱性」の観点から要因分析を試み、貧困・脆弱性削減に向けた解決策を示唆することを目的とする。この研究課題を完了することで、成果が他の地域に応用され、貧困削減に関する理論的・実践的な研究に貢献することが期待される。

調査地の写真（抜粋）



< 中国・青海省：国家地質公園 >



<中国・チベット自治区：ポタラ宮>



<ネパール・ガンダキ地域：農村の実態>

〈短期留学〉 渡航期間 3 ヶ月以内

留学先① コペンハーゲン大学（デンマーク）

参加学生：Richa Shah 医学系研究科国際保健学教室 博士3年

渡航目的：IARU Summer Course: Interdisciplinary Aspects of Healthy Aging

実施期間：2019年6月30日～2019年7月19日

留学先② ミュンヘン工科大学（ドイツ）

参加学生：青柳 恵 工学系研究科精密機械工学 博士1年

渡航目的：戦略的パートナーシップ大学プロジェクトにて、交換留学

実施期間：2019年7月17日～2019年9月20日

留学報告書

GLAFS5 期生
医学系研究科国際保健学教室 博士3年
Richa Shah

IARU Summer Course at The University of Copenhagen, Denmark

Preparation for studying abroad Application

I learned about the IARU course on “Interdisciplinary Aspects of Healthy Aging” from my seniors who had participated in the course before me. I found out more information about the course after we received an email from Prof. Hiroko Akiyama who forwarded the course information in mid-January. I applied to this course on Interdisciplinary Aspects on Healthy Ageing separately through the University of Copenhagen’s website (deadline was April 1, 2019) .

Preparation before the visit

The course secretaries sent an email regarding optional and compulsory literature for the course, housing options, campus map and information, and schedule for the program. They also created a Facebook group for easy communication and information sharing. It was mandatory to read the book “Growing Older Without Feeling Old: on vitality and ageing” by Prof. Rudi Westendorp who is also the course director. We were given access to the University of Copenhagen’s learning platform called “Absalon” which provided access to course information and optional relevant research articles for reading.

For university housing, the housing foundation sent an invitation email for online booking in May. However, I missed the deadline and when I emailed the housing foundation stating my intention to apply, they sent the invitation link one more time. I am grateful to GLAFS for providing me financial support in terms of housing and airfare.

I applied for Schengen Visa from Nepal as I was there for my research. It takes at least 14 days to receive the visa, so it is recommended to apply a month in advance. I obtained travel insurance (Futai Kaigaku) from Daiichi Seiwa Jimusho co., Ltd. Since travel insurance is required for visa application, it is recommended to apply for insurance in time as the process takes about a week or more.

I did not prepare much in terms of health care. I also did not undergo pre-departure check-up or vaccination. However, it is advisable to bring cold medicine, warm clothes (for spring weather in Japan) , waterproof jacket and shoes, as well as summer clothes as the weather in Denmark is unpredictable and it can get cold and windy even in summer.

We were asked to bring our own laptops for the course as we used it often to search articles. We

used the common PC in the university twice as a part of the curriculum. We got access to edu-roam WIFI; UTokyo's eduroam WIFI works there conveniently.

An overview of the institution you studied at

The University of Copenhagen is the oldest university and research institution in Denmark. The university has four campuses located in and around Copenhagen. The university is a member of the International Alliance of Research Universities (IARU). The summer course on "Interdisciplinary Aspect of Healthy Aging" held by the Center for Healthy Aging (CEHA). It is an interdisciplinary center researching different aspects of aging process. The cafeteria in the building we were based in opened from 7 am to 3 pm. There were coffee, snacks, sandwiches, and buffet lunch.

English was the language of instruction and everyone in Copenhagen spoke English fluently. We were given contact information of the course secretaries who we could contact during weekdays in case we suffered from any trouble.

Course

FIRST WEEK

I arrived Copenhagen on July 1, which was the first day of the course. There were 29 students from different parts of the world with diverse background and interests. During the first week, we got acquainted with teachers and fellow students and there were a series of lecture-discussions along with field visits. The students were grouped into six groups for the grant proposal (final presentation). All students presented on their educational and work background along with their aim for joining this course. On the first day we had a social gathering in the form of dinner organized by the course committee. In following days, we were taken to the Medical Museoin and Living Lab to gain a deeper perspective on aging.

SECOND WEEK

The second week revolved around practical projects and interdisciplinary group works to prepare for the final presentation in third week. We took practical students exercises conducted by post-doctoral researchers to learn about literature search, qualitative study, data analysis, and writing a grant proposal. We also consulted course professors to refine our grant proposal.

THIRD WEEK

The third and final week focused on preparing our research protocol and presentation based on the learnings of past weeks. My proposal was titled "Experiences and Perceptions of Individuals Receiving Home Care Relating to eHealth Robotic Intervention in Dublin, Ireland". On the grant proposal presentation night, we were taken to Tivoli garden which is the world's third oldest amusement park. After

the grant proposal presentation, we spent the next few days preparing a report of our proposal and submitted it as a group on an online platform.

Your life where you stayed

I lived in a student dormitory which was about 30 minutes' walk from the university. It was a shared room, but I got to stay privately as my new roommate was due to arrive after my departure. The dormitory provides bed and mattress, but we must bring our own bedsheet, blanket, and pillow. There were some utensils to cook and eat but they were not new and worn out. The housing foundation recommends taking photos of anything in the room that do not seem in order or broken, for example, broken furniture, stain in wall, etc. and report in time otherwise extra charges may be applied for their repair.

Spending your free time

The classes started at 9 or 10 am depending on the schedule and finished at 4 pm. There were no mandatory events on the weekends. So, we were free to explore the city or travel during the weekends and free time after classes. There are plenty of museums, castles, churches, and parks to visit. We were lucky to be in Copenhagen during Jazz festival which was free to visit. Copenhagen is a small bike-friendly city which makes most places accessible. However, the course ran all working days which gave little time for extra activities during weekdays.

Advice for those planning to study abroad in the future

1. Set your visa appointment early, if you need a visa. The visa appointment slots are usually booked during summer as it is the peak tourist season in Europe.
2. Similarly, get your travel insurance early.
3. Search for housing early. Sharing an AirBnB with other students is cheaper and more convenient as you do not have to carry your bedding with you (the case with university housing) .
4. Renting a bicycle for a month is cheaper.
5. Your UTokyo student ID will enable you to get student discounts at most museums and free passes to some.
6. Carry both summer and winter clothes, along with water proof shoes and jacket. An umbrella and/ or raincoat is good to bring too (Copenhagen can get windy and rainy) .
7. Do not forget to carry a reusable tote bag around Denmark because stores including grocery stores do not provide a plastic bag for free.
8. Carry your passport if you are traveling to other countries.
9. Unlimited day pass will save you money if you plan to travel multiple times in a day. It is valid for both trains and buses.
10. Credit and debit cards can be used almost everywhere in Copenhagen. However it is convenient to have some change as most public restrooms are paid and do not accept cards.

留学報告書^{注)}

GLAFS6 期生
工学系研究科精密工学専攻 博士 1年
青柳 恵

7/19 から 9/21 までの約二ヶ月間、ミュンヘン工科大学の Tim Lueth 先生の研究室に交換留学生として在籍しました。研究内容については、現在浅間研究室で研究している内容に組み込めるようなテーマを提案し、現地の学生のプロジェクトに参加させて頂くように交渉しました。

私は現在 VR を用いたリハビリテーションシステムの開発を行っており、その研究に組み込めるような形の研究を提案しました。先行研究のハンドロボットは親指を除いた四本の指を屈曲させる補助を可能としていました。しかし、素手で物を掴む場合把持の動作には親指の補助が必要であると考えています。また、ハンドロボットの改善すべき点として、人によって異なる関節の高さに影響されることが挙げられます。そこで、先方では人の指の長さに応じて簡単に長さが調節可能であることと、親指を用いた把持の補助の二点に着目し、ワイヤ駆動を用いたハンドロボットの設計を行いました。

【スケジュールについて】

ドイツの研究室ではコアタイムは決められていませんでしたが、大半の学生は 9:00~17:00 に在籍していることが多かったです。また、土日祝日は大学自体が開いていないため、研究は全てこの時間に集中して行いました。

【宿泊について】

ミュンヘンは学生が多く、また家賃も高いことから家を見つけるのは非常に大変です。私は留学が決まった時に現地の秘書と学生に交渉し、滞在先のアドバイスを頂けないか相談していました。幸いにも非常に人気が高く家賃が相場（月 10 万程）から約半分の 5 万円の寮に住むことが出来ました。Studentenstadt という、ドイツ語で学生の街と呼ばれるところに 8 月いっぱいまで居住しました。しかし、9 月の契約は更新出来なかったため、逆にドイツの研究室から東大に交換留学に行く学生のアパートメントの sublet 契約を結び、留学終了までは大学近くの Garching に住みました。ただし、これは非常に幸運な例のようで、ミュンヘンに滞在する上では半年以上前から住居の契約を結ばなければ住めない場合もあるようです。

【インターンシップで学んだこと】

大きく分けて言語と人付き合いについて非常に考えさせられました。二ヶ月滞在しましたが、初めの一ヶ月は殆ど発言が出来ず、また研究に没頭すると何故か英語が殆ど出てこない（恐らく日本語で沢山の物事を考えていたせい？）ことが数回あり、その日は酷く落ち込んでいました。一ヶ月経った辺りから、自分が考えている日本語をそのまま英語に訳すのではなく、知っている語彙を組み合わせる自分の意図を伝える方が早く英語で発言出来ることに気づき、それから一気に英語でコミュニケーションが取れるようになりました。また、ドイツに滞在中は研究室の方だけではなく非常に多くの方々から助けて頂いたことは一生忘れません。前述の英語についても、私の辿々しい英語を我慢して最後まで聞いてくれていた研究室の方々、ドイツ生活で多くアドバイスをくれたドイツ滞在経験者及び移住者の知り合いの方々、困っている時に助けてくれた街の人々等本当に温かい思い出が沢山あります。私自身が困った経験を活かして、困った人がいたらためらわずに手を差し伸べたいと強く思いました。

今回の留学に関わった全ての方々にご迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げますと共に、心の底から御礼を申し上げたいと思います。

注) 本学「戦略的パートナーシップ大学プロジェクト」の一貫で留学したため、本報告書は戦略的パートナーシッププロジェクト報告書と同一のものになっています。

〈長期留学〉 渡航期間 3 ヶ月以上

留学先① Japan Austria Science Exchange Center, TU Wien (オーストリア)

参加学生：今枝秀次郎 工学系研究科建築学専攻 博士 3 年

渡航目的：研究

実施期間：2019年 4 月 8 日～2019年 9 月 30 日

留学先② デュースブルク・エッセン大学 (ドイツ)

参加学生：鈴木由真 教育学研究科総合教育科学専攻 博士 3 年

渡航目的：客員研究員として研究

実施期間：2019年 4 月 1 日～2020年 3 月 31 日 (予定)

留学先③ ハーバード大学メディカルスクール (アメリカ)

参加学生：広瀬思帆 新領域創成科学研究科メディカル情報生命学専攻 博士 1 年

渡航目的：Edwwin L. Steel Laboratories for Tumor Biology, Department of Radiation Oncology での研究インターンシップ

実施期間：2019年 4 月 28 日～2019年 9 月 3 日

留学先④ ミラノ工科大学 (イタリア)

参加学生：吉崎れいな 工学系研究科機械工学専攻 博士 2 年

渡航目的：IFN-CNR and Department of Physics での研究留学

実施期間：2019年 9 月 17 日～2020年 3 月 24 日

留学先⑤ ニューカッスル大学 (イギリス)

参加学生：小川景司 農学生命学研究科農業・資源経済学専攻 博士 1 年

渡航目的：Centre for Rural Economy 客員スタッフとしての研究インターンシップ

実施期間：2019年 10 月 1 日～2020年 2 月 28 日

〈長期留学報告 1〉

留学報告書

GLAFS2 期生
大学院工学系研究科建築学専攻 博士 3 年
今枝秀二郎

① 留学準備

・応募

私がお世話になったのはウィーン工科大学 (Technische Universität Wien / TU Wien) の JASEC (Japan Austria Science Exchange Center, TU Wien) という機関で、2019 年 4 月上旬から 9 月下旬までの半年間、Exchange Student の身分で留学しました。

工学系研究科では、2 通りの応募方法があります。1 つは研究科を通じて工学系研究科との提携大学に対して応募する方法で、提携先からの情報が得られやすいため留学先を選ぶのが簡単であり、大学からの補助が

得られる場合があるという利点の反面、締切が早く留学時期を自由に決めることができません（4月開始・9月開始など）。もう1つは、自分で直接留学先と交渉する方法がありますが、好きな時期を決めて提携先以外の大学や研究所に行くことができる反面、手続きは全て自分で行なうことになります。私は、博士課程最後の学年に留学することに決めたので、研究の進捗状況が直前まで定まらないことから、時期が自由に選べるという点で後者の方法で留学しました。

上記の留学方法のような情報収集や GLAFS への相談は 2018 年 6 月頃より行なっていましたが、直接的な動きとしては、2019 年 4 月 8 日からの留学に対して、提携先の先生に初めてメールをさせて頂いたのが 2018 年 12 月中旬で、留学 3 ヶ月半前でした。その後 2019 年 2 月上旬に、別件の欧州出張にあわせてウィーンへ立ち寄り、ウィーン工科大学に伺って直接受け入れ予定の先生へのご挨拶等を済ませました。そして 3 月後半に入居する寮が決定し、無事に 4/8 より留学することができた、という流れになっています。偶然ですが、2018 年 4 月—9 月の半年間、私が日本で所属している研究室に JASEC より留学生が 1 人来ていたため、彼を通じて工科大学の先生を紹介して頂いたことに加え、博士課程最後の学年のため取得単位などの制約がなかったため、このようなギリギリの準備でも間に合ったと思います。そのためあまり参考にならないかもしれませんが、もしよく知っている先生の研究室に留学したい場合は、私のように短期間で留学を決めることもできますので、自分で交渉する方法も選択肢に入れてよいと思います。

また、ヨーロッパはシェンゲン協定という協定国内の移動の自由がありますが、シェンゲン協定国における日本人の滞在期間は、観光ビザで 90 日の国が大半です。しかし、オーストリアでは日本人は 180 日まで観光ビザでの滞在が認められているため、ビザの申請の必要がありませんでした。しかし半年以上の滞在の場合はビザを取る必要がありますので、この点にご注意下さい。ただし、この国による（観光ビザでの）滞在可能日数の違いは、3 ヶ月以上の欧州滞在で様々な問題を引き起こす可能性があります。その問題については後述します。

・渡航前の準備（研究面）

渡航前から、2020 年 3 月卒業を目指しており、留学準備を始めたのは博士課程 2 年でした。従って、渡航前の研究準備としては、博士 2 年の終わりまでに日本で必要な研究データは全て取り終わり、留学中にデータ解析や論文執筆を進めるつもりでした。そのために留学が可能と判断できた時期が遅くなってしまいましたが、渡航の半年前頃にはおおよその目処がついてました。私の場合は、博士論文の内容は日本での研究がメインだったためこのようなスケジュールでしたが、海外で博士研究を進める場合は、もっと早い時期からの留学が必要となると思います。重量の関係で研究データを紙で持つていくことは難しいため、事前に全てスキャンをしておく、論文化しておく等の準備が必要でした。また、留学中の日本の研究室とのミーティングに備え、後輩と Skype を使える環境を整える、万が一の事態に備え必要な書類等を日本の研究室の机の鍵がかかる引き出しに入れておく、といった準備も行ないました。

もちろん、本専攻の指導教員には早くから留学の希望を相談しておりましたが、同時に GLAFS の菅原先生、宮原さん始め先生方に相談させて頂きながら、必要書類の提出をしました。

・渡航前の準備（生活面）

元々 GLAFS からは、渡航費と滞在費を援助して頂けるとの話を伺っておりましたが、私は日本学術振興会の特別研究員（DC）だったため、滞在費は頂けないことが 3 月になってから判明しました。これは留学中の滞在費が GLAFS の奨励金として支払われるためであり、DC の給与と出処が同じ文部科学省であることによるものです。そのため、滞在費用は自費という形で留学することとなりました。

滞在先ですが、オーストリアの大学は基本的に寮を持っていません。そのため、ÖAD（OeAD）という寮を運営している会社が持つ滞在先から選択するか、Airbnb で自分で探すかの 2 つの選択肢を受け入れ先から提示され、私は前者を選びました。ÖAD の場合、学生の身分を示すと少し安く滞在することができますが、受け入れ研究機関からの証明書が必要です。また私のように直前の申込みの場合は、必ずしも希望の場所に入居できるとは限らず、調整に時間がかかりました。そのため、最終的に寮が決まったのが 3 月下旬という

留学直前となりました。ちなみに私の入居先は複数人でのシェアハウスで、キッチンが共有スペースであり、私以外には居住者の入れ替わりが早かったことから、様々な国の人と知り合いになることができました。ランドリールームは1つしかなく、住人の総数に対して洗濯乾燥機が少なかったことから、利用時間の調整が必要でした。

オーストリアの使用言語はドイツ語ですが、私は日常会話程度であればドイツ語は話せましたので、言語面での準備はしませんでした。ドイツ同様、オーストリアでは大学関係者は英語が話せますので、英語ができればドイツ語は全く必要ないかもしれません。

その他、ヨーロッパではクレジットカードが必須ですが、半数以上がVISA、ついでMaster Cardであり、American Express やJCB を使える場面はほとんどありませんでした。北欧のように現金をほとんど見かけない国もありますが、オーストリアではまだ現金のみ使用可の場所もあります。私は寮の支払いも現金でしたので、事前に日本で両替して持っていました。

② 留学先の概要

ウィーン工科大学は、約200年前にオーストリアのウィーンに設立された大学です。ウィーンにはウィーン大学やウィーン経済大学等有名な大学がいくつかありますが、建築を専攻する場合はウィーン工科大学になります。楽友協会 (Musikverein) の向かいにある建物で、ウィーン市の中心に近い場所に位置し、Karlspatz という地下鉄の駅もあるため、交通アクセスは非常に良い大学です。私が受け入れて頂いたのは、JASEC (Japan Austria Science Exchange Center) という大学の機関の1つですが、名前の通り日本との関係が深く、東大のほか北海道大学、慶応大学、京都工芸繊維大学等多くの日本の大学との提携があります。JASEC のトップは Iris Mach 先生という女性の先生で、建築が専門であり、東大にも留学経験がある方です。私は Iris 先生と主に連絡をさせて頂きながら、留学の話を進めました。私は最終的に Iris 先生に受け入れて頂いたのですが、JASEC からは受け入れ先としての候補をいくつか頂くこともできましたので、建築でない方の受け入れの相談も可能と思われます。事務手続きや生活面での相談においては、Iris 先生その他、同じく JASEC の Thomas Rief 先生、カール由紀子先生にお世話になりました。

ウィーン工科大学では、日本の大学とは異なり、通常の学生は研究室に机がもらえません。自分の机が使えるのは研究員等の大学から給与をもらっている職員以上になります。

ただし JASEC には共用の部屋があり、共用 PC 等も使うことができます。鍵も貸して頂けるため、24 時間いつでも使用可能です。これは他の大学の学生や、ウィーン工科大学に通う現地の学生からも驚かれることが多く、研究環境や作業環境としてはかなり恵まれています。従って、工学部の博士課程の学生でウィーンで研究をしたい、という場合は、JASEC の環境は非常によいものであると実感しました。

③ 留学期間中

・研究生活

私は研究をメインとして留学しましたので、ウィーン工科大学の授業は履修しませんでした。従って毎日大学に行く必要はなかったのですが、上記のようにいつでも研究室が使える状況であることと、自身の生活リズムのため、平日日中は研究室に行くことを心がけていました。また、日本の研究室ミーティングが水曜日の 15:00 (JST) からありましたので、それに朝 8:00 (CEST) より Skype で参加していました。今でいうテレワークのようなものですが、現地から発表、質疑応答も問題なくでき、先生方からの指導も受けることも可能でした。ただ、ヨーロッパは全体的にインターネット環境がよくありません。古い建物が多く壁が分厚いことや、日本ほど Wi-Fi のアクセスポイントがないこともあり、無線での通信環境は貧弱なのですが、有線では無線ほど問題が発生しないので、Skype は大学の共用 PC から有線接続で参加、などと使い方を分けていました。

また大学図書館は、学生以外でも誰でも使用可能です。図書を借りる場合のみ学生証が必要ですが、作業

をする時や、文献を探す場合には誰でも利用できます。その他先生方にアポを取ればお話を伺ったり研究室を訪問することも可能ですが、仕事とプライベートを完全に分離されている先生方も多いため、休暇期間中の連絡は不可能なこともあり、私のように夏休みにかぶる場合などは注意して下さい。

・現地での生活

ウィーンは、スペインやイタリアを除くヨーロッパ主要都市の中では比較的南の方にありますが、それでも北海道よりも北に位置します。そのため冬はかなり寒くなりますが、雪はそれほど多くはないようです。半年の留学の場合は、私のように4-9月だと寒い冬を経験しなくて済みますが、全ての建物が北海道の多くの建築と同様に冬をメインに考えて作られておりますので、冷房がない建物がほとんどで、大学にさえ冷房はありません。冷房が設置されているのは一部のホテ、地下鉄の駅、図書館、スーパーなど限られた空間になりますが、近年、夏のヨーロッパはかなり暑くなるが多くなってきました。2019年の私の滞在中も、パリで42度を超える気温が観測されるなど、ヨーロッパでは度々「熱波」が問題となっています。過去にはヨーロッパ全土で1万5千人が熱中症で死亡したこともあり、年々暑い日が増えているようです。ただし日本と異なり湿度はほとんどありませんので、日陰に入れば比較的涼しく感じます。また、暑い日が続く期間も日本と比べれば短いため、現地の方々の考えとしては、何週間か暑い日を我慢すればなんとかなる、というイメージでした。私の住んでいた寮にも冷房がありませんでしたので、暑さからの逃げ場がなく、熱波がヨーロッパを襲った数週間は大変でした。そのため気温が最も下がる午前4時半には起床し、6時には大学に付き、夕方に家に帰るという生活を繰り返していました。しかし日中と夜間の寒暖差が激しく、日中に40度近くなる場合でも夜間は10度ぐらいまで下がることもある他、4-5月はまだ寒く、また8月後半には既にセーターが必要になるなど、寒くなる時期が日本より早くなっていました。従って、3-4ヶ月以上の滞在の場合は夏・冬の両方に対応できる服装が必要だと思います。夏は日本と比べ日が長く、夜も21時頃まで明るいいため、夜更かしをしないように気をつける必要があります。日本のように簡単に病院に行かれないため、自身の体調には日本にいた以上に気をつけました。飲み慣れた薬などあれば持参する必要があります。ウィーンでは水道水が飲料水としても利用できたため、大変助かりました。物価は日本とあまり変わりませんが、チップ込みの外食は日本より高いため、節約も兼ねて私は自炊していましたが、そのための食料のまとめ買いなどは研究の間の気分転換になりました。ただし注意しなければならないのが日曜祝日で、スーパーを含むほぼ全ての店が休みとなります。そのため買い物は平日中にする必要があります。国民の祝日も同様の扱いのために、注意しなければなりません。ヨーロッパらしく、キリスト教系の記念日がいくつもあります。特定の宗派の人のみの記念日の場合と、国民の祝日となる日があり、特に後者を把握しておく必要があります。こうした情報はインターネットですぐ検索できますが、日本の祝日とは全く合わないために、買い物やメールのやり取り等をする場合は注意していました。

ウィーンは、東京ほどではありませんが、ヨーロッパの中ではロンドンと同様に公共交通機関が発達しています。地下鉄に加え、路面電車、バスが数多く走っており、1枚の定期券で全ての乗り物に乗ることができます。また、翌日が休日の場合は公共交通機関は終日運行しているため、朝2時や3時でも家に帰ることが可能です。そもそもウィーン自体もそれほど広くなく、歩いて20分程度で旧市街地を縦断することができます。こうしたコンパクトさや利用可能な公共交通機関の豊富さからか、日中に出歩いている人は多く見かけました。

・余暇の過ごし方

先述の通り私は滞在期間が短かったため、旅行や遊びに行く時間はほとんど取れませんでした。ただしヨーロッパは陸続きなので、週末に電車で隣の国に行くことも簡単にできます。例えば、オーストリアの東隣はスロバキアですが、ウィーンから電車で40分でスロバキアの首都ブラチスラヴァに行くことが可能です。物価が安く、飲み会だけのためにスロバキアに行く現地の人も多いようです。

またウィーンは音楽の都とも言われる通り、楽友協会をはじめ多くのコンサートホールや、国立のオペラ座など、その気になればいつでも行くことができます。チケットはインターネットから取れますし、値段も

安いものから高いものまで幅広くありますが、夏季には休業期間もあることには注意が必要です。また美術史美術館他多くの美術館、博物館が市内にありますし、シェーンブルン宮殿やホーフブルク宮殿などの見学も可能で、芸術方面にも興味がある方にとっては、1年の滞在でも短く感じるかもしれません。

他国に出国する場合、観光ビザの方は注意が必要です。90日滞在まではシェンゲン協定国内は自由に行き来ができますが、90-180日の滞在の場合オーストリアから出国ができない可能性もあります。例えば、ドイツはシェンゲン協定内に入国してから90日以内は観光ビザで滞在可能ですが、オーストリアに滞在して100日目にドイツに出国できるか、という問題が発生します。これは、訪問先の国の外務省が判断する問題ですので、各国に対して事前に確認しなければなりません。私は90-180日の間にどうしてもドイツに行く必要があったため、在ウィーンのドイツ大使館に確認しました。その結果、日本人がオーストリアに180日滞在できるのは、あくまで日本とオーストリアの2国間協定のためで、シェンゲン協定とは関係なく、ドイツ滞在の日数にはカウントされないためドイツの入国が可能、との返事を頂きました。これは私が滞在していた際に確認できたものですが、こうした出入国の判断は担当者によって判断が変わる可能性が高く、文書等の証拠を残しておくことが重要です。シェンゲン協定国内の移動は基本的に自由ですが、新型コロナの問題のようにいつ国境が閉鎖されるかは分かりませんので、考えられる限りの対策は事前にしておいた方がよいと思います。

④ 次年度参加する学生へのアドバイスなど

現在は、インターネット上で得られる情報が多くあります。特に多くの日本人が住んでいるヨーロッパ主要都市では、日本語でブログを書く方もいるため、日本滞在中からかなりの情報が入手可能です。アジアと異なり、ヨーロッパは日本からかなり離れていますので、緊急事態の際には自分で対処しなければなりません。滞在中の保険加入や、現地でも日本人同士と一定程度交流し情報共有しておくなど、万が一の備えが必要と感じました。

⑤ その他特記事項



ウィーン工科大学で行なったミニレクチャー



ウィーン工科大学のメインエントランス

留学報告書

GLAFS4 期生

新領域創成科学研究科メディカル情報生命専攻 博士 1年

広瀬思帆

1. 留学準備

応募

留学での目的は、マサチューセッツ総合病院（MGH）にある Edwin L. Steele 腫瘍学研究室にて、各国から集まる癌研究者・臨床医と協力し、分子標的治療と免疫療法を組み合わせた新たな癌治療法の探索に携わることで、臨床応用を見据えた知識と経験を身につけることである。

日本の基礎研究の成果は、多くの創薬につながるシーズがあるにも関わらず、臨床にいかす体制が欧米よりも遅れていることが問題となっている。特に米国では、大学やベンチャー企業および製薬企業が連携して新薬の開発や適応領域拡大を進めており、私もボストンの地でそのスピードの速さを目の当たりにした。現在、日本の研究成果は欧米で実用化されてからでしか日本に導入することができないとの指摘もある。そこで私は、多くの大学や研究機関、ベンチャー企業、製薬企業が集まるボストンで、世界各国から優秀な医師や研究者が集まるMGHを留学先を選んだ。そこで、橋渡し研究の実績が豊富な Duda 博士の指導の下、臨床での治療を視野に入れた、より現実的な研究計画を遂行できるようになりたいと考え、4ヶ月の短期留学を希望した。

渡航前の準備（研究面・生活面）

先方より留学の許可を得てから、早速事務を担当する職員とメールでのやりとりを開始した。2018年6月にボストンを訪問し、MGHを訪問した。見学の際には、実際に指導を受ける予定のメンターの先生と研究の概要について話した。今回の留学ではMGHに所属して実験をするため、J1ビザを取得する必要があるがあった。MGHではビザの区分によって、MGH内で許可されていることが厳密に決められている。MGHで自分の手で実験をするためには、J1ビザの取得が必須であった。J1ビザを取得するまでの大まかな流れとしては、所属機関にDS2019という書類を作成していただき、その後許可署名が入った書類が郵送で送られてくるため、アメリカ大使館にビザの面接予約を行い、面接を受ける流れとなる。DS2019発行の際にはMGHの事務担当の方に自身の履歴書・大学からの卒業証明書・成績証明書および銀行の残高証明書を送付した。ビザ申請の際にいくつか重複して必要になる書類があり、MGHにてDS2019の発行を確定してから再度証明書を発行しなければならないことを念頭に置かなければならなかった。

渡航準備の際に一番苦勞した点はDS2019の発行と面接予約であった。通常パスポートの発行には最低2週間を必要としており、渡航1ヶ月を切った状況でも書類が手元に届かずにいた。最終的には渡航2週間前という間際でパスポートが郵送されたため、次の渡航には余裕をもって派遣先とのやりとりを行うべきだと感じた。

2. 留学先の概要

MGHは、マサチューセッツ州ボストンにある病院であり、ハーバード医科大学の関連医療機関である。MGHはアメリカ東部の病院の中でも中心的な病院であり、世界五大医学雑誌の一つである「ニューイングランド・ジャーナル・オブ・メディスン」では、病院内での診断例や症例などの報告が行われている。研究室の教授であるJain博士は、工学者である背景を生かし、腫瘍を物理学の観点から捉えた新規性の高い研究を行っている。固形癌に多く見られるマトリクスを減らす薬剤により腫瘍血管の血流を改善する「腫瘍血管正

常化」という概念を世界で初めて提唱し、臨床における治療法の 1 つとして確立させている。現在では、血管を含めた腫瘍を取り巻く環境を改善し治療効果を高める「腫瘍微小環境の正常化」という概念のもと研究が行われている。

Edwin L. Steele 研究室では、Jain 博士を頂点とし、その下に独立した 8 人の准教授や講師が在籍している大きな研究室である。それぞれ独立したチームを持ち、独立したプロジェクトを持っている。時には、それぞれの得意分野を補いながら、同じプロジェクトを進めるなど、多種多様な研究が同時に盛んに行われている。私は、自身の興味に最も合っている Duda 博士のチームに在籍した。Duda 博士は多くの製薬企業と共同で、新規治療法の探索などを行うトランスレーショナルリサーチと、臨床で使われている薬剤を基礎分野でより詳しく解析するリバーストランスレーショナルリサーチを中心に行っている。その中で、私はチロシンキナーゼ阻害薬を用いて腫瘍血管の正常化システムを構築し、免疫療法による抗腫瘍効果を高めることで、様々な癌種に対する治療法の探索や、悪性度の高い転移性癌の転移抑制機序の解明を行っている。

留学期間中 研究生活

Duda チームの大きな特徴の一つとして、製薬企業との共同研究が挙げられる。派遣先研究室では、MGH 内でも最大のマウス飼育室を保有している。また様々なモデル動物を確立しており、動物実験を用いた解析手法が充実している。留学中は週 1 回のチームミーティングがで、進捗状況に関して意見をもらいながら研究を進めた。また、チームには放射線腫瘍医を含めた臨床経験を有する医師が多数在籍していたため、日常的に臨床現場での話を取り入れた議論を聞くことができた。

私の大学院での研究は、細胞株を用いた細胞生物学・分子生物学的な手法が中心であった。そのため、私はこれまで動物を用いた *in vivo* 実験や、その動物から採取したサンプルを使つての *ex vivo* 実験、また組織学的な解析手法に触れたことがなかった。留学して初めて、動物個体からのサンプリングや組織切片の作製、免疫組織化学による染色など、より個体レベルでの病態を観察することができる実験手法に触れることができ、日本では全く経験することのできない研究を行うことができた。留学前の予備知識として、正常血管と腫瘍血管の特性などを学んだつもりではあったが、実際に CD31 や SMA などのマーカーから血管の構造を見極め、考察することは難しかった。特に、Cryostat を用いた標本作製では、薄切や固定がうまくいかなければ、その後の染色に大きな影響を及ぼすため、スライドガラスへの貼り付けなど手技的に難しいと感じたことが多く、何度も思考を重ねる必要があった。染色の過程でも染色斑をなくすために様々なことを調整する必要があり、苦戦した。練習を重ねる過程で細かな手技を学ぶことができ、組織学を体系的に学ぶことができた。

一日の流れは、実験の開始時間に合わせて出勤し、午前の実験、昼休憩、午後の実験あるいはメンターの動物実験の見学、帰宅という流れであった。毎週木曜日の午前中にチームミーティングがあり、その週の研究進捗状況と次週の予定の確認、予算管理などについて情報共有がなされていた。MGH では毎日のように著名な研究者を所内外から招聘し、講演会やワークショップなどを開いているため、実験が予定されていない日でも勉強する機会があった。留学プログラムの終わる最後の週では、自分がこれまでのトレーニングや研究プロジェクトの手伝いを通じて学んだことを発表する機会をいただいた。

4. 現地での生活・余暇の過ごし方

私が住んでいたボストン近郊の Davis 駅は、Tufts 大学も近く学生が多い。そのため、夜遅くても比較的
安全な街として知られている。ボストンは国内での物価と家賃が二番目に高い地域のため、留学費用の殆どは家賃と食費に充てられた。私の住んでいたゲストハウスは日本人が大家さんであるため、契約もスムーズであり、また毎日夕飯がついていたため、日本食に恋しくなることはなかった。普段の交通はボストン近

郊に通っている MBTA の電車かバスを使用していた。ボストン市内やダウントウンへは電車を使えば、車がなくても特に生活に困ることはなかった。ボストンは日本人も多く居住している街として知られており、日本食のレストランやスーパーなどが非常に充実していた。また、家から徒歩 5 分と近いところにも夜 11 時まで営業しているスーパーがあり、食材の調達に困ることはなかった。物価の高さを除けば、非常に住みよい街だと感じた。

5. 次年度参加する学生へのアドバイスなど

今回の留学で良かったと思った点は、留学に行く前年に一度メンターや自分の進路に関わる方達に会うことができたことである。ボストンで知り合いができたことで、渡米してからすぐに良いスタートを切ることができた。現地の日本人コミュニティや研究コミュニティにも参加し、交友関係を広げることができたことがとても良い財産になったと感じている。もし学生の中で留学を考えている人がいたら、留学先を決定した時点で、派遣先の知り合いを何人か作っておくことを勧める。

人生で初めてアメリカでの留学生生活を体験し、最高の思い出を作ることができたことにとても感謝している。ボストンは研究環境が非常に優れているだけでなく、創薬分野においても大学を取り巻く環境やビジネスが世界一優れており、特に創薬分野へ進路を考えている私にとって最高の環境のもとで勉強させていただくことができた。

※〈長期留学報告 2・4・5〉については帰国が 2020 年度末であり、本報告書作成時点で留学報告書が未提出のため、割愛する。

■ グローバル演習 3：国際共同ワークショップ・スタジオ、外国人特別講義／セミナー

2019 年度の実績は以下のとおりである。

4/8 Martin Pallauf 先生 特別セミナー

オーストリア・チロルにある University for Health, Sciences, Medical Informatics and Technology (UMIT) の Martin Pallauf 先生を囲んでの特別ランチセミナーが、4 月 8 日、ライブラリにて開かれた。講演のテーマは“Assistive technologies in the living space of seniors citizens- a pilot project in Austria”。ヨーロッパで販売されている高齢者向けの支援機器約 80 種類を高齢者に実際に暮らしながら体験してもらい、試用感を調べたオーストリアでの大規模な研究プロジェクトについてお話しいただいた。新しい技術が高齢者の暮らしにどのように受け入れられ、暮らしを支えるかについて、日本とヨーロッパとの類似や相違について、活発な意見交換が行われた。

6/13 一橋大学 EMBA プログラム 豊四季台団地見学への参加

一橋大学ビジネススクール (Hitotsubashi ICS) が主催し、世界の主要ビジネススクール生向けにひらいているプログラム「EMBA Global Network for Advanced Management Tokyo Program: “Super Aging Society Japan”」の一環で、世界各地でビジネスを学ぶ 24 名が、柏市豊四季台団地を訪れた。GLAFS から呂偉達さん (新領域創成科学研究科 修士 2 年)、楊映雪さん (教育学研究科 修士 2 年) が、GLAFS 共同研究 4/5/6 で取り組んでいる「豊四季台地域活動館」

での研究実践活動を紹介した。その後、複数のグループに分かれて、1 時間ほど豊四季台団地を見学し、高齢化する地域社会が抱える課題、その課題への対応について等、ディスカッションを行った。

参加者は、出身国、所属ビジネススクール、産業界での経験などが多様であり、それぞれの立場から人口高齢化の最先端にある日本社会の取り組みやビジネスとしての可能性について高い関心を持って参加していた。GLAFS 生はそれらの質問やコメントから多くの学びを得ることができた。

〈コース生の感想〉

呂偉達（新領域創成科学研究科 修士 2 年）

Orienting to “Super Aging Society Japan”, the event of “Tokyo Week” attracting MBA students from all of the world, was held at Toyoshikidai. As a student both of the University of Tokyo and GLAFS, I did have the great honor to join this time.

The current situation including the medical system and the present existed problem on aging society in Japan, using Kashiwa-Toyoshikidai as the example, was introduced in detail. Out of my expectation, lots of questions were raised especially on the aspects of “family medical system”, “community medical system” and “sustainability of these systems” comparing with the condition of their own countries. The great discussion made me not only realize the great efforts Japan has done to improve the aging society problem and the aging problem in other countries but also there are still many problems in front of us.

In the afternoon, groups were divided and the visit around Toyoshikidai was conducted. During the visit, I did have great communication with MBA students from different countries. What the participants concerned most during the visit in Toyoshikidai is how the seniors around here could have convenient and comfortable life. They were often surprised by such details aiming to seniors like the bench design in the bus station, the low goods shelves in the supermarket, and also the complete ancillary facility, such the clinic, fitness room, library and schools in the community. On the other hand, they also pointed out the problems in their own countries and would like to use what they have seen and learned in Japan for reference to improve the aging problems in their own countries.

Through the great communication with the MBA students from all of the world, I did get more understand to both the aging situation in Japan and in other countries. The greatly warm heart and curiosity impressed me much, which also confirmed my faith to contribute myself to the aging society issue and make this whole society better.

10/7～10 ショートコース「高齢者の健康」（共催）

10 月 7～10 日の 4 日間にわたって、医学系研究科国際地域保健学教室との共催で、タイ・マヒドン大学公衆衛生学部修士課程学生を対象にしたショートコースを開催した。テーマは「高齢者の健康」で、レクチャー、ワークショップの合間に、柏市で実施されているフレイルチェック活動の視察なども行われた盛り沢山のプログラムを組んだ。タイ・マヒドン大学からは 15 名の学生が参

加。GLAFS からは Suthutvoravut Unyaporn さん、Shah Richa さん（いずれも医学系研究科博士3年）がレクチャーや視察に同行し、参加したタイの学生と交流をした。

10/21 戴廉氏 特別セミナー

中国 Shulan Health Management Group 副総裁であり、国際交流基金の招聘で東京大学高齢社会総合研究機構にて客員研究員として日本の高齢社会対策を研究された戴廉氏を囲んでの特別ランチセミナーが、10月21日、ライブラリにて開催された。

戴廉氏はジャーナリスト出身であり、医療政策の専門家として米国ジョーンズ・ホプキンス大学の博士課程にも在籍。2019年9月から国際交流基金のプログラムで来日し、日本の高齢社会について学んできた。

セミナーでは、GLAFS 生とともに参加した柏市豊四季台地域での一人暮らし高齢者の集いの場で、高齢者の皆さんから質問されたことを紹介した上で、世界最大の人口を抱え高齢化が急速に進んでいる中国の高齢化の状況と課題について、広くお話をいただいた。

〈コース生の感想〉

張俊華（医学系研究科社会医学専攻 博士1年）

戴廉さんの講演のテーマは“Challenges and Opportunities-How China Responses to Aging and How We Could Learn From Japan”。急速に高齢化が進み、‘未富先老’（Aging Before Rich）中国で、14億人を支える社会保障政策やヘルスケア関連産業はどうなっているのか、私は個人的に一番関心を持ち、興味深くお話を聞きしました。近年中国では著しい経済発展と共に、2020年の国民皆保険の実現に向けて、強制加入・任意加入の是非を問わず、すべての国民が加入できる制度の枠組みを整えてきました。高齢者介護問題については、国からの方針「民間資本の養老サービス産業への参加奨励」などが打ち出されて、各地方政府においては独自に様々な施策を展開しているのが現状です。一方で、需要を満たすほどの供給量がない上に、専門的な介護を提供するよりは家政婦と同様のサービスを行っており、質量共不足しているという課題が存在するようです。高齢化や所得など地域間、地域内（都市・農村間）で格差がまだ大きい状況下においては、中央政府／地方政府から制度の運営主体の財源もその影響を受けやすい状態にあるから、この過程で発生した制度間、地域間の受給格差の是正をどう考慮されているのか疑問に思いました。おそらく決まっている答えがなく、もっと掘り下げて勉強したいと思いました。良い機会でした。ありがとうございました。

コアセミナー

コアセミナーとして、次のような学際的な研究指導の体制を確保した。

- CS1：修論・博論の研究に関し、他分野の教員やインストラクター、学生等による分野横断的なディスカッションの場を確保し、専攻での専門的研究が、現実の高齢社会問題の解決に資するものとなるよう、視野を広げ、発想を深める研究指導
- CS2：医療・看護・介護や、まちづくり、新たな高齢者ビジネスなどの様々な現場で活動されている第一人者の方をお招きし、お話をうかがい、ディスカッションするケーススタディ

月	日	CS 1	CS2	
			内容	講師
4月	20日	グループ共同研究発表会 1 研究進捗状況発表会 1		
5月	11日	グループ共同研究活動 1	セミナー 1 「要介護期の自立を考える：通所介護編—ナイトデイサービス よいち銀座 はくちょう（通所介護事業所）の取り組み—」 社会福祉における措置の発想から脱却し、自立支援の時代にふさわしい、当事者ニーズを踏まえた介護サービス（通所編、訪問編、短期入所編）についてアセスメントとともに考える。	阿部珠江（社会福祉法人よいち福祉会 特別養護老人ホームゆうり副施設長）
	25日	研究進捗状況発表会 2		
6月	1日	グループ共同研究発表会 2		
	8日		セミナー 2 「生活支援を問い直す（自宅で暮らす・最期を過ごす）」 住みなれた自宅で最期まで自分らしく暮らすためには、住まいとケアがどのように連携すればいいのか、要介護になったときの生活支援はどうなっているのだろうか。そこで、住まいとケアサービス、さらには生活支援との連携の最前線を学ぶ。	柴田範子（非営利活動法人 楽 理事長） 関野幸吉（SOMPO ケア株式会社 役員理事） (G2 と連動)
	15日		セミナー 3 「グループワーク技法を学ぶ」 当事者が私的生活の深層をみつめ、自分の真のニーズに気づくことを促し、意識変容とともにそれらを政策形成へとつなげていく手法について学ぶ。集団的意思形成手法、小集団の知識を集約し構造化する技法（KI 法型WS）について、実習を通して学ぶ。	杉崎和久（法政大学大学院教授） (共同研究の手法と連動)
	22日	グループ共同研究活動 2	特別セミナー 1 「Politics of Anguish: How Alzheimer's disease became the malady of the 21st century」	Mario Garrett (Professor, San Diego State University)
	29日		セミナー 4 「高齢期に自宅をどう管理するか？ バリアフリー・住み替え支援」 高齢期に負担となる戸建住宅の管理について、バリアフリー支援、住み替え支援、リバースモーゲージの活用事例などを学ぶ。高齢期の在宅生活を支えるための居住環境、その際に必要な要件を検討し、住まいの観点からみた課題解決について理解を深める。	岸英恵（積水化学工業株式会社住宅カンパニー 高齢者事業推進部部長） 久須美則子（コミュニティネットワーク協会 東京センター長） (G3-2 と連動)
7月	6日		セミナー 5 「Soceity 5.0 地域を見る+守る」 心身が弱ってきた高齢者の自立的生活を支えるためには、地域協働の見守りと生活支援体制が重要となる。地域住民による見守りの最前線、および住民の限界を専門職との連携や AI 等の ICT 技術の活用によって協働して行う取り組みの最前線を学ぶ。	伊藤研一郎（高齢社会総合研究機構特任研究員） 牧敦（株式会社日立製作所・日立東大ラボ 主管研究員） 高野渉（大阪大学特任教授） (G7 と連動)

7月	13日	グループ共同研究活動 3		
	20日	研究進捗状況発表会 3 グループ共同研究発表会 3		
	27日	グループ共同研究活動 4	セミナー6「復興期のコミュニティデザイン」 災害からの復興は社会基盤インフラの近代化を意味するが、しかし被災地においても高齢社会、人生100年時代への対応が求められており、インフラ・住宅だけでなく、生きがいづくり、地域福祉、地域経済などを同時に解決する立体的な復興が求められている。自然災害の多い我が国における災害復興と高齢社会対応についてコミュニティの視点から学ぶ。	似内遼一（高齢社会総合研究機構 特任研究員） 梅本大輔（高齢社会総合研究機構 特任研究員） （G4/5/6 と連動）
10月	5日		セミナー7「団塊スタイル最前線—シルバーク民主主義を脱却できるのか？」 「社会保障制度の充実が少子化を招く」「人生100年時代を強調すればするほど、消費は冷え込む」等、少子高齢化をファクトとデータで読み解いていくと、意外な事実が見えてくる。世代間格差についても然り。経済学を通して読み解く世代間格差の実像と、その是正のための抜本的な改革案について伺う。	島澤諭（中部圏社会経済研究所 研究部長）
	19日	グループ共同研究発表会 4		
	26日		セミナー8「リビングラボ：ニーズのつなげ方」 超高齢社会対応の製品・サービス開発の手法として注目を集めているリビングラボ（鎌倉リビングラボ・地域共創リビングラボ・エイジフレンドリーリビングラボ秋田）がもつ可能性について理解を深める。	本多広幸（高齢社会総合研究機構 協力研究員） 近藤早映（先端科学技術研究センター 特任助教）
11月	2日		セミナー9「高齢者福祉の未来」 最期まで自分らしく、家族や地域とともに暮らしていく実態を知るそして、人が生き切ることとはどういうことか、そのために家・ケア・医療のみならず、福祉制度はどうあるべきか、まちづくりには何が必要となるのかを考える。	和気純子（首都大学東京教授） 税所真也（高齢社会総合研究機構 特任助教）
	9日	研究進捗状況発表会 4		
	16日		セミナー10「どうしたら最後まで“作って”食べられるか？」 後期高齢者になると1日3食365日の買い物・食事づくりを行うことに体力面での課題が生じる。しかし人は食べなければ暮らせない。栄養が大切という局面から、1日3食をどう確保するか？という局面に当たり、食を中心とした介護予防・生活支援の最前線を学ぶ。	平野覚治（老人給食ふきのとうの会 理事長） 入澤いづみ（社会福祉法人正吉福祉会 管理栄養士）
	30日	グループ共同研究活動 6		

12月	7日		セミナー 11 「高齢者の移動を支援する」 高齢者の移動を支援する諸制度（交通バリアフリー法など）について、基礎的なことから、最新の論点までを学ぶ。高齢者の移動や見守りを支援するための機器は、支援を受ける人の生活の質確保、介護職員の負担軽減などさまざまな観点で期待が高まっており、その実態を把握する。	大森宣暁（宇都宮大学教授） 河原民子（NPO 法人全国移動サービスネットワーク副理事長）
	14日		セミナー 12 「Age Friendly City (AFC) 」 WHO の目指す AFC と超高齢社会における地方自治体の政策のあり方を考えるとともに、超高齢社会における地方自治体の総合的な政策のあり方についても議論する。	児玉夕子（秋田市福祉保健部長寿福祉課エイジフレンドリーシティ推進担当 主席主査） 後藤純（高齢社会総合研究機構特任講師） （G4/5/6 と連動）
	21日	グループ共同研究発表会 5 研究進捗状況発表会 5		
1月	11日		特別セミナー 2 「日本人の死生観——落語と仏教」 無宗教と言われる日本人。だが、伝統的な芸能には、仏教を基盤として成立しているものや、仏教の影響を強く受け展開しているものが多く、実は落語もそのひとつだ。今回の特別講義では、落語を導入に私たちの日常生活に脈々と息づいている仏教の死生観について、お話ししていただく。	釈徹宗（相愛大学教授／浄土真宗本願寺派・如来寺住職）
			特別セミナー 3 「栄養寄り添い型ソリューション」 増大する在宅療養者に対する食事・栄養支援を行うため、栄養ケアサービスの確実な提供を目指し、地域住民に「寄り添い」そして「ソリューション」を実践している取り組みについて学ぶ。	西村一弘（日本栄養士会理事）
	25日	グループ共同研究活動 7		
2月	8日	研究進捗状況発表会 6		
3月	7日	国内報告会 グループ共同研究発表会 6		

3・国際・産学活動

国際セミナー・学会等参加状況

10/23～27 11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress

10月23日から27日にかけて、台湾の台北市で11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress

gy and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress (IAGG2019: 国際老年学会アジア・オセアニア地域大会)が開かれ、GLAFSからは4人の学生が参加した。個人研究の発表のほか、共同研究グループG4が“Exploring the Significance of the Community Center to Japanese Senior Citizens from the Perspective of Place Attachment”、G7が“How the Elderly Accept the Concept of IoT as Assistive Technology: Interventional Study of the Attitude to IoT by Workshop”という題目で研究成果の報告を行った。

〈コース生の感想〉

櫻井友理希 (新領域創成科学研究科メディカル情報生命専攻 博士1年)

この学会は、臨床科学、生物科学、行動科学および社会科学、政策および計画と実践、そしてジェロンテクノロジーの5つの異なる領域から最新の研究を共有することを目的として開催されました。

私たち2019年度共同研究グループG7では、最新研究成果「カードを用いたワークショップにより、高齢者が支援技術としてIoT (Internet of Things: モノのインターネット)をどのように受け入れるのか」について、ジェロンテクノロジーのセクションで口頭発表しました。この研究は、これからの少子高齢化に突入する日本社会において必須の課題となる高齢者の自立生活支援に関するものです。いろいろな分野の人々と協力し、実際の高齢者本人とワークショップ形式で議論しながら行っています。例えば、スマートフォンと家電を連携し、外出先で家の環境をコントロールするシステムなどを考察しています。私は生物学を専攻しており、今回のIAGGでの発表は専門外での発表のためとても緊張しました。しかし、学会自体はWelcome partyやツアーなどのいろいろな国の人たちと交流する場があり、また、企業などのブースもあり、とても勉強になりました。

高齢先進国である日本のこれからの社会をどのようにより良くしていくかについて考える際、特定の研究分野や領域でのみ対策を進めても限界があるのではないかと考えます。この学会やGLAFSのように様々な領域の人々が集まり、いろいろな視点から問題を見つめ、議論しあうことで独創的なアイデアが生まれるのではないかと思います。これからもGLAFSを通して、ジェロンテクノロジーやジェロントロジーの研究をし、様々な分野の学生とも交流することで、科学技術を生かしてより良い社会を目指せるようになったらと思います。GLAFSそしてグループ共同研究の先生方やメンバーの多大なる支援のおかげで貴重な経験をすることができ、とても感謝しております。

キム・ホンジク (工学系研究科都市工学専攻 博士2年)

高齢者、あるいは高齢社会という共通の対象を研究しながらも、学問分野やその研究者本人ごとの観点の違いがあり、会場にて行われる議論をすべて理解することはとても難しいです。特に、対象となる国の文化、研究者の学問分野の理論等を知らないと、その研究の学術的疑問点すら把握することが難しいことがあります。しかし、IAGGでの議論に参加して気づいたことは、統計学という共通の言語があり、それを媒介にお互い話し合うことが可能であったことです。特に多種類の学問分野が参入する会議では、このような共通の言語および理論の存在が必要であることを改めて実感しました。

11/13~17 The Gerontological Society of America: Annual Scientific Meeting

11月13~17日、テキサス州オースティンで開催されたGSA (The Gerontological Society of America: アメリカ老年学会) Annual Scientific Meetingに、今年もGLAFSから多くの学生が研究発表、最先端の研究についての情報収集、交換のために参加した。GLAFSの共同研究グルー

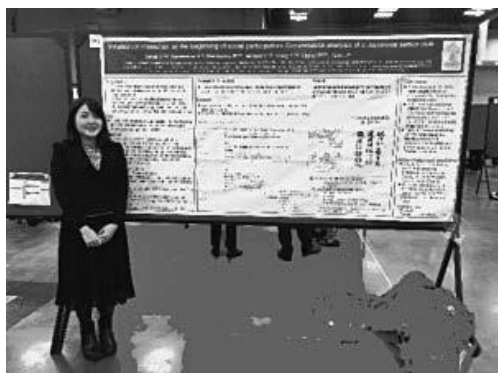
プからは、G4/5/6 が“Initiation of face-to-face interaction as the beginning of social participation: Conversation analysis of the activities of a Japanese senior club” という題目でポスター発表を行った。

〈コース生の感想〉

坂井愛理（人文社会系研究科社会文化研究専攻 博士3年）

このたび 2019 年度GSA（The Gerontological Society of America）“Strength in Age-Harnessing the Power of Networks” に参加をしましてまいりました。共同研究グループ 4/5/6 では、千葉県柏市豊四季台団地において住民とともに通いの場の運営を進めています。今回私は、この通いの場で行われているコミュニティ活動が住民の社会参加を促進させているのかを評価するものとして、会話分析の研究成果をポスター形式で報告しました。先行研究は、社会参加を量的に定義・測定し、その関連要因を特定してきました。これに対して本報告は、社会参加が実際のコミュニティ活動の現場でどのように行われているのかを、コミュニティ活動で生起する会話を質的に分析することによって考察しました。現場の活動を内在的に評価するこのアプローチは本学会において新奇性のあるものであったため、報告時間中には社会学や教育学をはじめとする多くの研究者が興味を持って訪れてくださり、本方法論とそれによって可能になる知見について、貴重な意見交換を行うことができました。また、社会参加をいかに促進するかというテーマが世界的に共有されていることを確認できました。

今回の学会参加では高齢社会の様々な問題について様々な専門分野の研究者と対話を行うことができ、大変有意義な場となりました。



【国際学会参加コース生】

氏名	学会名	期間
呉江 （新領域創成科学研究科人間環境学専攻 博士2年）	HCI INTERNATIONAL 2019 （オーランド／アメリカ）	7/26～7/31
カンスイン （医学系研究科健康科学・看護学専攻 修士2年）	2019 41st Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine & Biology Society (EMBC) （ベルリン／ドイツ）	7/24～7/27
	HCI INTERNATIONAL 2019 （オーランド／アメリカ）	7/28～7/31
金志勲 （人文社会系研究科社会文化研究専攻 博士2年）	The 16th East Asian Social Policy Conference in Taipei （台北／台湾）	7/1～7/4
篠崎奈々 （医学系研究科健康科学・看護学専攻 博士3年）	13th European Nutrition Conference （ダブリン／アイルランド）	10/15～10/18

青柳恵 (工学系研究科精密工学専攻 博士1年)	2019 41st Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine & Biology Society (EMBC) (ベルリン/ドイツ)	7/23~7/25
金兌恩 (人文社会系研究科社会文化研究専攻 博士1年)	韓国社会学会大会 (ソウル/韓国)	12/19~12/31
坂井愛理 (人文社会系研究科社会文化研究専攻 博士3年)	Gerontological Society of America (GSA) 2019 Annual Meeting (オースティン/アメリカ)	11/12~11/15
馬場絢子 (教育学研究科総合教育科学専攻 博士3年)	Gerontological Society of America (GSA) 2019 Annual Meeting (オースティン/アメリカ)	11/12~11/15
櫻井友理希 (新領域創成科学研究科メディカル情報生命専攻 博士1年)	International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG) 2019 (台北/台湾)	10/25~10/27
中野航綺 (人文社会系研究科社会文化研究専攻 博士1年)	International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG) 2019 (台北/台湾)	10/25~10/27
キム・ホンジク (工学系研究科都市工学専攻 博士2年)	International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG) 2019 (台北/台湾)	10/25~10/27
稲垣安沙 (医学系研究科健康科学・看護学専攻 博士1年)	International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG) 2019 (台北/台湾)	10/25~10/27

産業界との共同研究

■ 日立東大ラボ ハビタットイノベーション WG4 「超高齢社会」

一昨年より開始している本プロジェクトは、一昨年度は高齢者の生活状況支援のためのモニタリング技術の開発を、昨年度は浴室でのモニタリング技術開発とリビングなどでの新しいモニタリング手法の提案を行ってきた。本年度は提案した手法の実装とビデオカメラを用いた筋骨格と言語化技術を応用し、転倒骨折リスク評価とあわせて転倒予防に資するモニタリングが可能か検討を行った。高齢者を対象とした計測実験を行い、評価した。

5・シンポジウム

10/26 「令和時代の高齢社会と法のあり方を考える」(共催)

10月26日、武蔵野大学法学研究所と共催し、シンポジウム「令和時代の高齢社会と法のあり方

を考える」を武蔵野大学 1 号館で開催した。

岩田太上智大学教授の司会で、武蔵野大学の池田眞朗副学長と高齢社会総合研究機構の辻哲夫特任教授による主催者挨拶の後、樋口範雄先生（東京大学名誉教授、武蔵野大学特任教授）と関ふ佐子先生（横浜国立大学教授）の基調講演が行われた。おふたりが高齢者法に関する書籍を上梓されたことを記念して、講演のテーマは「2 冊の本の出版に際して」。アメリカ高齢者法執筆の契機や日本の高齢者法の今後について、お話があった。

引き続き行われたパネルディスカッションでは、GLAFS の税所真也特任助教、日本経済新聞の後藤直久氏、弁護士の外岡潤氏、アプリ HINADAN 開発者の若宮正子氏、厚労省老健局の栗原正明氏が登壇。それぞれの立場から、超高齢社会の法的・実践的課題について語り合った。

高齢化がどんどん進む中、法律が現状に追いついていないことに警鐘を鳴らし、今後どのように整備していくかについて考える良いきっかけとなった。



樋口範雄先生による基調講演

11/30 博士課程教育リーディングプログラム「フォーラム 2019」

11 月 30 日、早稲田大学・井深大記念ホールにて、博士課程教育リーディングプログラム「フォーラム 2019」が開催された。文部科学省の事業としては最終年度となる今年のフォーラムのテーマは「私は世界をこう変える」。リーディングプログラムの学生や修了生を中心に 20 のワークショップが企画され、10 年後の世界をどのように変えたいかを議論した。

GLAFS からは高瀬麻以特任研究員がセッション A の目標 3「すべての人に健康と福祉を」に参加。他リーディングの学生や教員、企業人らと交流を図った。



高瀬麻以特任研究員（右から 3 人目）

3/7 国内シンポジウム「東京大学が挑戦した高齢社会に関する教育」

3月7日、IOG/GLAFS 国内シンポジウム「東京大学が挑戦した高齢社会に関する教育」を開催した。当初、工学部 2 号館 1 階・大講堂で行われる予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大の防止のため、学内一部関係者のみに限定して行うこととなり、会場も工学部 8 号館 722 及び 702 に変更されての開催となった。

今回は 6 年間にわたって取り組んできた GLAFS 教育活動を総括する意味で、午前の部は GLAFS 学生による共同研究の成果発表。午後からはミドルセッション「GLAFS を振り返る」として、卒業生や在学生によるパネルディスカッション「GLAFS を通して得られた経験について」や、教員がパネラーとなった「複合領域型の教育プログラムを考える」が行われた。

〈プログラム〉

午前の部 (9:30~11:45)

■開会挨拶 原田昇 (東京大学教授/高齢社会総合研究機構・機構長)



原田昇機構長による開会の挨拶

■ GLAFS 共同研究成果報告

【各グループの発表テーマ】

G1 「Age-Friendly Workplace の実現に向けて」

G2 「要介護期における高齢者の在宅療養生活継続要因—要介護度 100 スタイル—」

G3-2 「要介護になっても暮らし続けられるバリアフリー改修マニュアルづくり」

G4/5/6 「高齢者の QoL 向上のためのコミュニティ活動の調査とデザイン」

G7 「高齢者支援技術のデザイン指針や導入方策を導くためのニーズ・現状調査」

午後の部 (13:30~17:00)

■ GLAFS の趣旨説明 大方潤一郎 (高齢社会総合研究機構特任教授)

■ GLAFS の振り返り 後藤純 (高齢社会総合研究機構特任講師)

■ GLAFS を通して得られた経験について



「GLAFS を通して得られた経験について」語るコース生。左から横内陳正（3期生・修了生：公益財団法人医療科学研究所）、馬場絢子（2期生・教育学研究科）、金兌恩（4期生・人文社会学系研究科）、金子和樹（2期生・工学系研究科）、ファシリテーターの菅原育子（高齢社会総合研究機構特任講師）

■ パネルディスカッション「複合領域型の教育プログラムを考える」



左から熊田孝恒先生（京都大学教授）、関根千佳先生（同志社大学／放送大学客員教授）、原田昇機構長、飯島勝矢副機構長。右端はコーディネーターの後藤純特任講師

■ 閉会挨拶

3. 若手研究者による研究成果

1・論文等

■ 菅原育子（特任講師）

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. 菅原育子，小林江里香・高齢者の家庭内外での活動の類型化と5年後の健康および主観的 well-being への影響・東京都健康長寿医療センター研究所社会参加と地域保健研究チーム（編）『高齢者の健康と生活に関する縦断的研究—第9回調査（2017）研究報告書—』，pp.25—43.2020.1.
2. 菅原育子，二瓶美里・超高齢者研究から見えてきたもの：地域に暮らす90歳以上の暮らしの実態調査から・老年内科，2020.（in press）

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Nihei M, Sugawara I, Ehara N, Gondo Y, Masui Y, Inagaki H, Inoue T, MacLachlan M, McAuliffe E. (2019) Assistive Products Use among Oldest-Old People in Japan: Differences in Personal Attributes and Living Situation. The 15th AAATE Conference, Bologna, Italy, 2019. 8. 27–30. 査読有
2. Fukuzawa A, Sugawara I, Nagashima Y. Ikigai among Japanese elderly with loneliness: Moderating effect of frequency of going out. Poster presentation conducted at The 11th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2019, Taipei, Taiwan, 2019. 10. 23–27. 査読有
3. Nihei M, Sugawara I, Ehara N, Gondo Y, Masui Y, Inagaki H, Inoue T, MacLachlan M, McAuliffe E. Formal and informal support among the community-dwelling oldest-old people in Japan. Poster presentation conducted at The 11th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2019, Taipei, Taiwan, 2019. 10. 23–27. 査読有
4. Tsai J, Gondo Y, Yasumoto S, Matsumoto K, Masui Y, Inagaki H, Nihei M, Sugawara I, Ehara N, Inoue T, MacLachlan M, McAuliffe E. Using assistive devices related to residence type. Poster presentation conducted at The 11th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2019, Taipei, Taiwan, 2019. 10. 23–27. 査読有

■ 村山洋史（特任講師）

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Murayama H, Sugiyama M, Inagaki H, Ura C, Miyamae F, Edahiro A, Motokawa K, Okamura T, Awata S. The differential effects of age on the association between childhood socioeconomic disadvantage and subjective symptoms of dementia among older Japanese people. Journal of Epidemiology, 2019; 29 (7): 241–246. 査読有

2. [Murayama H](#), Ura C, Miyamae F, Sakuma N, Sugiyama M, Inagaki H, Okamura T, Awata S. Ecological relationship between social capital and cognitive decline in Japan: A preliminary study for dementia-friendly communities. *Geriatrics & Gerontology International* 2019;19 (9): 950—955. [査読有](#)
3. [Murayama H](#), Amagasa S, Inoue S, Fujiwara T, Shobugawa Y. Sekentei and objectively-measured physical activity among older Japanese people: a cross-sectional analysis from the NEIGE Study. *BMC Public Health* 2019 ; 19 : 1331. [査読有](#)
4. [Murayama H](#), Miyamae F, Ura C, Sakuma N, Sugiyama M, Inagaki H, Okamura T, Awata S. Does community social capital buffer the relationship between educational disadvantage and cognitive impairment? A multilevel analysis in Japan. *BMC Public Health* 2019 ; 19 : 1442. [査読有](#)
5. [Murayama H](#), Taguchi A, Spencer MS, Yamaguchi T. Efficacy of a community health worker-based intervention in improving dietary habits among community-dwelling older people: A controlled, cross-over trial in Japan. *Health Education & Behavior* 2020 ; 47 (1): 47—56. [査読有](#)
6. Taniguchi Y, Kitamura A, Nofuji Y, Ishizaki T, Seino S, Yokoyama Y, Shinozaki T, [Murayama H](#), Mitsutake S, Amano H, Nishi M, Matsuyama Y, Fujiwara Y, Shinkai S. Association of trajectories of higher-level functional capacity with mortality and medical and long-term care costs among community-dwelling older Japanese. *Journal of Gerontology: Biological Sciences & Medical Sciences* 2019;74 (2): 211—218. [査読有](#)
7. Carandang RZ, Shibamura A, Kiriya J, Asis EL, Chavez DC, Meana M, [Murayama H](#), Jimba M. Determinants of depressive symptoms in Filipino senior citizens of the community-based ENGAGE study. *Archives of Gerontology & Geriatrics* 2019 ; 82 : 186—191. [査読有](#)
8. Murayama Y, [Murayama H](#), Hasebe M, Yamaguchi J, Fujiwara Y. The impact of inter-generational programs on social capital in Japan: a randomized population-based cross-sectional study. *BMC Public Health* 2019 ; 19 : 156. [査読有](#)
9. Morita A, O’Caoimh R, [Murayama H](#), Molloy DW, Inoue S, Shobugawa Y, Fujiwara T. Validity of the Japanese version of the Quick Mild Cognitive Impairment screen. *International Journal of Environmental Research and Public Health* 2019 ; 16 (6): 917. [査読有](#)
10. Takase M, [Murayama H](#), Hirukawa S, Sugimoto M, Ono S, Tanaka T, Kimata M. Which aspects of dining style are associated with depressive mood? A study at an assisted living facility in Japan. *Journal of Nutrition in Gerontology & Geriatrics* 2019;38 (4): 377—386. [査読有](#)
11. Carandang RZ, Asis E, Shibamura A, Kiriya J, [Murayama H](#), Jimba M. Unmet needs and coping mechanisms among community-dwelling senior citizens in the Philippines: A

- qualitative study. *International Journal of Environmental Research and Public Health* 2019;16 (19): 3745. [査読有](#)
12. Carandang RZ, Shibamura A, Kiriya J, Vardeleon KR, Marges MA, Asis E, [Murayama H](#), Jimba M. Leadership and peer counseling program: Evaluation of training and its impact on Filipino senior peer counselors. *International Journal of Environmental Research and Public Health* 2019;16 (21): 4108. [査読有](#)
 13. Okamura T, Sugiyama M, Inagaki H, [Murayama H](#), Ura C, Miyamae F, Eda Hiro A, Motokawa K, Awata S. Anticipatory anxiety about future dementia-related care needs: Toward a dementia-friendly community. *Psychogeriatrics* 2019;19 (6): 539–546. [査読有](#)
 14. Taniguchi Y, Kitamura A, Kaito S, Yokoyama Y, Yokota I, Shinozaki T, Seino S, [Murayama H](#), Matsuyama Y, Ikeuchi T, Fujiwara Y, Shinkai S. Albumin and hemoglobin trajectories and incident disabling dementia in community-dwelling older Japanese. *Dementia and Geriatric Cognitive Disorders* 2019;47 (4–6): 233–242. [査読有](#)
 15. Suthuvoravut U, Takahashi K, [Murayama H](#), Tanaka T, Akishita M, Iijima K. Association between traditional Japanese diet Washoku and sarcopenia in community-dwelling older adults: Findings from the Kashiwa Study. *Journal of Nutrition, Health and Aging* 2020;24: 282–289. [査読有](#)
 16. [村山洋史](#), 小宮山恵美, 平原佐斗司, 野中久美子, 飯島勝矢, 藤原佳典・在宅医療推進のための多職種連携研修プログラム参加者におけるソーシャルキャピタル醸成効果：都市部での検証・日本公衆衛生雑誌, 2019;66 (6): 317–326. [査読有](#)
 17. 野藤悠, 清野諭, [村山洋史](#), 吉田由佳, 谷垣知美, 横山友里, 成田美紀, 西真理子, 中村正和, 北村明彦, 新開省二・兵庫県養父市におけるシルバー人材センターを機軸としたフレイル予防施策のプロセス評価およびアウトカム評価・日本公衆衛生雑誌, 2019;66 (9): 560–573. [査読有](#)
 18. 稲葉陽二, 藤原佳典, 小林江里香, 野中久美子, 倉岡正高, 田中元基, 村山幸子, 松永博子, 安永正史, [村山洋史](#), 渡辺修一郎・世代間交流と社会関係資本の継承：長野県須坂市と首都圏2自治体調査の比較からの知見・政経研究, 2019;56 (1): 46–74. [査読有](#)
 19. 田口敦子, 備前真結, 松永篤志, 森下絵梨, 岩間純子, 小川尚子, 伊藤海, [村山洋史](#)・文献検討に基づく介護予防サポーター養成プログラムの作成と効果・日本公衆衛生雑誌, 2019;66 (9): 582–592. [査読有](#)
 20. 田口敦子, [村山洋史](#), 竹田香織, 伊藤海, 藤内修二・地域保健に関わる住民組織の特徴と課題：全国市町村への調査・日本公衆衛生雑誌, 2019;66 (11): 712–722. [査読有](#)
 21. [Murayama H](#), Liang J, Shaw BA, Botosaneanu A, Kobayashi E, Fukaya T, Shinkai S. Age and gender differences in the association between body mass index and all-cause mortality among older Japanese. *Ethnicity & Health*. (in press) [査読有](#)
 22. [Murayama H](#), Sugiyama M, Inagaki H, Eda Hiro A, Okamura T, Ura C, Miyamae F, Moto-

- kawa K, Awata S. Childhood socioeconomic disadvantage as a determinant of late-life physical function in older Japanese people. Archives of Gerontology & Geriatrics. (in press) [査読有](#)
23. [Murayama H](#), Liang J, Shaw BA, Botosaneanu A, Kobayashi E, Fukaya T, Shinkai S. Socioeconomic differences in trajectories of functional capacity among older Japanese: A 25-year longitudinal study. Journal of the American Medical Directors Association. (in press) [査読有](#)
24. Shobugawa Y, [Murayama H](#), Fujiwara T, Inoue S. Cohort profile of the NEIGE study in Tokamachi city, Japan. Journal of Epidemiology. (in press) [査読有](#)
25. Takahashi T, Nonaka K, Matsunaga H, Hasebe M, [Murayama H](#), Koike T, Murayama Y, Kobayashi E, Fujiwara Y. Factors relating to social isolation in urban Japanese older people: A 2-year prospective cohort study. Archives of Gerontology & Geriatrics. (in press) [査読有](#)
26. Nagamine Y, Fujiwara T, Tani Y, [Murayama H](#), Tabuchi T, Kondo K, Kawachi I. Gender difference in the association between subjective socioeconomic mobility across life course and mortality at older ages: Results from the JAGES longitudinal study. Journal of Epidemiology. (in press) [査読有](#)
27. Amagasa S, Inoue S, [Murayama H](#), Fujiwara T, Kikuchi H, Fukushima N, Machida M, Chastin S, Owen N, Shobugawa Y. Associations of sedentary and physically-active behaviors with cognitive-function decline in community-dwelling older adults: Compositional data analysis from the NEIGE study. Journal of Epidemiology. (in press) [査読有](#)
28. 伊藤海, 田口敦子, 松永篤志, 竹田香織, [村山洋史](#), 大森純子・「互助」の概念分析・日本公衆衛生雑誌・(in press) [査読有](#)

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 田口敦子, [村山洋史](#), 竹田香織, 伊藤海, 藤内修二・全国調査によるソーシャルキャピタルの醸成・活用方法・公衆衛生情報, 2019;49(4): 30-32.
2. [村山洋史](#)・つながりで健康づくり(第1回): 運動でもない栄養でもない健康づくりの新常識・健康づくり, 2019; 492: 17.
3. [村山洋史](#)・つながりで健康づくり(第2回): つながりの量と質、どっちが大切?・健康づくり, 2019; 493: 28.
4. [村山洋史](#)・つながりで健康づくり(第3回): 日本人はつながっているのか?・健康づくり, 2019; 494: 28.
5. [村山洋史](#)・つながりで健康づくり(第4回): つながりが健康に影響するメカニズム・健康づくり, 2019; 495: 28.
6. [村山洋史](#)・つながりで健康づくり(第5回): 人づきあいにはユルさも大事・健康づくり,

2019 ; 496 : 28.

7. 村山洋史・つながりで健康づくり (第6回): バーチャルなつながりは健康に有益か? ・健康づくり, 2019 ; 497 : 28.
8. 村山洋史・つながりで健康づくり (第7回): 地域のつながり「ソーシャルキャピタル」に注目・健康づくり, 2019 ; 498 : 28.
9. 村山洋史・つながりで健康づくり (第8回): ソーシャルキャピタルが高い地域に住むとなぜ健康なのか? ・健康づくり, 2019;499:28.
10. 村山洋史・つながりで健康づくり (第9回): なぜ夫と別れても妻は変わらず健康なのか? ・健康づくり, 2019;500:28.
11. 村山洋史・つながりで健康づくり (第10回): 職場付き合いに何を求めるかで健康が決まる・健康づくり, 2020 ; 500 : 28.
12. 村山洋史・つながりで健康づくり (第11回): 職場付き合いで犠牲になるもの・健康づくり, 2020 ; 500 : 28.
13. 村山洋史・つながりで健康づくり (第12回): つながりのある職場は働く人を健康にする・健康づくり, 2020 ; 500 : 28.

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Amagasa S, Inoue S, Murayama H, Fujiwara T, Kikuchi H, Fukushima N, Machida M, Chastin S, Shobugawa Y. Compositional associations of objectively-measured activities with declined cognitive function in older adults: NEIGE study. ACSM's 66th Annual Meeting, Orlando, FL, USA, 2019. 5.28–6.1. 査読有
2. Murayama H. Trajectories of body mass index and their association with mortality among older Japanese: Do they differ from those of Western populations? In 1st International Conference on Aging in Times of The New Old, Tainan, Taiwan, 2019. 6.25. (招待講演)
3. Sakai E, Kim H, Kamesawa A, Kim D, Nakayama R, Terazawa S, Ogawa K, Masuda K, Akizuk Y, Yang Y, Yang Y, Suzuki Y, Shah R, Masuda T, Gandy C, Maeda K, Takase M, Saisho S, Ogino R, Murayama H, Goto J. Exploring the significance of the community center to Japanese senior citizens from the perspective of place attachment. The 11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress. Taipei, Taiwan, 2019. 10.21–25. 査読有
4. Carandang RZ, Shibanuma A, Kiriya J, Vardelon K, Asis EL, Murayama H, Jimba M. Efficacy of peer counseling, social engagement, and combination interventions in Filipino senior citizens at risk for depression: A quasi-experimental study. The 2019 Annual Meeting & Exposition of the American Public Health Association, Philadelphia, PA, USA, 2019. 11. 2–6. 査読有

5. Murayama H, Taguchi A, Yamaguchi T. Effectiveness of a community health worker intervention in improving dietary habits: A cross-over trial in Japan. The 2019 Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA), Austin, TX, USA, 2019. 11. 13–17. [査読有](#)
6. Carandang RZ, Shibamura A, Kiriya J, Vardelon K, Asis EL, Murayama H, Jimba M. Project ENGAGE: An action research toward improving the psychological well-being of Filipino senior citizens. The 2019 Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA), Austin, TX, USA, 2019. 11. 13–17. [査読有](#)
7. Takase M, Murayama H, Kimata M, Hirukawa S, Tanaka T, Sugimoto M, Ono S. Not enjoying the meal was associated with depressive symptoms, despite the size of social connections. The 2019 Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA), Austin, TX, USA, 2019. 11. 13–17. [査読有](#)

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 村山洋史, 宇良千秋, 宮前史子, 佐久間尚子, 杉山美香, 稲垣宏樹, 岡村毅, 新川祐利, 粟田主一. ソーシャルキャピタルと認知機能低下者割合の地域相関分析: Dementia Friendly Communities に向けた定量的検証・第 20 回日本認知症ケア学会大会, 京都, 2019. 5. 25–26. [査読有](#)
2. 村山洋史, 小林江里香, 深谷太郎, 岡本翔平, 石崎達郎, Jersey Liang, 新開省二. 全国代表サンプルを用いた日本人高齢者の Frailty の分布推計と健康アウトカムとの関連・第 61 回日本老年医学会学術集会・仙台, 2019. 6. 6–6. 8. [査読有](#)
3. 小林江里香, 村山洋史, 深谷太郎, 岡本翔平, 石崎達郎, Jersey Liang, 新開省二. 全国高齢者代表サンプルにおける Frailty の 5 年間の変化と社会・心理的要因・第 61 回日本老年医学会学術集会・仙台, 2019. 6. 6–6. 8. [査読有](#)
4. 高橋競, 村山洋史, 田中友規, 高瀬麻以, 飯島勝矢. 地域高齢者の孤食に関する質的研究: なぜ、同居家族がいるのに孤食になるのか? 第 61 回日本老年医学会学術集会・仙台, 2019. 6. 6–6. 8. [査読有](#)
5. 岡本翔平, 小林江里香, 深谷太郎, 村山洋史, 菅原育子, 新開省二. 高齢期の就労が健康行動に与える影響: 疑似実験的アプローチによる分析・第 61 回日本老年社会学会, 仙台, 2019. 6. 7–6. 8. [査読有](#)
6. 根本裕太, 野中久美子, 長谷部雅美, 小池高史, 南潮, 村山陽, 村山洋史, 小林江里香, 藤原佳典. 地域高齢者における世代内/世代間交流が精神的健康および健康度自己評価に与える影響: 都市部在住を対象とした 2 年間の縦断調査の結果から・第 61 回日本老年社会学会, 仙台, 2019. 6. 7–6. 8. [査読有](#)
7. 天笠志保, 井上茂, 村山洋史, 藤原武男, 菊池宏幸, 福島教照, 町田征己, 菖蒲川由郷. 豪雪地帯在住高齢者における非積雪期と積雪期の加速度計で評価した身体活動パターンの比較:

- NEIGE study: Compositional data analysis を用いた縦断研究・第 22 回日本運動疫学会学術総会，東京，2019. 6. 22-23. [査読有](#)
8. 土谷瑠夏，田口敦子，松永篤志，[村山洋史](#)・農業地域在住の壮年期住民におけるロコモティブシンドロームの実態と関連要因の検討・第 22 回日本地域看護学会学術集会，横浜，2019. 8. 17-18. [査読有](#)
 9. [村山洋史](#)，宮前史子，宇良千秋，佐久間尚子，杉山美香，稲垣宏樹，岡村毅，粟田主一・地域レベルのソーシャルキャピタルと認知機能低下との関連：Population-based データによるマルチレベル分析・第 9 回日本認知症予防学会学術集会，名古屋，2019. 10. 18-20. [査読有](#)
 10. 藤原佳典，倉岡正高，野中久美子，田中元基，村山幸子，松永博子，根本裕太，[村山洋史](#)，稲葉陽二，村山陽，渡辺修一郎，小林江里香・働く高齢者における職種別にみたジェネラティビティの差異・第 14 回日本応用老年学会大会，京都，2019. 10. 19-20. [査読有](#)
 11. 高橋知也，野中久美子，松永博子，長谷部雅美，[村山洋史](#)，小池高史，藤原佳典・都市在住高齢者における就業の有無および継続に関連する要因：2 年間の前向きコホート調査の結果から・第 14 回日本応用老年学会大会，京都，2019. 10. 19-20. [査読有](#)
 12. [村山洋史](#)・「包括的支援体制構築に向けた保健センターと他分野の連携に関する研究」でみえたこと（シンポジウム）・第 78 回日本公衆衛生学会，高知，2019. 10. 23-25. [査読有](#)
 13. [村山洋史](#)，田口敦子，児玉康子・豪雪地域在住高齢者の生活支援ニーズの実態・第 78 回日本公衆衛生学会，高知，2019. 10. 23-25. [査読有](#)
 14. 野藤悠，横山友里，成田美紀，清野諭，[村山洋史](#)，吉田由佳，谷垣知美，北村明彦，新開省二・住民主体で運営するフレイル予防教室の栄養プログラムの効果・第 78 回日本公衆衛生学会，高知，2019. 10. 23-25. [査読有](#)
 15. 横山友里，清野諭，光武誠吾，西真理子，[村山洋史](#)，成田美紀，石崎達郎，野藤悠，北村明彦，新開省二・フレイル改善のための複合プログラムが要介護・死亡リスクと介護給付費に及ぼす影響・第 78 回日本公衆衛生学会，高知，2019. 10. 23-25. [査読有](#)
 16. 菖蒲川由郷，[村山洋史](#)，藤原武男，井上茂，天笠志保，齋藤玲子・高齢者の幸福感と関連する要因の分析：NEIGE study より・第 78 回日本公衆衛生学会，高知，2019. 10. 23-25. [査読有](#)
 17. 藤原佳典，桜井良太，倉岡正高，野中久美子，村山幸子，根本裕太，村山陽，[村山洋史](#)，渡辺修一郎，小林江里香・地域高齢者における健康無関心層の実態と関連要因の解明・第 78 回日本公衆衛生学会，高知，2019. 10. 23-25. [査読有](#)
 18. 伊藤海，田口敦子，大森純子，[村山洋史](#)・豪雪地域在住高齢者への生活支援の担い手に関する実態調査（第 1 報）・第 78 回日本公衆衛生学会，高知，2019. 10. 23-25. [査読有](#)
 19. 田口敦子，伊藤海，大森純子，[村山洋史](#)・豪雪地域在住高齢者への生活支援の担い手に関する実態調査（第 2 報）・第 78 回日本公衆衛生学会，高知，2019. 10. 23-25. [査読有](#)
 20. 野中久美子，倉岡正高，村山幸子，根本裕太，村山陽，小林江里香，[村山洋史](#)，渡辺修一郎，福島富士子，藤原佳典・多世代共創社会のまちづくり；多世代交流サロンで助け合いを促す運

- 営手法・第78回日本公衆衛生学会，高知，2019.10.23-25. [査読有](#)
21. 村山幸子，倉岡正高，野中久美子，根本裕太，村山陽，小林江里香，[村山洋史](#)，渡辺修一郎，福島富士子，藤原佳典・多世代共創社会のまちづくり：住民主体による挨拶運動の立ち上げと運営手法・第78回日本公衆衛生学会，高知，2019.10.23-25. [査読有](#)
 22. 村山陽，野中久美子，倉岡正高，村山幸子，根本裕太，小林江里香，[村山洋史](#)，渡辺修一郎，稲葉陽二，藤原佳典・多世代共創社会のまちづくり：多世代交流がジェネラティブティの醸成に与える影響・第78回日本公衆衛生学会，高知，2019.10.23-25. [査読有](#)
 23. 根本裕太，倉岡正高，野中久美子，田中元基，村山幸子，松永博子，村山陽，小林江里香，[村山洋史](#)，渡辺修一郎，稲葉陽二，藤原佳典・若年層と中年層における世代間交流が精神的健康に与える影響：2年間の縦断研究・第78回日本公衆衛生学会，高知，2019.10.23-25. [査読有](#)
 24. 岡本翔平，小林江里香，深谷太郎，[村山洋史](#)，新開省二・中高年者の認知機能低下における男女差の要因分解・第78回日本公衆衛生学会，高知，2019.10.23-25. [査読有](#)
 25. 深谷太郎，相良友哉，大澤絵里，中板育美，藤内修二，尾島俊之，[村山洋史](#)，村中峯子，松永洋子，清水由美子，藤原佳典・包括的支援体制構築に向けた保健センターと多分野の連携に関する研究（1）：量的研究・第78回日本公衆衛生学会，高知，2019.10.23-25. [査読有](#)
 26. 相良友哉，深谷太郎，大澤絵里，中板育美，内藤修二，尾島俊之，[村山洋史](#)，村中峯子，松永洋子，清水由美子，藤原佳典・包括的支援体制構築に向けた保健センターと多分野の連携に関する研究（2）：質的研究・第78回日本公衆衛生学会，高知，2019.10.23-25. [査読有](#)
 27. [村山洋史](#)，駒沢行賓，柿崎真沙子，福田吉治，田淵貴大・世界経済不況が喫煙状況および飲酒頻度に及ぼす影響：中高年者縦断調査データの解析・第30回日本疫学会学術総会，京都，2020.2.20-22. [査読有](#)
 28. 柿崎真沙子，[村山洋史](#)，田淵貴大・東日本大震災が心理的ストレスに及ぼす影響：中高年者縦断調査データの解析・第30回日本疫学会学術総会，京都，2020.2.20-22. [査読有](#)
 29. 天笠志保，井上茂，[村山洋史](#)，藤原武男，菊池宏幸，福島教照，町田征己，菖蒲川由郷・農村部在住高齢者における睡眠，座位行動，身体活動の関連要因：NEIGE study. 第30回日本疫学会学術総会，京都，2020.2.20-22. [査読有](#)

■ 後藤純（特任講師）

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. [後藤純](#)・生活支援体制整備事業を活用した居住環境実態調査の可能性—秋田県秋田市を事例に—・日本都市計画学会都市計画論文集，2019;54（3）: 856-863. [査読有](#)

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. [後藤純](#)・シーズより先に，ニーズをつかめ・（一社）生涯活躍のまち推進協議会生涯活躍のまち，2019;9:2-4.

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Sakai E, Kim H, Kamesawa A, Kim D, Nakayama R, Terazawa S, Ogawa K, Masuda K, Akizuki Y, Yang Y, Yang Y, Suzuki Y, Shah R, Masuda T, Gandy C, Maeda K, Takase M, Saisho S, Ogino R, Murayama H, Goto J. Exploring the significance of the community center to Japanese senior citizens from the perspective of place attachment. 11th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2019, Taipei, Taiwan, 2019. 10. 23–27.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 坂井愛理，亀澤明彦，中山莉子，秋月優里，楊映雪，荻野亮吾，後藤純・高齢者サークルの参加に関する会話分析—見知らぬ他者との会話の開始を題材に・日本老年社会学会第61回大会・2019.6. 査読有

■ 木全真理（特任助教）

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 木全真理，飯島勝矢・医療行政が推進する地域包括ケアシステム・医学のあゆみ，2019；268（2）：149–153.

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Kimata M, Komazawa Y, Masuda T, Akizuki Y, Goto J. Factors associated with daily-life support for older people requiring long-term care who live alone. The 11th IAGG Asia / Oceania Regional Congress 2019, Taipei, Taiwan, 2019. 10. 24–27. 査読有
2. Kimata M, Matsumoto Y. Characteristics of home visiting nurses in different types of multidisciplinary collaboration in the community. The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science, Osaka, Japan, 2020. 2. 28–29. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 木全真理，松本佳子・地域内の多職種協働に参加する訪問看護ステーション管理者の属性・第1回日本在宅医療連合学会大会，東京，2019. 7. 14–15. 査読有
2. 木全真理，原口道子，板垣ゆみ，中山優季・神経難病の在宅療養者への居宅外における訪問看護実践の関連要因・第24回日本難病看護学会学術大会，山形，2019. 8. 23–24. 査読有
3. 木全真理・居宅外で実践された訪問看護の利用者と家族のニーズの検討・第39回日本看護科学学会学術会，金沢，2019. 11. 30–12. 1. 査読有

■ 荻野亮吾（特任助教）

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Ito K, Ogino R, Hiyama A, Hirose M. Senior's Acceptance of Head-Mounted Display Using Consumer Based Virtual Reality Contents. Zhou J., Salvendy G. (eds) Human As-

pects of IT for the Aged Population. Design for the Elderly and Technology Acceptance. HCII 2019. Lecture Notes in Computer Science, 2019 ; 11592. 170–180.

1. 荻野亮吾・子どもの貧困対策における官民パートナーシップの可能性・日本生涯教育学会年報，2019;40:25–41.
3. 荻野亮吾・サードセクターを巡る近年の研究動向・生協総研レポート，2020;91:14–30.

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 荻野亮吾・ポートルランド州立大学の University Studies のカリキュラムと評価（上）・文部科学教育通信，2019;471:20–21.
2. 荻野亮吾・ポートルランド州立大学の University Studies のカリキュラムと評価（下）・文部科学教育通信，2019;472:24–26.
3. 上田幸夫，佐藤進，新井孝男，山本秀樹，荻野亮吾，丹間康仁，上田孝典・〈座談会〉『日本公民館学会年報』に編集に携わって：創刊号から第15号までとこれから・日本公民館学会年報，2019;16:16–32.

【著書、編著】

1. 荻野亮吾・社会関係資本・日本環境教育学会，日本国際理解教育学会，日本社会教育学会，日本学校教育学会，SDGs 市民社会ネットワーク，グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン（編），事典持続可能な社会と教育，教育出版，2019:127.

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Sakai E, Kim H, Kamesawa A, Kim D, Nakayama R, Terazawa S, Ogawa K, Masuda K, Akizuki Y, Yang Y, Yang Y, Suzuki Y, Shah R, Masuda T, Sean Gandy C, Maeda K, Takase M, Saisho S, Ogino R, Murayama H, Goto J. Exploring the significance of the community center to Japanese senior citizens from the perspective of place attachment. The 11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress, Taipei, Taiwan, 2019. 10. 23. 査読有
2. Takase M, Ogino R, Goto J, Okata J. A comparative analysis of the social support in solitary seniors who attend club activity or go out to see friends. The Gerontological Society of America's 71st Annual Scientific Meeting, Austin, USA, 2019. 11. 13. 査読有
3. Sakai E, Kamesawa A, Nakayama R, Kim J, Akizuki Y, Yang Y, Ogino R, Goto J. Initiation of Interaction as the Beginning of Social Participation: Conversation Analysis of a Japanese Senior Club. The Gerontological Society of America's 71st Annual Scientific Meeting, Austin, USA, 2019. 11. 13. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 坂井愛理，亀澤明彦，中山莉子，秋月優里，楊映雪，荻野亮吾，後藤純・高齢者サークルの参加に関する会話分析：見知らぬ他者との会話の開始を題材に・日本老年社会学会第61回大会，仙台，2019.6.7. 査読有

2. 荻野亮吾，中川友理絵・地域での学習の組織化に関する高等教育機関の取り組みの現状と課題・日本社会教育学会第66回研究大会，東京，2019. 9. 14.
3. 坂井愛理，亀澤明彦，中山莉子，秋月優里，楊映雪，荻野亮吾，後藤純・会話の開始に先立つ他者の注意の引き出し：地域の書道サークルにおける相互行為を事例として・第92回日本社会学会大会，東京，2019. 10. 5. 査読有

■ 西野亜希子（特任助教）

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

- 1・ Miura T, Arata M, Sukenari Y, Miura R, Nishino A, Otsuki T, Nishide K, Okata J. Mobile application to record daily life for seniors based on experience sampling method (ESM). Human-Computer Interaction International, 2020. (in press) 査読有

【著書、編著】

1. 西野亜希子・ノーマライゼーション・BF・UD・日本の建築文化事典，丸善出版，2020；514-515.

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Nishino A, Takada R, Fukui C, Kim KM, Otsuki T. Case Study of the Residency Process for Private Elderly Residential Homes. The 11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress 2019, Taipei, Taiwan, 2019. 10. 査読有
2. Ashihara T, Nishino A, Lee YG, Matsuda Y, Otsuki T, Nishide K. A Study on Changes in Residential Lifestyle and Awareness of Residents in Housing Complex Regeneration Project. The Gerontological Society of America (Texas), 2019. 11. 査読有
3. Nishino A, Okata J. A study on home modification needs and issues arising due to ageing residents. International Association People-environment Studies (Quebec). (in press) 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 西野亜希子・住宅改修ニーズを把握する方法に関する研究—ある自治体に申請された理由書を基にして—・日本福祉のまちづくり学会第22回全国大会，東京，pp119-120, 2019. 8.
2. 西野亜希子，芦原智也，李鎔根，松田雄二，大月敏雄，西出和彦・団地および周辺居住者の日中の生活特性の経年変化について—団地再生事業に伴う居住生活と居住者意識の変化に関する研究その1・日本建築学会学術講演梗概集，金沢，pp1275-1276, 2019. 9.
3. 李鎔根，芦原智也，西野亜希子，松田雄二，大月敏雄，西出和彦・団地再生事業後の団地内施設利用に関する研究—団地再生事業に伴う住生活と居住者意識の変化に関する研究その2・日本建築学会学術講演梗概集，金沢，pp1277-1278, 2019. 9.

■ 藤崎（阪井）万裕（特任助教）

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Fukui C, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Yokouchi N, Sumikawa Y, Horinuki F, Baba A, Suto M, Okada H, Ogino R, Park H, Okata J. Needs of persons with dementia and their family caregivers in dementia cafés. *Aging Clinical and Experimental Research*, Epub, 2019. [査読有](#)
2. Fujisaki-Sueda-Sakai M, Takahashi K, Yoshizawa Y, Iijima K. Frailty checkup supporters' intentions to participate in human-resource development and training activities. *The Journal of Frailty & Aging*, Epub, 2020. [査読有](#)
3. 西本美紗, 田中友規, 高橋競, Suthutvoravut Unyaporn, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 飯島勝矢・オーラルフレイルは残存歯数減少よりも口腔関連 QOL 低下と強く関連する：地域在住高齢者による横断検討（柏スタディ）・日本未病学会雑誌, 2019;25 (3), 48-51. [査読有](#)
4. 吉澤裕世, 高橋競, 田中友規, 藤崎万裕, 飯島勝矢・身体・文化・地域活動の重複実施とフレイルとの関係・日本公衆衛生雑誌, 2019;66 (6), 306-316. [査読有](#)
5. 山本なつ紀, 成瀬昂, 松本博成, 藤崎万裕, 永田智子・訪問看護師によるPatient Safety Incidentの認識と報告：質的記述的研究・日本在宅ケア学会誌, 2020;23 (1). (in press) [査読有](#)
6. 西本美紗, 田中友規, 高橋競, Suthutvoravut Unyaporn, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 飯島勝矢・オーラルフレイルと食事の満足感の関連：地域在住高齢者による横断検討（柏スタディ）・日本老年医学会雑誌, 2020. (in press) [査読有](#)

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Fujisaki-Sueda-Sakai M, Takahashi K, Yoshizawa Y, Tanaka T, Suthuvoravut U, Nishimoto R, Iijima A. A community assessment of frailty prevention strategies using data on frailty checkups. The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science, Osaka, Japan, 2020. 2. 28-29. [査読有](#)
2. Kang, SI, Yoshizaki R, Nakano K, Okatani T, Kamesawa A, Yoshioka D, Wu J, Sakurai Y, Ito K, Fujisaki M, Sakai S, Sugawara I, Nihei M, Miura T, Yabu K, Mori T, Ifukube T and Okata J. Design and Implementation of Age-Friendly Activity for Supporting Elderly's Daily Life by IoT. HCI International 2019 21st International Conference on Human-Computer Interaction, Orlando, USA, 2019. 7.26-31,
3. Nakano K, Sakurai Y, Kang S, Yoshizaki R, Okatani T, Kamesawa A, Yoshioka D, Wu J, Ito K, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Sugawara I, Nihei M, Miura T, Yabu K-I, Mori T, Ifukube T, Okata J. How the Elderly Accept the Concept of IoT as Assistive Technology: Interventional Study of the Attitude to IoT by Workshop. The 11th IAGG Asia / Oceania Regional Congress 2019, Taipei, Taiwan, 2019. 10. 24-27. [査読有](#)
4. Katsuya I, Tanaka T, Takahashi K, Nishimoto M, Fujisaki M, Suthutvoravut U, Yoshiza-

wa H, Kozaki K, Akishita M, Toba K. "ACTION RESEARCH" to achieve community-based comprehensive approach for frailty prevention. The International Conference on Frailty & Sarcopenia Research (ICFSR 2020) Toulouse, France, 2020. 3. 11-13. [査読有](#)

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. [藤崎万裕](#)，高橋競，吉澤裕世，田中友規，Suthutvoravut Unyaporn，西本美紗，飯島勝矢・フレイル予防サポーターにおけるフレイル兆候の改善：縦断研究・第6回日本サルコペニア・フレイル学会大会，朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター，新潟，2019. 11. 9-10. [査読有](#)
2. [藤崎万裕](#)，野口麻衣子，小林弘美，山本則子・訪問看護師の訪問看護業界定着意向に関連する要因・第9回日本在宅看護学会学術集会，東京都看護協会，東京，2019. 12. 7-8. [査読有](#)
3. 高橋競，田中友規，Suthutvoravut Unyaporn，吉澤裕世，[藤崎万裕](#)，西本美紗，飯島勝矢・地域在住高齢者における下部尿路症状と活動能力との関連：大規模高齢者コホート研究（柏スタディ）データによる検証・第32回日本老年泌尿器科学会，旭川市民文化会館，北海道，2019. 6. 14-15.
4. スタヴォラヴット・アンヤポーン，田中友規，高橋競，[藤崎万裕](#)，吉澤裕世，西本美紗，秋下雅弘，飯島勝矢・地域高齢者における食事での会話とフレイルの関連：柏スタディー・第6回日本サルコペニア・フレイル学会大会，朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター，新潟，2019. 11. 9-10. [査読有](#)
5. 高橋競，田中友規，吉澤裕世，[藤崎万裕](#)，西本美紗，Suthutvoravut Unyaporn，飯島勝矢・フレイルチェック後のグループディスカッションによる意識・行動変容に関する混合研究・第6回日本サルコペニア・フレイル学会大会，朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター，新潟，2019. 11. 9-10. [査読有](#)
6. 吉澤裕世，田中友規，村瀬義典，高橋競，[藤崎万裕](#)，Suthutvoravut Unyaporn，西本美紗，飯島勝矢・フレイルチェック開催方法の相違における対象者の特性についての検討・第6回日本サルコペニア・フレイル学会大会，朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター，新潟，2019. 11. 9-10. [査読有](#)
7. 西本美紗，田中友規，高橋競，[藤崎万裕](#)，吉澤裕世，Suthutvoravut Unyaporn，飯島勝矢・地域在住高齢者の整容とフレイルの関連：柏スタディ・第6回日本サルコペニア・フレイル学会大会，朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター，新潟，2019. 11. 9-10. [査読有](#)
8. 野口麻衣子，小林弘美，[藤崎万裕](#)，稲垣安沙，山本則子・職場内コミュニケーションの時間と訪問看護師の就業継続意向との関連：横断研究・第9回日本在宅看護学会学術集会，東京都看護協会，東京，2019. 12. 7-8. [査読有](#)

■ 税所真也（特任助教）

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. [税所真也](#)・成年後見をとおした家計と家族の再編成・家族関係学，2019；38巻：57-65. [査読有](#)

【著書、編著】

1. 税所真也・成年後見の社会学・勁草書房、2020.

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. 税所真也・日本成年监护制度的运行与发展——基于制度施行 20 年的经验（日本における成年後見制度の運用と展開——制度施行 20 年の経験から）・上海市劳动社会保障学会（上海市労働社会保障学会）、上海、中国、2019. 6. 23.（招待・基調講演）
2. 税所真也・关于老年人财产管理的中日家族比较研究（高齢者の財産管理に関する家族の中日比較研究）・老龄化背景下的中日家庭变迁与社会支持国际学术研讨会（中国社会科学院・日本比較家族史学会国際シンポジウム——高齢化する中日社会における家族の変化と社会的支援）、北京、中国、2019. 9. 21. 査読有
3. 税所真也・日本意定监护制度及其发展现状（日本における成年後見制度の進展と現在）・中日成人意定监护制度的学术讨论和实践，（中日成年後見学術交流シンポジウム）上海、中国、2020. 1. 17.（招待・基調講演）

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 税所真也・民間企業の視点からみた成年後見の社会化・公益財団法人生命保険文化センター 人生 100 年時代におけるライフマネジメント特別研究会第 3 回東京研究会、東京、2019. 12. 3.（招待）
2. 税所真也・成年後見をとおした「家計の個計化・世帯分離」と「高齢者の住まい」を考える・武蔵野大学法学研究所シンポジウム 令和時代の高齢者社会と法のあり方を考える、東京、2019. 10. 26.（招待）

■ 高瀬麻以（特任研究員）

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Takase M, Murayama H, Hirukawa S, Tanaka T, Ono S, Sugimoto M, Kimata M. Which Aspects of Dining Style are Associated with Depressive Mood? A Study at an Assisted Living Facility in Japan. Journal of Nutrition in Gerontology and Geriatrics, 2019; 38 (4): 377-386. 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Takase M, Yoshida K, Tanaka T, Ijima K, Okata J. The effects of goldfish observation on the state of mind of Japanese seniors: The potential therapeutic use of ornamental fish. The 11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress, Taipei, Taiwan, 2019. 10. 16. 査読有
2. Kim H, Sakai E, Kamesawa A, Kim D, Nakayama R, Terazawa S, Ogawa K, Masuda K, Akizuki Y, Yang Y, Yang Y, Suzuki Y, Shah R, Masuda T, Gandy C, Maeda K, Saisho S, Takase M, Ogino R, Goto J. Exploring the Significance of the Community Center to Japa-

nese Senior Citizens from the Perspective of Place Attachment. The 11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress, Taipei, Taiwan, 2019. 10. 26. [査読有](#)

3. [Takase M](#), Murayama H, Kimata M, Hirukawa S, Tanaka T, Sugimoto M, Ono S. Not enjoying the meal was associated with depressive symptoms, despite the size of social connections. GSA 2019 Annual Scientific Meeting, Austin, Texas, 2019. 11. 13. [査読有](#)
4. [Takase M](#), Ogino R, Goto J. A comparative analysis of social support between solitary seniors who attend club activity or go out to see a friend. GSA 2019 Annual Scientific Meeting, Austin, Texas, 2019. 11. 16. [査読有](#)
5. [Takase M](#). Possible Integration of Machine Learning Methodology and Support Plan Construction for Meal and Nutritional Ecology of Older Adults. Carnegie Mellon University, Pittsburg, Pennsylvania, 2019. 11.18. (招待講演)

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. [高瀬麻以](#)・シニアの“いま”を見つけよう！『高齢社会を「地域」から考える～私たちは、これから何ができるのだろうか～』・SENIOR MARKETING DAY, 東京, 2019. 4. 23. (招待講演) 2・[高瀬麻以](#), 阿部浩子, 工藤正美, 石塚佳久, 上坂英二, 中村岳雪, 丸山道生・回復期リハビリテーション病棟への入院後2か月間の運動機能の変化と、患者特性の関心の検証・第35回日本臨床栄養代謝学会学術集会, 京都, 2020. 2. 27-28. [査読有](#)
3. 野田武, [高瀬麻以](#), 阿部浩子, 上坂英二・血清クレアチニン値から筋萎縮性硬化症(ALS)患者の栄養管理を考える・第35回日本臨床栄養代謝学会学術集会, 京都, 2020. 2. 27-28. [査読有](#) 4・下山健人, [高瀬麻以](#), 阿部浩子, 上坂英二・低Na血症が認められた患者への輸液や食事による治療法と、血清Na値への影響の検討・第35回日本臨床栄養代謝学会学術集会, 京都, 2020. 2. 27-28. [査読有](#)

■ 伊藤研一郎 (特任研究員)

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

1. [Ito K](#), Nishimura H, Ogi T. Motorcycle Head-Up Display: Design of Presenting Navigation Information. IEEE Consumer Electronics Magazine, 2019; 8 (5); 74-78. [査読有](#)

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Ogi T, [Ito K](#), Ohashi K. Improvement of Health Behavior based on Health Information Feedback. 10th International Conference on Applied Human Factors and Ergonomics (AHFE 2019), Washington D.C., USA, 2019. 7. 24-28. [査読有](#)
2. Kang SI, Yoshizaki R, Nakano K, Okatani T, Kamesawa A, Yoshioka D, Wu J, Sakurai Y, [Ito K](#), Fujisaki-Sueda-Sakai M, Sugawara I, Nihei M, Miura T, Yabu K, Mori T, Ifukube T, Okata J. Design and Implementation of Age-Friendly Activity for Supporting Elderly's

Daily Life by IoT. 5th International Conference on Human Aspects of IT for the Aged Population, Orlando, USA, 2019. 7. 26–31.

3. Ito K, Hirose M. Immersive Virtual Reality Environment to Test Interface of Advanced Driver Assistance Systems for Elder Driver. CI International 2019 21th International Conference on Human-Computer Interaction, Orlando, USA, 2019. 7. 26–31.
4. Ito K, Ogino R, Hiyama A, Hirose M. Senior's Acceptance of Head-Mounted Display Using Consumer Based Virtual Reality Contents. HCI International 2019 21th International Conference on Human-Computer Interaction, Orlando, USA, 2019. 7. 26–31.
5. Nakano K, Sakurai Y, Kang S, Yoshizaki R, Okatani R, Kamesawa A, Yoshioka D, Wu J, Ito K, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Sugawara I, Nihei M, Miura T, Yabu K, Mori T, Ifukube T, Okata J. How the Elderly Accept the Concept of IoT as Assistive Technology: Interventional Study of the Attitude to IoT by Workshop. The 11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress, Taipei, Taiwan, 2019. 10. 23–27. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 轟中洋，尹善吉，伊藤研一郎，西村秀和，小木哲朗・没入方自動運転シミュレータの開発とドライバの行動分析・第24回香り・味と生体情報研究会，武雄市，2019. 6. 13–14.
2. 轟中洋，伊藤研一郎，尹善吉，西村秀和，小木哲朗・没入方自動運転シミュレータを用いた自動運転車ドライバの行動分析・ヒューマンインタフェースシンポジウム 2019，京都，2019. 9. 2–5.
3. 伊藤研一郎・自動二輪ライダの特性を考慮した二輪 HUD の研究事例・自動車技術会 03-19 自動車開発における人間工学の理論と実践—ドライバの特性を考えた車づくり—，東京，2019. 9. 12.
4. 伊藤研一郎，湖上碩樹，カンスーイン，吉崎れいな，櫻井友理希，中野航綺，吉岡大介，藤崎万裕，菅原育子，二瓶美里，三浦貴大，藪謙一郎，森武俊，伊福部達，原田昇・IoT を活用した在宅高齢者の QoL とコミュニティ支援に関する研究・ヒューマンインタフェース学会 高齢者支援 ICT 専門研究委員会 第2回研究会，東京，2019. 12. 15.

■ 田中友規（特任研究員）

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Chen LK, Woo J, Assantachai P, Auyeung TW, Chou MY, Iijima K, Jang HC, Kang L, Kim M, Kim S, Kojima T, Kuzuya M, Lee JSW, Lee SY, Lee WJ, Lee Y, Liang CK, Lim JY, Lim WS, Peng LN, Sugimoto K, Tanaka T, Won CW, Yamada M, Zhang T, Akishita M, Arai H. Asian Working Group for Sarcopenia: 2019 Consensus Update on Sarcopenia Diagnosis and Treatment. Journal of the American Medical Directors Association, 2020 ;

- 21 (3): 300-307. [査読有](#)
2. Suthutvoravut U, [Tanaka T](#), Takahashi K, Akishita M, Iijima K. Living with family yet eating alone is associated with frailty in community-dwelling older adults: the Kashiwa study. *The Journal of Frailty & Aging*, 2019; 8 (4): 198-204. [査読有](#)
 3. Suthutvoravut U, Takahashi K, Murayama H, [Tanaka T](#), Akishita M, Iijima K. Association Between Traditional Japanese Diet Washoku and Sarcopenia in Community-Dwelling Older Adults: Findings from the Kashiwa Study. *The Journal of Nutrition, Health & Aging*, 2020; 24: 282-289. [査読有](#)
 4. Takase M, Murayama H, Hirukawa S, Sugimoto M, Ono S, [Tanaka T](#), Kimata M. Which Aspects of Dining Style are Associated with Depressive Mood? A Study at an Assisted Living Facility in Japan. *Journal of nutrition in gerontology and geriatrics*, 2019; 38 (4):377-386.
 5. 吉澤裕世, [田中友規](#), 高橋競, 藤崎万裕, 飯島勝矢・地域在住高齢者における身体・文化・地域活動の重複実施とフレイルとの関係・日本公衆衛生雑誌, 2019;66 (6): 306-316.
 6. 西本美紗, [田中友規](#), 高橋競, Suthutvoravut U, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 飯島勝矢・オーラルフレイルは残存歯数減少よりも口腔関連 QOL 低下と強く関連する: 地域在住高齢者による横断検討 (柏スタディ)・日本未病システム学会雑誌, 2019;25 (3): 48-52.
 7. 西本美紗, [田中友規](#), 高橋競, Suthutvoravut U, 藤崎万裕, 吉澤裕世, 飯島勝矢・オーラルフレイルと食事の満足度の関連: 地域在住高齢者による横断検討 (柏スタディ)・日本老年医学会雑誌・(in press)

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. [田中友規](#)・地域におけるサルコペニアスクリーニング・*Geriatric Medicine (老年医学)*, 2019;57 (11): 1035-1039.
2. [田中友規](#)・社会的フレイルとは・*ニュートリションケア*, 2019;12 (7): 680-683.
3. [田中友規](#)・地域でのスクリーニング法・*カレントセラピー*, 2019;37 (12): 1140-1146.
4. [田中友規](#)・オーラルフレイルへのアプローチを標準化する・*Therapeutic Research*, 2019; 40 (1): 24-26.
5. [田中友規](#), 飯島勝矢・フレイル・サルコペニアの危険因子とその階層構造・*Medical Science Digest*, 2019;45 (6): 11-14.
6. [田中友規](#), 飯島勝矢・足とサルコペニア 下腿周囲径を活用し, サルコペニアを見極める・*内科*, 2019;124 (5), 2325-2329.
7. [田中友規](#), 高橋競, 飯島勝矢・健康長寿社会への新しい取り組みーフレイル予防を通じた健康長寿のまちづくりー・*予防医学*, 2019;60:15-19.
8. [田中友規](#), 飯島勝矢・地域で取り組むフレイル対策のポイントと重要性・*看護技術*, 2019; 66 (5): 130-136.

9. 田中友規，飯島勝矢，高木貴子，徳丸剛・フレイルチェックを活用した健康長寿のまちづくり・看護技術，2019;66（5）: 137-140.
10. 田中友規，飯島勝矢，東村山市健康増進課，樹本京子・“フレイルサポーター” がカギを握る地域での支援・看護技術，2019;66（5）: 142-145.
11. 田中友規，飯島勝矢，東村山市健康増進課，樹本京子・産学連携で取り組むフレイル対策・看護技術，2019;66（5）: 146-151.

【著書、編著】

1. 熊谷修，栗原明子，細山田洋子，手塚順子，前田佳予子，竹田すずよ，田中弥生，田中友規，藤原恵子，入澤いづみ，入澤治子，本川佳子，門馬恵理子・食介護実践論 食べることへの支援 基本情報編，第一出版，2019;pp8-25.
2. 田中友規・I章 4. 簡単にできる栄養状態の評価とは？・代田浩之（監修），荒井秀典（編），大村寛敏（編），現場のお悩みズバリ解決！循環器の高齢者診療“術”，南江堂，2019.
3. 伊藤中（監著），小島美樹（監著），吉備政仁，相田潤，飯島勝矢，泉英之，井上裕子，大月基弘，久保至誠，小谷泰子，児玉実穂，佐々生康宏，須貝昭弘，高橋治，田中友規，矢谷博文，山崎治，山田翔，米永一理，和田誠大・別冊 ザ・クインテッセンス YEARBOOK 2020 スタッフにも読ませたい！人生 100 年時代の予防・メンテナンス・クインテッセンス出版株式会社，2019; pp162-165.

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Tanaka T, Kawahara T, Iijima K. Can the vigorous training at adolescent athletes help prevent geriatric outcomes? Comparing between Tokyo Olympians in 1964 and community-dwelling older adults. The 11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress, Taipei, Taiwan, 2019. 10. 23-27. 査読有
2. Nishimoto M, Tanaka T, Watanabe Y, Hirano H, Kikutani T, Sato T, Nakajo K, Iijima K. ORAL FRAILITY is associated with deterioration of both oral health behaviors and intra-oral conditions. The 11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress 2019, Taipei, Taiwan, 2019. 10. 23-27. 査読有
3. Tanaka T, Takahashi K, Akishita M, Iijima K. Validity of community-based frailty check-up by volunteers for predicting adverse health outcomes. The Gerontological society of America, Annual scientific meeting in Austin, Texas, 2019. 11. 13-17. 査読有
4. Nishimoto M, Tanaka T, Watanabe Y, Hirano H, Kikutani T, Sato T, Nakajo K, Iijima K. ORAL FRAILITY is associated with multi-faceted frailty in elderly outpatients at community dental clinics. The Gerontological society of America, Annual scientific meeting of Gerontological Society of America, Austin, Texas, USA, 2019. 11. 13-17. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. Suthutvoravut U, 田中友規，高橋競，秋下雅弘，飯島勝矢・地域在住高齢者における多剤併

- 用と食事量・食品摂取との関連：柏スタディー・第 3 回日本老年薬学会学術大会，名古屋，2019. 5-11. [査読有](#)
2. 高橋競，村山洋史，[田中友規](#)，高瀬麻以，飯島勝矢・地域在住高齢者の孤食に関する質的研究—なぜ，同居家族がいるのに孤食になるのか？・第 61 回日本老年医学会学術集会，仙台，2019. 6. 6-8. [査読有](#)
 3. Suthutvoravut U，[田中友規](#)，高橋競，藤崎万裕，吉澤裕世，西本美紗，秋下雅弘，飯島勝矢・地域在住高齢者における和食スコアとサルコペニアとの関連：柏スタディー・第 30 回日本老年歯科医学会学術集会，仙台，2019. 6. 6-8. [査読有](#)
 4. 西本美紗，[田中友規](#)，飯島勝矢・歯磨き習慣とオーラルフレイル新規発症の関連—柏スタディーより—・第 30 回日本老年歯科医学会学術集会，仙台，2019. 6. 6-8. [査読有](#)
 5. 高橋競，[田中友規](#)，Suthutvoravut U，吉澤裕世，藤崎万裕，西本美紗，飯島勝矢・地域在住高齢者における下部尿路症状と活動能力との関連—大規模高齢者コホート研究（柏スタディ）データによる検証・第 32 回日本老年泌尿器科学会，旭川，2019. 6. 14-15. [査読有](#)
 6. 内山瑛美子，高野渉，中村仁彦，孫輔卿，今枝秀二郎，[田中友規](#)，飯島勝矢，松原全宏・質問紙調査票の統計的正規化による転倒リスク識別器の構築・第 37 回日本ロボット学会（RSJ2019），東京，2019. 9. 3-7. [査読有](#)
 7. 孫輔卿，内山瑛美子，今枝秀二郎，谷口紗貴子，[田中友規](#)，角川由香，馬場絢子，Suthutvoravut U，松原全宏，秋下雅弘，大月敏雄，田中敏明，飯島勝矢・新しい転倒予防の挑戦：医工連携による骨折まで至った自宅トイレ関連転倒の特徴解明—入院時ベッドサイド調査と退院後自宅訪問調査から—・第 6 回日本転倒予防学会，新潟，2019. 10. 5-6. [査読有](#)
 8. 今枝秀二郎，孫輔卿，内山瑛美子，谷口紗貴子，Suthutvoravut U，馬場絢子，角川由香，[田中友規](#)，田中敏明，飯島勝矢，松原全宏，大月敏雄・退院後の自宅訪問調査による転倒・大腿骨折を経験した高齢患者の住環境変化・第 6 回日本転倒予防学会，新潟，2019. 10. 5-6. [査読有](#)
 9. [田中友規](#)・住民主体の地域活動「フレイルチェック」を中心としたフレイル予防の地域づくり～その可能性と課題～・第 6 回日本サルコペニア・フレイル学会大会，新潟，2019. 11. 9-10. [査読有](#)
 10. [田中友規](#)・オーラルフレイルの疫学・第 6 回日本サルコペニア・フレイル学会大会，新潟，2019. 11. 9-10. [査読有](#)
 11. [田中友規](#)，西本美紗，徳丸剛，森千夏，田代紫織，飯島勝矢・フレイルの認知率の高い町ではフレイルの悪化および新規介護新規認定が少ない—75 歳以上自立高齢者の悉皆パネルデータによる後ろ向き研究—・第 6 回日本サルコペニア・フレイル学会大会，新潟，2019. 11. 9-10. [査読有](#)
 12. 西本美紗，[田中友規](#)，高橋競，Suthutvoravut U，藤崎万裕，吉澤裕世，飯島勝矢・地域在住高齢者の整容とフレイルの関連：柏スタディ・第 6 回日本サルコペニア・フレイル学会大会，新潟，2019. 11. 9-10. [査読有](#)

13. 西本美紗，田中友規，徳丸剛，森千夏，田代紫織，飯島勝矢・地域在住高齢者における定期歯科健診受診とフレイルの関連—後期高齢者悉皆調査パネルデータより—・第 6 回日本サルコペニア・フレイル学会大会，新潟，2019. 11. 9-10. 査読有
14. 高橋競，田中友規，吉澤裕世，藤崎万裕，西本美紗，Suthutvoravut U，飯島勝矢・フレイルチェック後のグループディスカッションによる意識・行動変容に関する混合研究・第 6 回日本サルコペニア・フレイル学会大会，新潟，2019. 11. 9-10. 査読有
15. 呂偉達，田中友規，徳丸剛，森千夏，田代紫織，飯島勝矢・The Connection Between Exercise Consciousness and Physical Function Impairment Risk: A cross-sectional exhaustive survey・第 6 回日本サルコペニア・フレイル学会大会，新潟，2019. 11. 9-10. 査読有
16. Suthutvoravut U，田中友規，高橋競，藤崎万裕，吉澤裕世，秋下雅弘，飯島勝矢・地域高齢者における食事中会話とフレイルの関連：柏スタディー・第 6 回日本サルコペニア・フレイル学会大会，新潟，2019. 11. 9-10. 査読有
17. 吉澤裕世，田中友規，村瀬義典，高橋競，藤崎万裕，Suthutvoravut U，西本美紗，飯島勝矢・フレイルチェック開催方法の相違における対象者の特性についての検討・第 6 回日本サルコペニア・フレイル学会大会，新潟，2019. 11. 9-10. 査読有
18. 上野裕生，熊谷和美，西本瑛亮，渡邊由桂，黒田紳之亮，田中友規，長内忍・医大生が主体となり取り組むフレイル予防プロジェクトの運営・第 6 回日本サルコペニア・フレイル学会大会，新潟，2019. 11. 9-10. 査読有
19. 西本美紗，田中友規，飯島勝矢・地域在住高齢者における歯科保健行動とオーラルフレイルの関連—柏スタディーより—・第 26 回日本未病システム学会学術総会，名古屋，2019. 11. 16-17. 査読有
20. 泉綾子，田中友規，西本美紗，徳丸剛，森千夏，田代紫織，飯島勝矢・地域在住後期高齢者の咀嚼機能低下の自覚は低栄養リスク（GLIM 基準）と関連する—東京都 N 市における悉皆調査—・第 26 回日本未病システム学会学術総会，名古屋，2019. 11. 16-17. 査読有

2・受賞歴

■ 村山洋史（特任講師）

- 1 「第 22 回日本運動疫学会学術総会優秀演題賞」（天笠志保，井上茂，村山洋史，藤原武男，菊池宏幸，福島教照，町田征己，菖蒲川由郷・豪雪地域在住高齢者における非積雪期と積雪期の加速度計で評価した身体活動パターンの比較：NEIGE study: Compositional data analysis を用いた縦断研究）2019. 6.

- 2 「第78回日本公衆衛生学会総会優秀ポスター賞」(横山友里, 清野諭, 光武誠吾, 西真理子, 村山洋史, 成田美紀, 石崎達郎, 野藤悠, 北村明彦, 新開省二・フレイル改善のための複合プログラムが要介護・死亡リスクと介護給付費に及ぼす影響) 2019. 10.
- 3 「2019年度日本疫学会奨励賞」(村山洋史・地域特性の違いに着目した高齢期の社会疫学研究) 2020. 2.

■ 田中友規 (特任研究員)

- 1 「第10回Geriatrics & Gerontology International 優秀論文賞」(Tanaka T, Takahashi K, Akishita M, Tsuji T, Iijima K. “Yubi-wakka” (finger-ring) test: A practical self-screening method for sarcopenia, and a predictor of disability and mortality among Japanese community-dwelling older adults) 2019. 6.
- 2 「The 11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress 2019 Outstanding poster presentation award」(Nishimoto M, Tanaka T, Watanabe Y, Hirano H, Kikutani T, Sato T, Nakajo K, Iijima K. ORAL FRAILTY is associated with deterioration of both oral health behaviors and intraoral conditions) 2019. 6.
- 3 「第26回日本未病学会学術総会優秀演題賞」(泉綾子, 田中友規, 西本美紗, 徳丸剛, 森千夏, 田中紫織, 飯島勝矢・地域在住後期高齢者の咀嚼機能低下の自覚は低栄養リスク (GLIM基準) と関連する—東京都N市における悉皆調査—) 2019. 11.

3・コース生による研究成果

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

- Yang N, An Q, Kogami H, Yamakawa H, Tamura Y, Takahashi K, Kinomoto M, Yamasaki H, Itkonen M, Alnajjar FS, Shimoda S, Hattori N, Fujii T, Otomune H, Miyai I, Yamashita A, Asama H. Temporal Features of Muscle Synergies in Sit-to-stand Motion Reflect the Motor Impairment of Post-Stroke Patients. IEEE Transactions on Neural Systems and Rehabilitation Engineering, 2019; 27 (10): 2118—2127. [査読有](#)
- Shinozaki N, Murakami K, Masayasu S, Sasaki S. Development and simulated validation of a dish composition database for estimating food group and nutrient intakes in Japan. Public Health Nutr, 2019; 22 (13): 2367—2380. [査読有](#)
- Shinozaki N, Murakami K, Masayasu S, Sasaki S. Validity of a dish composition database for estimating protein, sodium and potassium intakes against 24 h urinary excretion:

comparison with a standard food composition database. *Public Health Nutr.* 2019 ; 22 (13): 2367–2380. [査読有](#)

- [Yang N](#), [An Q](#), [Kogami H](#), [Yoshida K](#), [Yamakawa H](#), [Tamura Y](#), [Shimoda S](#), [Yamasaki H](#), [Sonoo M](#), [Itkonen M](#), [Alnajjar FS](#), [Hattori N](#), [Kinomoto M](#), [Takahashi K](#), [Fujii T](#), [Otomune H](#), [Miyai I](#), [Yamashita A](#), [Asama H](#). Temporal Muscle Synergy Features Estimate Effects of Short-Term Rehabilitation in Sit-to-Stand of Post-Stroke Patients. *IEEE Robotics and Automation Letters*, 2020 ; 5 (2): 1796—1802. [査読有](#)
- [Suthutvoravut U](#), [Tanaka T](#), [Takahashi K](#), [Akishita M](#), [Iijima K](#). Living with Family Yet Eating Alone is Associated with Frailty in Community-Dwelling Older Adults: The Kashiwa Study. *The Journal of Frailty & Aging*, 2019 ; 8 (4): 198–204. [査読有](#)
- [Suthutvoravut U](#), [Takahashi K](#), [Murayama H](#), [Tanaka T](#), [Akishita M](#), [Iijima K](#). Association Between Traditional Japanese Diet Washoku and Sarcopenia in Community-Dwelling Older Adults: Findings from the Kashiwa Study. *The Journal of Nutrition, Health & Aging*, 2020 ; 1—8. [査読有](#)
- [Sumikawa Y](#), [Naruse T](#), [Nagata S](#). Postdischarge support by discharge planning nurses for older adults at acute hospitals: A 30-day prospective observational study. *Japanese Journal of Health and Human Ecology*, 2019 ; 85 (5): 166—177. [査読有](#)
- [Komatsu R](#), [Fujii H](#), [Tamura T](#), [Yamashita A](#), [Asama H](#). Octave Deep Plane-sweeping Network: Reducing Spatial Redundancy for Learning-based Plane-sweeping Stereo. *IEEE Access*, 2019 ; 7 : 150306–150317. [査読有](#)
- [Imaeda S](#), [Otsuki T](#). The Relationship Between Fracture and Fall Place in Super-Aged City. *Journal of Sustainable Urbanization and Regeneration*, 2020 ; 2 (1): 31–38. [査読有](#)
- [Murakami K](#), [Livingstone MBE](#), [Shinozaki N](#), [Sugimoto M](#), [Fujiwara A](#), [Masayasu S](#), [Sasaki S](#). Food combinations in relation to the quality of overall diet and individual meals in Japanese adults: a nationwidestudy. *Nutrients*. 2020 ; 12 (2). pii: E327. [査読有](#)
- [Sarale A](#), [Yagi H](#), [Gkartzios M](#), [Ogawa K](#). Art festivals and rural revitalization: organizing the Oku-noto Triennale in Japan. *Journal of Asian Rural Studies*, 2020 ; 4 (1): 23–36. [査読有](#)
- [Yamasaki H](#), [An Q](#), [Kinomoto M](#), [Takahashi K](#), [Fujii T](#), [Kogami H](#), [Yang N](#), [Yamakawa H](#), [Tamura Y](#), [Itkonen M](#), [Sonoo M](#), [Alnajjar FS](#), [Yamashita A](#), [Otomune H](#), [Hattori N](#), [Asama H](#), [Miyai I](#), [Shimoda S](#). Organization of Functional Modularity in Sitting Balance Response and Gait Performance after Stroke. *Clinical Biomechanics*, 2019 ; 67 : 61–69. [査読有](#)
- [Son BK](#), [Akishita M](#), [Uchiyama E](#), [Imaeda S](#), [Taniguchi S](#), [Sumikawa Y](#), [Unyaporn S](#), [Matsubara T](#), [Tanaka S](#), [Tanaka T](#), [Otsuki T](#), [Okata J](#), [Iijima K](#). Multiple turns: Potential

risk factor for falls on the way to the toilet. *Geriatr Gerontol Int.* 2019 Dec; 19 (12): 1293–1295. doi: 10.1111/ggi.13806. [査読有](#)

- [Kang S](#), [Yoshizaki R](#), [Nakano K](#), [Okatani T](#), [Kamesawa A](#), [Yoshioka D](#), [Wu J](#), [Sakurai Y](#), [Ito K](#), [Fujisaki-Sueda-Sakai M](#), [Sugawara I](#), [Nihei M](#), [Miura T](#), [Yabu K](#), [Mori T](#), [Ifukube T](#) and [Okata J](#). Design and Implementation of Age-Friendly Activity for Supporting Elderly's Daily Life by IoT. HCI 2019 International 21st International Conference on Human-Computer Interaction, In book: Human Aspects of IT for the Aged Population. Social Media, Games and Assistive Environments, pp. 353—368. [査読有](#) DOI: 10.1007/978—3—030—22015—0_28
- [Wang C](#). Fuyuki K. Determinants of livelihood diversification strategies in rural China: a comparative analysis. *The Japanese Journal of Agricultural Economics*, 2020. (in press) [査読有](#)
- [Komatsu R](#), [Fujii H](#), [Tamura T](#), [Yamashita A](#), [Asama H](#). Free Viewpoint Image Generation System Using Fisheye Cameras and a Laser Rangefinder for Indoor Robot Teleoperation. *ROBOMECH Journal*, 2020. [査読有](#)
- [Igarashi A](#), [Matsumoto H](#), [Takaoka M](#), [Kugai H](#), [Suzuki M](#), [Yamamoto-Mitani N](#). Educational Program for Promoting Collaboration Between Community Care Professionals and Convenience Stores. *Journal of Applied Gerontology*, 2019. (in press) [査読有](#)
- [Aw W](#), [Jia H](#), [Lyu W](#), [Fukuda S](#), [Hanate M](#), [Tomita M](#), [Otani L](#), [Kato H](#). Integrated omics profiling of Wolfberry (*Lycium Barbum*) -enriched diets suppressed dextran sodium sulphate induced colitis in mice. *NPJ Science of Food*. (in press) [査読有](#)
- [Shazini R](#), [Jia H](#), [Sekine H](#), [Lyu W](#), [Furukawa K](#), [Saito K](#), [Hasebe Y](#), [Kato H](#). Eggshell membrane powder lowers plasma triglyceride and liver total cholesterol by modulating gut microbiota and accelerating lipid metabolism in high-fat diet-fed mice. *Food Science & Nutrition*. (in press) [査読有](#)
- [馬場絢子](#)・老いゆく母親を介護する娘の意味づけに関する質的研究・心理臨床学会，2019；37（3）：248-258. [査読有](#)
- [前田一步](#)・明治後期・東京の都市公園における管理と抵抗——日比谷公園音楽堂における西洋音楽への意味づけをめぐる——ソシオロギス，2019；43：1-18. [査読有](#)
- [小川景司](#)，[八木洋憲](#)・集落営農による収益分配とステークホルダー関係—滋賀県の集落営農法人における人的資源の内部持続性に着目して—・農業経営研究，2020；57（4）：79-84. [査読有](#)
- [今枝秀二郎](#)，[大月敏雄](#)・2016年救急活動記録票の分析による福岡県大牟田市での転倒発生場所と受傷事例の特徴・日本建築学会計画系論文集，2019.5；84（759）：1077-1087. [査読有](#)
- [高橋美保](#)，[黒田美保](#)，[田川薫](#)，[Alexander Krieg](#)，[中山奈緒子](#)，[馬場絢子](#)，[野村佳申](#)，[林さらさ](#)・成人の自閉スペクトラム症傾向者の多面的評価尺度の開発：生活能力・就労能力および

自閉スペクトラム症特性を測定するための簡易型尺度・臨床心理学，2019;19（6）: 725-736.
査読有

- 須沢栞・市町村を跨いだ広域避難の実態と課題—仙台市と盛岡市を対象とした調査から—・2019 年度建築学会大会（東北）建築計画部門パネルディスカッション資料：住まいの復興の共有知を目指して 東日本大震災の事例から考えるこれからの住まい，2019;17-20.
- 須沢栞，大月敏雄，新井信幸，井本佐保里，李鎔根・仙台市における市外被災世帯の居住地・住まいの変遷と世帯属性の把握・2019 年度日本建築学会大会（北陸）学術講演梗概集，建築計画，2019;1335-1336.
- 馬場絢子・介護以前の親子関係における精神的自立が介護に与える影響—母娘介護の受容に注目して—・応用心理学研究，2020;45（3）.（in press）査読有
- 小川景司，八木洋憲・集落営農法人によるステークホルダーマネジメントの選択と持続性—滋賀県における実証分析—・農業経済研究，2020;91（4）.（in press）査読有
- 稲垣安沙，高野純子，野口麻衣子，山本則子・地域在住高齢者のアドバンス・ケア・プランニング（ACP）の実施状況と関連要因：横断研究・日本看護科学会誌・（in press）査読有
- 北村智美，五十嵐歩，山内康宏，千住秀明，堀江健夫，山本則子・高齢慢性閉塞性肺疾患患者のセルフマネジメント行動の実態と息切れの程度による比較・日呼吸ケアリハ会誌・（in press）査読有
- 齋藤勝宏，王聰，芳賀猛・アフリカ豚コレラの発生がわが国経済に及ぼす影響予測—地域間産業連関分析アプローチ—・フードシステム研究，2020.（in press）査読有
- 山本なつ紀，成瀬昂，松本博成，藤崎万裕，永田智子・訪問看護師による Patient Safety Incidents の認識と報告：質的記述的研究・在宅ケア学会，2020.（in press）査読有
- 前田一步・高齢期就労の継続要因——職業経験の効果に着目して・2019 年度課題公募型二次分析研究会 全国高齢者パネル調査による高齢期の生活と健康に関する二次分析研究成果報告書，2020.3.
- 江浦瑛子，隅田玲，中山奈緒子，馬場絢子，鳥羽翔太，藤沢祐未，和智遥香，中山莉子，高橋美保・質的研究の分析手法に関する比較検討—初学者が GTA と M-GTA の分析プロセスで感じる困難感をテーマとして—・東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要，2020；43.（in press）
- 鳥羽翔太，和智遥香，隅田玲，馬場絢子，江浦瑛子，山口なつみ，李曉茹，高橋美保・内観体験の臨床心理実践者に対する教育的効果についての検討—短期内観を体験した臨床心理学の初学者を対象として—・東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要，2020；43.（in press）
- 王天天・転換期中国における都市空間の形成・再編と郊外住宅地の発展・地学雑誌，2020；129（1）: 1-19.

【学術雑誌等又は商業誌における解説，総説】

- 中野航綺・歴史理論史から社会福祉の本質にせまりたい—特集 わたしたちが明日を守り，つくる 若手研究者たちの座談会：若手社会福祉研究者による座談会 東日本編・研究と実践の両輪で社会のあり方を問いなおす，福祉のひろば，2019; (235): 42-45.
- 今枝秀二郎・建築学科現役学生による MY LAB・紹介，建築東京，2019. 8; 10-11.
- 小川景司・集落営農の持続可能性に向けた取り組みと成果・農業と経済，2020; 86 (3): 102-105.
- 伊藤佑介，吉崎れいな，杉田直彦・高電子密度領域への選択的レーザー光吸収によるガラスの超高速・微細・精密加工・レーザー加工学会誌，2019; 26 (3): 211-213.
- 伊藤佑介，吉崎れいな，杉田直彦・ガラスへの超高速微細精密レーザー加工技術・機械技術，2019; 67 (8): 31-35.
- 伊藤佑介，吉崎れいな，宮本直之，杉田直彦・ガラスの超高速精密レーザー加工—電子励起領域への選択的光吸収による超高速精密加工・光学，2019; 48 (6): 219.
- 杉田直彦，伊藤佑介，吉崎れいな・ガラスのレーザー加工を従来の5,000倍の速さで実現・光アライアンス，2020; 31 (1): 1-4.

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

- Funaki T, Ito T, Murakami Y. Overexpression of CADM1 enhances malignant features of small cell lung cancer. AACR annual meeting 2019, Atlanta, Georgia, USA, 2019. 4. 1-3. 査読有
- Sakurai Y, Baeg K, Lam A, Shoji K, Yoshikawa M, Tomari Y, Iwakawa H. In vitro recapitulation of the secondary siRNA biogenesis in plants. KEYSTONE SYMPOSIA on Molecular and Cellular Biology, Small Regulatory RNA Daejeon, South Korea, 2019. 4. 14-18. 査読有
- Yoshida K, Hiruta T, Kishita Y, Umeda Y. Model-based Life Cycle Management Using Deterioration Simulation. 26th CIRP Life Cycle Engineering (LCE) Conference, West Lafayette, Indiana, USA, 2019. 5. 7-9. 査読有
- Kim D, Pathak S, Moro A, Komatsu R, Yamashita A, Asama H. E-CNN: Accurate Spherical Camera Rotation Estimation via Uniformization of Distorted Optical Flow Fields. The 2019 IEEE International Conference on Acoustics, Speech, and Signal Processing (ICASSP2019), Brighton, UK, 2019. 5. 12-17. 査読有
- Yoshizaki R, Ito Y, Shibata A, Nagasawa I, Nagato K, Sugita N. High-speed observation of glass micro-drilling by continuous-wave fiber laser. 8th International Congress on Laser Advanced Materials Processing (LAMP), P-LPM50, Hiroshima, Japan, 2019. 5. 21-24.
- Aoyagi K, Wen W, An Q, Hamasaki S, Yamakawa H, Tamura Y, Yamashita A and Asama H. Method to improve the sense of agency of subjects simulating arm disabilities.

清華大学—東京大学交流ワークショップ・Beijing, China, 2019. 5. 27–30.

- Kang S, Yoshizaki R, Nakano K, Okatani T, Kamesawa A, Yoshioka D, Wu J, Sakurai Y, Ito K, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Sugawara I, Nihei M, Miura T, Yabu K, Mori T, Ifukube T, Okata J. Design and Implementation of Age-Friendly Activity for Supporting Elderly's Daily Life by IoT. Human-Computer Interaction International, Florida USA, 2019. 6. 26–28. [査読有](#)
- Terazawa S. The relationship between Assisted Reproductive Technology and the income level of couples. The 16th Annual Conference of the East Asian Social Policy Research Network (EASP), Taipei, Taiwan, 2019. 7. 2–3. [査読有](#)
- Kim J. Defining Care Works: A Study of Migration Policy Process in Japan. The 16th Annual Conference of the East Asian Social Policy Research Network (EASP), Taipei, Taiwan, 2019. 7. 2–3.
- Aoyagi K, Wen W, An Q, Hamasaki S, Yamakawa H, Tamura Y, Yamashita A and Asama H. Improvement of Sense of Agency During Upper-Limb Movement for Motor Rehabilitation Using Virtual Reality. Proceedings of the 41st Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society (EMBC2019), Oral presentation, Berlin Germany, 2019. 7. 23–25. [査読有](#)
- Kang S, Noguchi H, Araki D, Takahashi T, Sanada H, Mori T. Lying Posture Analytics Using Convolutional Neural Network from Pressure Distribution Data for Pressure Ulcer Prevention. 41st EMB Conference, Berlin, Germany, 2019. 7. 23–27. [査読有](#)
- Kang SI, Yoshizaki R, Nakano K, Okatani T, Kamesawa A, Yoshioka D, Wu J, Sakurai Y, Ito K, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Sugawara I, Nihei M, Miura T, Yabu K, Mori T, Ifukube T, Okata J. Design and Implementation of Age-Friendly Activity for Supporting Elderly's Daily Life by IoT. 5th International Conference on Human Aspects of IT for the Aged Population (ITAP2019), Orlando, USA, 2019. 7. 26–31. [査読有](#)
- Wu J, Wang X, Wang Z, Zhao L. Discussion on the Feasibility of Soft Actuator as an Assistive Tool for Seniors in Minimally Invasive Surgery. International Conference on Human-Computer Interaction, Orlando, USA, 2019. 7. 26–31
- Kim J. Explaining Irregularities: Contradictory Care-Migration Policy-Making in Japan, 2013–2017. The 15th International Conference on Social Security, Wonju, Republic of Korea, 2019. 9. 8.
- Ito Y, Yoshizaki R, Miyamoto N, Shibata A, Nagasawa I, Nagato K, Sugita N. Ultrafast and precision drilling of glass by selective absorption of CW laser beam into femtosecond-laser-induced filament. 15th International Conference on Laser Ablation (COLA), Maui, USA, 2019. 9. 8–13,

- Kogami H, An Q, Yamakawa H, Yang N, Tamura Y, Yamasaki H, Alnajjar FS, Shimode S, Kinomoto M, Hattori N, Takahasi K, Fujii T, Otomune H, Miyai I, Ishiguro S, Saigusa T, Nozaki Y, Maruyama H, Yamashita A, Asama H. Assistive Chair to Support Hip Rising of Elderly People Improves Body Movement of Sit-to-Stand Motion. The 1st IFAC Workshop on Robot Control (WROCO2019), Daejeon, Korea, 2019. 9. 18–20. [査読有](#)
- Imaeda S. How to continue to live in local houses after falls and fractures for the elderly. JASEC - Japan Austria Science Exchange Center, Technische Universität Wien, Vienna, Austria, 2019. 9. 20.
- Sakurai Y, Baeg K, Lam A, Shoji K, Yoshikawa M, Tomari Y, Iwakawa H. In vitro recapitulation of the secondary siRNA biogenesis in plants. 2019 Ribocub Sherbrooke, Quebec, Canada, 2019. 9. 22–27. [査読有](#)
- Bao R, Komatsu R, Miyagusuku R, Chino M, Yamashita A, Asama H. Cost-effective and Robust Visual Based Localization with Consumer-level Cameras at Construction Sites. The 2019 IEEE 8th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE2019), Osaka, Japan, 2019. 10. 15–18. [査読有](#)
- Shinozaki N, Yuan X, Masayasu S, Sasaki S. Development and validation of dish-based dietary assessment tools: a systematic review. 13th European Nutrition Conference, Dublin, Ireland, 2019. 10. 17. [査読有](#)
- Sakai E, Kim H, Kamesawa A, Kim D, Nakayama R, Terazawa S, Ogawa K, Masuda K, Akizuki Y, Yang Y, Suzuki Y, Shah R, Masuda T, Sean Gandy C, Maeda K, Takase M, Saisho S, Ogino R, Murayama H, Goto J. Exploring the significance of the community center to Japanese senior citizens from the perspective of place attachment. The 11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress 2019, Taipei, Taiwan. 2019. 10. 23–27 [査読有](#)
- Nakano K. Social Work in Social Governance: Policy History Studies in the 1980s Japan. The 11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress 2019, Taipei, Taiwan, 2019. 10. 23–27. [査読有](#)
- Nakano K, Sakurai Y, Kang S, Yoshizaki R, Okatani T, Kamesawa A, Yoshioka D, Wu J, Ito K, Fujisaki-Sueda-Sakai M, Sugawara I, Nihei M, Miura T, Yabu K, Mori T, Ifukube T, Okata J. How the Elderly Accept the Concept of IoT as Assistive Technology: Interventional Study of the Attitude to IoT by Workshop. The 11th International Association of Gerontology and Geriatrics Asia/Oceania Regional Congress 2019, Taipei, Taiwan, 2019. 10. 23–27. [査読有](#)
- Inagaki A, Noguchi-Watanabe M, Sakka M, Yamamoto-Mitani N. Homecare nurses' community involvement activity and preferred place regarding the place of end-of-life: A

cross sectional study. The 11th International Association of Gerontology and Geriatrics, Taipei, Taiwan, 2019. 10. 23–27. [査読有](#)

- [Sakai E](#), [Kamesawa A](#), [Nakayama R](#), [Kim J](#), [Akizuki Y](#), [Yang Y](#), [Ogino R](#), [Goto J](#). Initiation of Interaction as the Beginning of Social Participation: Conversation Analysis of a Japanese Senior Club. The Gerontological Society of America (GSA) 2019 Annual Scientific Meeting, Austin, USA, 2019. 11. 13. [査読有](#)
- [Kitamura S](#), [Igarashi A](#), [Inagaki A](#), [Takaoka M](#), [Noguchi-Watanabe M](#), [Sakka M](#), [Naruse T](#), [Yamamoto-Mitani N](#). A New Approach to Develop Gerontological Nursing Care Quality Indicators. The Gerontological Society of America (GSA) 2019 Annual Scientific Meeting, Austin, USA, 2019. 11. 13–17. [査読有](#)
- [Baba A](#). How Does Parent-Child Relationship Affect Care? Focusing on Mother-Daughter Caregiving. The Gerontological Society of America (GSA) 2019 Annual Scientific Meeting, Austin, USA, 2019. 11. 13–17. [査読有](#)
- [Kim J](#). How are Tasks of Foreign Domestic Workers Confined: a case of Japanese Immigration Policy Reform. The Annual Sociological Conference for the Korean Sociological Association (KSA), Seoul, Republic of Korea, 2019. 12. 21.
- [金兌恩](#)・日本の高齢夫婦の家事分担の現状と規定要因に関する研究(=일본 고령자 부부의 가사분담현황과 그 영향요인에 관한 분석)・2019 年度韓国社会学会大会，ソウル，韓国，2019. 12. 21.
- [Ito Y](#), [Yoshizaki R](#), [Shibata A](#), [Nagasawa I](#), [Nagato K](#), [Sugita N](#). Ultrafast and precision processing of glass by selective absorption of fiber-laser pulse into femtosecond-laser-induced filament. SPIE LAMOM, San Francisco, USA, 2020. 2. 1–6.
- [Ishii H](#). Who goes abroad?: Focusing on the influence of foreign peers. The International Workshop on “Making Sense of International Perceptions in Asia” at the Institute for Advanced Studies on Asia, the University of Tokyo, Tokyo, Japan, 2020. 2. 10.
- [Ogawa K](#), [Guy Garrod](#), [Hironori Yagi](#). Sustainability and strategies of LFA grazing farms in Northern England. The Center for Rural Economy PGR symposium, Newcastle upon Tyne, UK, 2020. 2. 27

【国内学会・シンポジウム等における発表】

- [櫻井友理希](#)，[Baeg Kyungmin](#)，[Lam Y.W. Andy](#)，[庄司佳祐](#)，[吉川学](#)，[泊幸秀](#)，[岩川弘宙](#)・In vitro recapitulation of the secondary siRNA biogenesis in plants. 第 19 回東京大学生命科学シンポジウム，東京，2019. 4. 20. (ポスター)
- [Suthutvoravut Unyaporn](#)，[田中友規](#)，[高橋競](#)，[秋下雅弘](#)，[飯島勝矢](#)・地域在住高齢者における多剤併用と食事量・食品摂取との関連：柏スタディー・第 3 回日本老年薬学会学術大会，名古屋，2019. 5. 11–12. [査読有](#)

- Funaki T, Ito T, Murakami Y. The role of CADM1 in enhancement of malignant features of small cell lung cancer. 2019 年医科学研究所創立記念シンポジウム，東京，2019. 5. 14.
- Kang Soo In，野口博史，高橋聡明，真田弘，森武俊．Posture Analytics and Posture Based Pressure Ulcer Risk Estimation by Pressure Sensor Mattress Using Deep Learning. 第 28 回日本創傷・オストミー・失禁管理学会学術集会，奈良，2019. 5. 25—26. 査読有
- 久貝波留菜，五十嵐歩，高岡茉奈美，鈴木美穂，松本博成，村田聡，柳瀬奈緒美，青木伸吾，宮原正量，山本則子．コンビニエンスストアにおける認知症高齢者への支援を推進するプログラムの効果：都市部自治体における産官学連携プロジェクト．第 20 回認知症ケア学会大会，京都，2019. 5. 25—26. 査読有
- 長野樹，淵田正隆，筑紫彰太，モロ アレッサンドロ，小松廉，藤井浩光，山下淳，浅間一．ロボット遠隔操作のための任意視点映像上での遮蔽物除去．日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'19 (ROBOMECH2019), 広島，2019. 6. 5—8.
- Kang Soo In，野寄修平，高橋聡明，野口博史，真田弘美，森武俊．Developing skin condition monitoring tool using multi-frequency electrical impedance tomography. 第 7 回看護理工学会学術集会，沖縄，2019. 6. 6—8. 査読有
- Suthutvoravut Unyaporn，田中友規，高橋競，藤崎万裕，吉澤裕世，西本美紗，秋下雅弘，飯島勝矢．地域在住高齢者における和食スコアとサルコペニアとの関連：柏スタディー．第 61 回日本老年医学会学術集会，仙台，2019. 6. 6—8. 査読有
- 坂井愛理，亀澤明彦，中山莉子，秋月優里，楊映雪，荻野亮吾，後藤純．高齢者サークルの参加に関する会話分析——見知らぬ他者との会話の開始を題材に——．第 61 回日本老年社会科学大会，仙台，2019. 6. 7—8. 査読有
- 孫輔卿，内山瑛美子，今枝秀二郎，谷口紗貴子，スタッヴォラヴット・アンヤポーン，角川由香，松原全宏，大月敏雄，田中敏明，飯島勝矢．医工連携による骨折まで至った転倒の身体的および環境的要因の検討．第 61 回日本老年医学会，仙台，2019. 6—8. 査読有
- 中野航綺．ソーシャルワークと政策過程への参加—1980 年代における社会福祉専門教育に着目して．日本福祉社会学会，東京，2019. 6. 15.—16. 査読有
- 齋藤勝宏，王聰，芳賀猛．アフリカ豚コレラの発生がわが国経済に及ぼす影響予測—地域間産業連関分析アプローチ—．日本フードシステム学会，宮城，2019. 6. 22—23. 査読有
- 伊藤佑介，吉崎れいな，柴田章広，長澤郁夫，長藤圭介，杉田直彦．フェムト秒レーザー誘起高速現象を活用したガラスの超高速微細精密加工．第 44 回光学シンポジウム，東京大学，東京，2019. 6. 28,
- 櫻井友理希，Baeg Kyungmin, Andy, Y.W. Lam，庄司佳祐，吉川学，泊幸秀，岩川弘宙．植物における二次的小分子 RNA 生成経路の試験管内再現．第 21 回日本 RNA 学会年会，東京，2019. 7. 17—19. (ポスター) 査読有
- 須沢栞．自治体をまたぐ広域避難—仙台市と盛岡市の事例から考える．2019 年度日本建築学

- 会大会（北陸）パネルディスカッション：災害からの住まいの復興に関する共有知構築〔若手奨励〕特別研究委員会，金沢，2019. 9. 3-6.
- Qi An, 山川博司, 楊濤嘉, 湖上碩樹, 吉田和憲, 山下淳, 石黒周, 下田真吾, 山崎弘嗣, 園尾萌香, Fady Shibata-Alnajjar, 木野本誠, 服部憲明, 高橋幸治, 藤井崇典, 乙宗宏範, 宮井 一郎, 淺間一・片麻痺患者の起立動作における手すりにかかる力を用いた筋シナジーの推定・第37回日本ロボット学会・学術講演会，東京，2019. 9. 3-7. 1-2 (RSJ2019AC2J2-04).
 - 内山瑛美子, 高野渉, 中村仁彦, 孫輔卿, 今枝秀二郎, 田中友規, 飯島勝矢, 松原全宏・質問紙調査票の統計的正規化による転倒リスク識別器の構築・第37回ロボット学会学術講演会前刷集，東京，1J2-06, 2019. 9. 4-6 査読有
 - 前田一步・明治後期・東京の都市公園——管理と抵抗のあわい・日本社会学理論学会第14回大会，東京，2019. 9. 7-8.
 - 小川景司, 八木洋憲・集落営農法人による事業選択の特徴と成果—滋賀県における実態分析・2019年度日本農業経営学会，仙台，2019. 9. 8.
 - 金東律, 八木洋憲・木南章・営農管理情報システムを用いた作業関連情報の取得と活用：水田経営における従事者のスキルとコミュニケーションに着目して・2019年度日本農業経営学会研究大会，仙台，2019. 9. 8. 査読有
 - 稲吉玲美, 本田由美, 勝又結菜, 馬場絢子, 高橋美保・マインドフルネス実践が臨床心理実践者のストレスマネジメントおよび臨床実践に与える影響・日本心理学会第83回大会，大阪，2019. 9. 11-13. 査読有
 - 馬場絢子, 太齋慧, 森孝太, 佐藤愛, 橋本佳奈・孫世代から見た家族における介護の意味づけ・日本心理学会第83回大会，大阪，2019. 9. 11-13. 査読有
 - 松本奈々子・高齢者の社会的活動への参加と教育支援体制の構想・日本社会教育学会，東京，2019. 9. 14.
 - 宮部峻・宗教教団の「近代化」と法——真宗大谷派の「宗憲」に着目して・第78回日本宗教学会，東京，2019. 9. 14.
 - 金兌恩・高齢期の家事労働における規定要因の男女比較・第29回日本家族社会学会大会，神戸，2019. 9. 15.
 - 伊藤佑介, 吉崎れいな, 宮本直之, 柴田章広, 長澤郁夫, 長藤圭介, 杉田直彦, 電子励起領域への選択的光吸収によるガラスの超高速微細精密レーザ加工・第80回応用物理学会秋季学術講演会，北海道大学，北海道，2019. 9. 18,
 - 呂偉達, 小嶋裕太, 福崎千穂, 石井直方・事前の負荷重量予測が運動時における筋活動に与える効果・第74回日本体力医学会，筑波，2019. 9. 19-21.
 - 船城桐子, 伊東剛, 村上善則・小細胞肺癌の悪性化における細胞接着分子CADM1の機能解析・第78回日本癌学会学術総会，京都，2019. 9. 26-28. 査読有
 - 坂井愛理, 亀澤明彦, 中山莉子, 金志勲, 秋月優里, 楊映雪, 荻野亮吾, 後藤純・会話の開始

に先立つ他者の注意の引き出し——地域の書道サークルにおける相互行為を事例として・第92回日本社会学会大会，2019. 10. 5. [査読有](#)

- [中野航綺](#)・ソーシャルワークの専門性と社会政策へ態度—1970年代日本における社会福祉の専門性言説の分析から・日本社会学会第92回大会，東京，2019. 10. 5–6. [査読有](#)
- [前田一步](#)・社会的意味の計量分析——近代東京・都市公園に言及する新聞記事（1876–2019）のトピック変遷・日本社会学会第92回大会，東京，2019. 10. 5–6. [査読有](#)
- [孫輔卿](#)，[内山瑛美子](#)，[今枝秀二郎](#)，[谷口紗貴子](#)，[田中友規](#)，[角川由香](#)，[馬場絢子](#)，[スタッヴォラヴット・アンヤポーン](#)，[松原全宏](#)，[秋下雅弘](#)，[大月敏雄](#)，[田中敏明](#)，[飯島勝矢](#)・医工連携による骨折まで至った自宅トイレ関連転倒の特徴解明—入院時ベッドサイド調査と退院後自宅訪問調査から—・日本転倒予防学会第6回学術集会，新潟，2019. 10. 5–6. [査読有](#)
- [今枝秀二郎](#)，[孫輔卿](#)，[内山瑛美子](#)，[谷口紗貴子](#)，[スタッヴォラヴット・アンヤポーン](#)，[馬場絢子](#)，[角川由香](#)，[田中友規](#)，[田中敏明](#)，[飯島勝矢](#)，[松原全宏](#)，[大月敏雄](#)・退院後の自宅訪問調査による転倒・大腿骨骨折を経験した高齢患者の住環境変化・日本転倒予防学会第6回学術集会，2019. 10. 5–6，新潟，[査読有](#)
- [奥泉宏康](#)，[鮫島直之](#)，[平野裕滋](#)，[今枝秀二郎](#)，[鈴木開作](#)・東京消防庁の救急活動報告による65歳以上高齢者の日常生活転倒事故の実態・日本転倒予防学会第6回学術集会，新潟，2019. 10. 5–6. (ポスター) [査読有](#)
- [北村智美](#)，[柳直美](#)・嚥下調査票導入による看護師の摂食嚥下評価の変化・第9回東大看護研究シンポジウム，東京，2019. 10. 20.
- [吉江悟](#)，[二宮英樹](#)，[北村智美](#)，[宮城禎弥](#)，[浜田将太](#)，[森隆浩](#)，[金雪瑩](#)，[岩上将夫](#)，[安富元彦](#)，[松本佳子](#)，[川越雅弘](#)，[福井小紀子](#)，[石崎達郎](#)，[田宮菜奈子](#)，[飯島勝矢](#)・介護保険利用後期高齢者のAmbulatory Care-Sensitive Conditionsと療養場所との関連・第78回日本公衆衛生学会総会，高知，2019. 10. 23–25. [査読有](#)
- [Suthutvoravut Unyaporn](#)，[田中友規](#)，[高橋競](#)，[藤崎万裕](#)，[吉澤裕世](#)，[西本美紗](#)，[秋下雅弘](#)，[飯島勝矢](#)・地域高齢者における食事での会話とフレイルの関連：柏スタディー・第6回日本サルコペニア・フレイル学会大会，新潟，2019. 11. 9–10. [査読有](#)
- [呂偉達](#)，[田中友規](#)，[徳丸剛](#)，[森千夏](#)，[田代紫織](#)，[飯島勝矢](#)・The Connection Between Exercise Consciousness and Physical Function Impairment Risk: A cross-sectional exhaustive survey・第6回日本フレイル・サルコペニア学会大会，新潟，2019. 11. 9–10.
- [孫輔卿](#)，[内山瑛美子](#)，[今枝秀二郎](#)，[角川由香](#)，[馬場絢子](#)，[スタッヴォラヴット・アンヤポーン](#)，[松原全宏](#)，[秋下雅弘](#)，[大月敏雄](#)，[田中敏明](#)，[飯島勝矢](#)・自宅トイレ関連転倒・骨折高齢者の動作解析から見てきた回旋の重要性・第6回日本サルコペニア・フレイル学会大会，新潟，2019. 11. 9–10. [査読有](#)
- [北村智美](#)，[森田光治良](#)，[城大祐](#)，[吉江悟](#)・高齢 COPD 患者の呼吸リハビリテーションに関わるサービス利用実態：医療介護レセプトデータを用いた後方視的研究・第29回日本呼吸ケ

ア・リハビリテーション学会学術集会，名古屋，2019. 11. 11—12. [査読有](#)

- [Sakurai Y](#), Baeg K, Lam A, Shoji K, Yoshikawa M, Tomari Y, Iwakawa H. In vitro recapitulation of the secondary siRNA biogenesis in plants. 第8回植物RNA研究ネットワークシンポジウム，滋賀，2019. 11. 16—17. (ポスター)
- [金子和樹](#)，本郷結希，木下裕介，梅田靖・現代的な個人化の実現に向けた個人化手続き設計方法論の提案・Design シンポジウム 2019，慶應義塾大学日吉キャンパス，神奈川，2019. 11. 17.
- [姉崎沙緒里](#)，目麻里子，野口麻衣子，[稲垣安沙](#)，津野陽子，五十嵐歩，大森純子，山本則子・地域在住高齢者の「医療や介護に関する安心感」に関する質的研究—医療従事者による地域活動に着目して—・第39回日本看護科学学会学術集会，石川県音楽堂，石川，2019. 11. 30—12. 1. [査読有](#)
- 目麻里子，[姉崎沙緒理](#)，野口麻衣子，津野陽子，[稲垣安沙](#)，五十嵐歩，大森純子，山本則子・Social Community Nurses (SCNs) が自治会等の地域組織と協働して活動するためのプロセスの明確化・第39回日本看護科学学会学術集会，石川県音楽堂，石川，2019. 11. 30—12. 1. [査読有](#)
- [Yoritaka Harazono](#), Kasahara Masahiro. An alignment algorithm for sequences with context-dependent errors. 第42回日本分子生物学会年会，福岡，2019. 12. 3—6.
- [Yoritaka Harazono](#), Kasahara Masahiro. 配列依存性読み取りエラーを考慮したbreakpoint検出アルゴリズムの開発・先進ゲノム解析研究推進プラットフォーム拡大班員会議，名古屋，2019. 12. 3—6.
- 野口麻衣子，小林弘美，藤崎万裕，[稲垣安沙](#)，山本則子・職場内コミュニケーションの時間と訪問看護師の就業継続意向との関連・横断研究・第9回日本在宅看護学会学術集会，東京都看護協会会館，東京，2019. 12. 7—8. [査読有](#)
- 柏木聖代，長江弘子，[北村智美](#)・訪問看護の質評価～訪問看護実践と成果をいかに可視化するか・第9回日本在宅看護学学術集会，パネルディスカッション3，東京，2019. 12. 7—8.
- 伊藤研一郎，[湖上碩樹](#)，[カンスーイン](#)，[吉崎れいな](#)，[櫻井友理希](#)，[中野航綺](#)，[吉岡大介](#)，藤崎万裕，菅原育子，二瓶美里，三浦貴大，藪謙一郎，森武俊，伊福部達，原田昇・IoTを活用した在宅高齢者のQoLとコミュニティ支援に関する研究・ヒューマンインタフェース学会，高齢者支援ICT専門研究委員会第2回研究会，東京，2019. 12. 15.
- [櫻井理加](#)，[松岡洋子](#)，[Kazembe Neo](#)，[呂偉達](#)，[張俊華](#)，[稲垣安沙](#)，木全真理，似内遼一，後藤純・東日本大震災後の静穏期における地域課題の抽出と解決策～住民同士のつながりの再構築に向けて～・第8回日本公衆衛生看護学会学術集会，松山，2020. 1. 11—12. [査読有](#)
- 伊藤佑介，[吉崎れいな](#)，柴田章広，長澤郁夫，長藤圭介，杉田直彦・長短2パルスのレーザー照射によるガラスの超高速微細精密加工・第40回レーザー学会年次大会，仙台国際センター，仙台，2020. 1. 20.
- [須沢栞](#)・盛岡市を対象とした越境避難に関する研究—今後の災害でだれを支援していくべきな

のか？・第6回東京大学復興デザインフォーラム，東京，2020.2.4.

- 魏超然，伊藤佑介，吉崎れいな，柴田章広，長澤郁夫，長藤圭介，杉田直彦・ガラスへの選択的吸収によって形成した高温領域の高速掃引によるレーザ溝加工・第67回応用物理学会春季学術講演会，上智大学，東京，2020.3.12-15.（ポスター）
- 吉武俊哉，杉田直彦，伊藤佑介，吉崎れいな，宮本直之・ガラスの局所的電子励起による超高速レーザ加工メカニズムの解明・第27回精密工学会学生会員卒業研究発表講演会，東京農工大学，東京，2020.3.17.

4・コース生受賞歴

■ 吉崎れいな

- 1 「Outstanding student paper award (poster)」(Yoshizaki R, Ito Y, Shibata A, Nagasawa I, Nagato K, Sugita N. High-speed observation of glass micro-drilling by continuous-wave fiber laser) 2019. 5.

4. 広報活動

100

GLAFS
高齢者
社会
研究
協会

東京大学が挑戦した 高齢社会に関する教育

日時

会場

[プログラム]

- 午前の部「共同研究成果報告会」

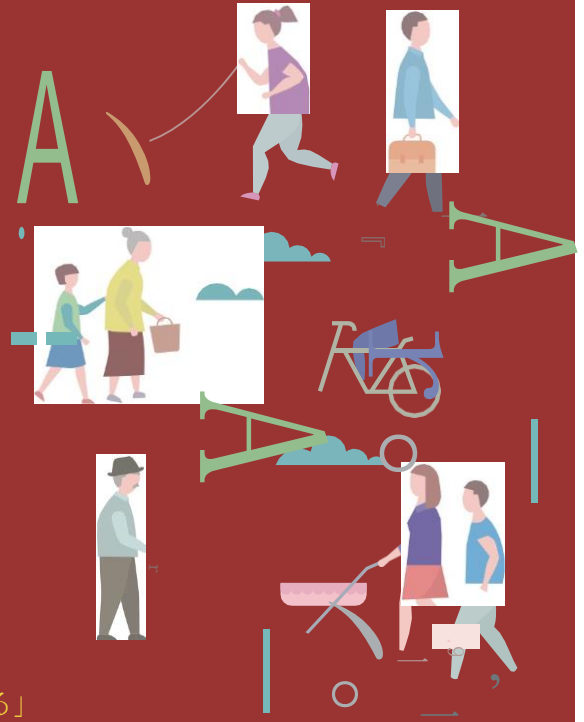
-
-

午後の部「分野横断的教訂プログラムを考える」

ミドル・セッション：GLAFSを振り返る

-
-

パネルディスカッション



前登壇

Eメール：glafs-event@iog.u-tokyo.ac.jp

FAX：04-7136-6677

お申し込みの際、お名前・ご所属・ご連絡先（電話番号、メールアドレス）・希望時間帯（午前のみ・午後のみ・全てに出席）をご記入ください。

申込期限：令和2年3月5日（木）まで

お問い合わせは、上記のEメールアドレスまたはFAXまでご連絡ください。

受講 必メ

奎気の
学部生
大学院生

ト

13 い・日・い・凰・ふ・ぶ

高齢社会総合研究学概論I高齢者の体と心：老いときあう

必修科目4単位

必修科目1

「高齢者の体と心：老いときあう」

必修科目2

履修単位の付与（各学部）

4/1	菅原貴子	高齢社会総合研究機構	高齢期の社会関係とwell-being
4/17	飯島勝矢	高齢社会総合研究機構	なぜ老いる？ならば上手に老いるには？
4/24	福輪勲	医学系研究科	老化と生物学
5/8	秋下雅弘	医学系研究科	疾病障害とヘルスプロモーション
5/15	牧野篤	教育学研究科	シニアの学ふ、働く、遊ぶ
5/22	木全真J里	工学系研究科	高齢者と看護学
5/29	伊福部達	高齢社会総合研究機構	身体機能を備う福祉工学機構
6/5	上野千鶴子（ゲスト）	NPO法人ウィメンズアクションネットワーク(WAN)	ケアの当事者学
6/12	井口高忠	人文社会系研究科	認知症家族介護の臨床社会学
6/19	戸枝陽基（ゲスト）	社会福祉法人むそう	身体・認知機能を活かしたコミュニティビジネス
6/26	秋山弘子	高齢社会総合研究機構	ジェロントロジー 長寿社会を支える学際科学
7/3	山本則子	医学系研究科	人生の最終段階のケア
7/1D	阿部啓子	農学系研究科	栄養とエイジング

高齢社会総合研究学概論II高齢社会のリ・デザイン

9/25	後 賢純	高齢社会総合研究機構	活力ある超高齢社会の構想と共創
10/2	辻哲夫	高齢社会総合研究機構	21世紀の医療・介護・福祉のかたちを考える
10/9	大月敏雄	工学系研究科	高齢期の住まい方
10/16	濱口桂一郎（ゲスト）	独立行政法人労働政策研究・研修機構	年齢に基づく雇用システムと高齢者雇用
1D/23	岩本●志（ゲスト）	国立国会図書館	人口減少社会における年金と社会保障財政
10/30	藤田英	新領域創成科学研究科	高齢者の移動を支える
11/6	廣瀬通孝	情報理工学研究所	シニアXICT
11/20	原田 麗	工学系研究科	高齢者の交通まちづくり
11/カ	關ふ佐子（ゲスト）	横浜国立大学	自己決定と本人保II
12/4	柴田鏡子（ゲスト）	NPO法人楽	小規模多機能型居宅介護
12/11	村山洋史	高齢社会総合研究機構	高齢期の健康づくり 公衆衛生学の視点から
12/18	荻井亮吾	先端科学技術研究センター	超高齢社会を支えるコミュニティの拠点と義識
18	関祥幸吉（ゲスト）	SOMPOケア株式会社	地域包括ケアシステムの地域実資

10 ! 已。巴烹烹忍巴 ;Uv it)門

お問合せ：edu@iog.u-tokyo.ac.jp TEL/FAX 03-5841-1662
ホームページ：http://www.glafts.u-tokyo.ac.jp

開講科目 夏学期

特論II | 超高齢社会の住まい・まちづくり

内 容 超高齢社会に対応した地域社会の
物的・社会的な生活環境について、
多面的な講義を行う

開 講 日 4/9 - 6/4 毎週火曜 6・7限 (18:45 - 22:25)

場 所 工学部14号館 141室

キーワード まちづくり 交通・移動 バリアフリー
ユニバーサルデザイン 近居
高齢期の住まい 地域施設配置

特論III | 人生100年時代のライフコース論

内 容 人生100年時代の到来にあたり、
「生きる」「老いる」「死ぬ」の実態と課題を、
心理学、哲学、教育学、社会学の
幅広い観点から議論する

開 講 日 4/11 - 7/11 毎週木曜 5限 (16:50 - 18:35)

場 所 工学部8号館 722号室

キーワード 人生100年時代 現象学
エンドオブライフ・ケア 社会関係
認知症ケア サクセスフルエイジング 生涯学習

特論IV | 高齢社会のケア・サポート・システム

内 容 要介護状態でも住み慣れた地域で暮らし続けられる
医療・介護を中心とした高齢社会における
ケア・サポート・システムについて学ぶ

開 講 日 6/11 - 7/16 毎週火曜 5・6限 (16:50 - 20:30)

場 所 工学部8号館 722号室

キーワード ケア・サポート・システム 地域包括ケア
認知症ケア 多職種連携 地域アセスメント
在宅医療 訪問看護

特論VIII | 高齢社会の国際比較

内 容 超高齢社会における人口構造・社会構造・
社会政策に関して、国際比較の方法と、
社会的なアプローチを学ぶ

開 講 日 4/5 - 7/19 毎週金曜 5限 (16:50 - 18:35)

場 所 文学部法文2号館1番大教室

キーワード 欧米諸国・東アジア・東南アジアの高齢社会
高齢者ケア・高齢者就労・介護者の国際比較

特論XI | 超高齢社会を支える情報学

内 容 社会支援と人間に対する支援の二軸で
高齢社会を支える情報システムについて学ぶ

開 講 日 4/9 - 7/16 毎週火曜 4限 (14:55 - 16:40)

場 所 工学部6号館3階セミナー室B

キーワード 福祉工学 情報学 IoT ロボティクス
生体情報 人間拡張工学



2019年度

ジェロントロジー特論 開講

高齢社会総合研究学

東京大学では、高齢社会総合研究機構 (IOG) をハブ組織とし、9研究科・30専攻が連携して、
リーディングプログラム「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム」(GLAFS) を推進しているところです。
本プログラムが開講する高齢社会問題に関する分野横断的な大学院講義 (高齢社会総合研究学 概論I・II、特論I～XI) は、
リーディングプログラムのコース生に限らず、東京大学の全学の大学院生が受講できる科目となっております。
この問題に関心のある学生諸君は、是非、これらの科目を受講されることをお勧めいたします。

※場所は全て、本郷キャンパス ※各科目の単位数は2単位

IOG 東京大学 高齢社会総合研究機構
INSTITUTE OF GERONTOLOGY, The University of Tokyo

お問 合 せ : edu@iog.u-tokyo.ac.jp TEL/FAX 03-5841-1662
ホームページ : <http://www.glafts.u-tokyo.ac.jp>

開講科目 冬学期

特論Ⅰ | 福祉社会を支える制度体系

内 容	国内の福祉社会を支える諸制度について、体系的に捉え、各制度の実態およびその課題について学習する
開 講 日	集中講義 11月～1月の水曜5限、木曜5限・6限を中心に開講 詳細はUTAS上でシラバスを確認すること
場 所	工学部8号館722号室
キーワード	医療 介護 社会政策 子育て 老後の生活と死後の準備 住まい コミュニティとまちづくり 制度活用 制度設計

特論Ⅵ | 高齢者法

内 容	高齢者に関わる法制度や政策課題について学ぶ
開 講 日	9/26-12/19 毎週木曜3限(13:00-14:45)
場 所	工学部8号館722号室
キーワード	意思決定 在宅医療 医療給付制度・介護保険制度 高齢者の住まい 年齢差別 成年後見・財産管理・相続

特論Ⅸ | 高齢者の食と健康（維持）

内 容	高齢者の虚弱（フレイル）予防のために、食を中心とした包括的な対策について学ぶ
開 講 日	11/12-12/17 毎週火曜5・6限(16:50-20:30)
場 所	工学部8号館722号室
キーワード	フレイル・低栄養予防 食育 栄養管理 食習慣 栄養摂取 身体活動 運動習慣

特論Ⅹ | ジェロンテクノロジー

内 容	高齢者の生活や社会活動を支援する最先端の情報・機械の技術とシステムについて学ぶ
開 講 日	9/27-12/7 毎週金曜5・6限(16:50-20:30)
場 所	工学部8号館722号室
キーワード	福祉・リハビリテーション工学 ICT活用 就労支援 モビリティ構築 福祉ロボット サービスロボティクス

夏学期の開講科目	特論Ⅱ …… 超高齢社会の住まい・まちづくり 特論Ⅲ …… 人生100年時代のライフコース論 特論Ⅳ …… 高齢社会のケア・サポート・システム 特論Ⅶ …… 高齢社会の国際比較 特論Ⅷ …… 超高齢社会を支える情報学
----------	--



2019年度

ジェロントロジー特論 開講

高齢社会総合研究学

東京大学では、高齢社会総合研究機構（IOG）をハブ組織とし、9研究科・30専攻が連携して、リーディングプログラム「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム」(GLAFS)を推進しているところです。本プログラムが開講する高齢社会問題に関する分野横断的な大学院講義（高齢社会総合研究学 概論Ⅰ・Ⅱ、特論Ⅰ～ⅩⅠ）は、リーディングプログラムのコース生に限らず、東京大学の全学の大学院生が受講できる科目となっております。この問題に関心のある学生諸君は、是非、これらの科目を受講されることをお勧めいたします。

※場所は全て、本郷キャンパス ※各科目の単位数は2単位

IOG 東京大学 高齢社会総合研究機構
INSTITUTE OF GERONTOLOGY, The University of Tokyo

お問 合 せ : edu@iog.u-tokyo.ac.jp TEL/FAX 03-5841-1662
ホームページ : <http://www.glafts.u-tokyo.ac.jp>

【添付資料】 国内シンポジウム・レポート

発行者：東京大学 高齢社会総合研究機構

〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1 工学部 8 号館 7 階

発行日：2020 年 4 月 20 日

D T P：理想社

© Institute of Gerontology, The University of Tokyo



Graduate Program in Gerontology: Global Leadership initiative for an Age-Friendly Society

〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1 工学部 8 号館 7 階
東京大学 高齢社会総合研究機構

© Institute of Gerontology, The University of Tokyo